

第四回熊本大学東光原文学賞作品集

第四回東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長 森

正人 / 4

第四回東光原文学賞作品集の公刊にあたり

大賞

秘密都市

伊波 南 / 7

(理学部理学科二年)

優秀賞

ビューティフル・ライフ!

坪井 希 / 34

(文学部歴史学科三年)

優秀賞

夜空にねがう

亜木山レイ／69

(医学部保健学科一年)

優秀賞

幕末のユーカラ

清洲／112

(医学部医学科三年)

優秀賞

うそつきの愛

虹野アキラ／176

(法学部法学科三年)

選考を終えて

小野 友道 「レベルが上がって来た東光原文学賞」／209

西川 盛雄 『何を』『如何に』表現するか、への挑戦」／212

岩岡 中正 「コメント」／215

第四回東光原文学賞作品集の公刊にあたり

附属図書館長 森 正 人

附属図書館は、平成二十三年度事業の一つとして、東光原文学賞の作品募集を行いました。この事業は、学生諸君に読書への関心をもっていただき、日本語の文章を書く能力の向上を図り、またそれを機縁として図書館をおおいに利用していただくという趣旨で、小説作品の投稿を募って、優秀作品の表彰を行うものです。本年度で第四回を迎えました。

今年度は、次のようにほぼすべての学部と一つの大学院研究科から、二十一編の応募がありました。

文学部 九編 法学部 四編 理学部 一編 医学部 三編

薬学部 一編 工学部 一編 大学院自然科学研究科 二編

応募数こそ昨年を下回ったものの、全体として水準が高かったという、選考委員の先生方の一致のご意見でした。そこで、例年より一編増やして四編を優秀賞とし、大賞一編を選び、ここに印刷して公表することになりました。

入賞された皆さん、おめでとうございます。そして、惜しくも選に入らなかった方々には、ご



寄稿いただいたことにお礼を申しあげ、また来年度の挑戦に向けて精励を期待したいと思います。このように、学生が、単位修得のために、あるいは専攻する分野に関してレポートや卒業論文を執筆するのは別に、創作を行うことにはどのような意味があるのでしょうか。

人がこの世に生きているかぎり、心一つにとどめておきたいことが必ず生まれます。それは誰かに漏らさずにはいられません。それを直接たとえば友達に訴えるのも一つの方法です。しかし、そうした思念を一旦変換して、たとえば俳句とか短歌とか定型という制約の中に収め、あるいは小説という虚構の世界に忍び込ませて、文字言語によって表現する方法もあります。この操作にはやはり知の働きの必要とします。その知は、大学において必要とされるような学術的知とは性格が異なります。しかし、そこに涵養される知力は、それぞれの専門分野での知の働きの格段に鋭く深くしていくのではないのでしょうか。

この文学賞の名称は、本学の前身であった第五高等学校時代から、校地の東、現在附属図書館や全学教育棟の建つあたりが東光原と呼ばれていたことに由来します。そのかつての五高の生徒たちは、『龍南会雑誌』に俳句、短歌、詩、小説などさまざまなジャンルの作品を発表しています。彼らの中から何人も著名な作家が世に出ました。それは注目すべきことですが、むしろ私の目をひくのは、後年さまざまな分野で顕著な業績をあげること

なる名前です。彼らが二十歳前後に培った言語表現の力と、社会に出てからの活躍とが無関係であったとは、私には思えません。それを熊本大学の学生にも私たちは期待しているのです。

なお、『龍南会雑誌』は熊本大学学術リポジトリに登録されていて、全文が閲覧できます。附属図書館のホームページからアクセスしてみてください。



上段：岩岡 小野 西川
下段：亜木山 坪井 森 伊波 清洲 虹野

秘密都市

伊波 南

秘密都市は存在しない。

したがって、カジゴリは存在しない。私はもっと存在しない。そのようになっていく。

しかし、どうも私もカジゴリも「いる」ようである。あるものを無いと言い続けても、本当に無くなるわけではないのだ。カジゴリはいつもそんな風に行く。そんな簡単なことを理解している人がこの国には驚くほど少ないということも。

秘密都市とはなんであるか。

秘密都市とは、正式な名前ではない。秘密都市に住む人や、秘密都市の存在を知る一部の近隣の地域の人たちが、便宜的にこのあたりを指してそう呼んでいるだけである。

私は、秘密都市が秘密都市になった後に生まれた人間だから、その辺のことをよく知らない。しかし、秘密都市は、最初、秘密都市では無かったようである。つまりそれは秘密にされていない。実在して名前のある、北の漁村だった。いつごろから秘密にされたのか。それはシバ先生の話によると、八百六年の天災の後からだそうだ。八百六年の天災の日、カジゴリは十二歳で、

シバ先生は四十歳で、そして私はまだ生まれていなかった。

八百六年の天災の日、天と地が引っ繰り返り、その時地下に眠っていた怪物が目を覚ました。そしてこの北の地方の漁村は、ある日突然怪物の住処となった。怪物は暴れ、火を噴き、水を噴き、毒を吐いた。人々は家を手放し、大半は南へ、一部はさらに北へと逃げた。国は人々を怪物から守るため、怪物の住処を立ち入り禁止とし、役人を遣わして怪物を鎮めた。怪物はひとまず暴れるのをやめたが、それでもいまだうかれまちの中心で毒を吐き続けている。そういうわけで、秘密都市は永久に人が入れなくなった。人のいない場所は存在しない場所である。なんだか腑に落ちないが、この国ではそういうことになっているらしい。

存在しないことになった北の地方の漁村からは、確かに一度人が消えた。だが一部の人は家に戻った。すでに、怪物の毒が届く範囲は封鎖されていたが、それでも人は監視の目を掻い潜り、住み慣れた家へと帰ってきた。それからしばらくすると、南の首都から不法入国者たちが来て住みつくようになった。その次はなんらかの理由で戸籍を持たない人たちが。そうして、人がいないはずの北の漁村には人が集まった。

こうして、北の漁村は「秘密都市」となった。存在しないはずの都市である。

では存在しないはずの都市に住む人間は、やはり存在しないか？

答えはノーである。私もカジゴリもシバ先生も存在する。

あるものを無いといったって、無いことにはならないのだ。

夕方、夕食を作り終え、カジゴリを待ちながらリビングで本を読んでいると、玄関でゴおっと音がした。カジゴリが帰ってきたのだ。

玄関に行くと、カジゴリが二重扉の間で風を受けているところだった。このマンションの玄関は二重扉になっていて、その外側がスチール、内側がガラス戸になっている。二重扉の間には、両側の壁に大型のファンが取り付けてあって、そこから強い風が出るようになっていて、天井には排気口があって、二重扉の間に人が入ると、ファンが強い風を送ると同時に、風によって吹き飛ばされた目には見えないほどの細かな塵を外に排出するようになっていて、

カジゴリは風を受けながら、マスクを外し、合羽を脱いで、それを床に置いた。それから、壁についている赤いボタンを押して、ファンの動きを止め、ガラスの扉を開けて家の中に入った。

「ただいま」

「おかえりなさい」

カジゴリは、いつものように無愛想にそう言った。けどどいつものカジゴリと違う点が一つだけあった。

「カジゴリ、何それ」

カジゴリは右手に緑色の紙袋を下げていた。カジゴリは私の質問には答えずに、ただ黙って頷いた。

秘密都市には、多くの役人が派遣されていて、国が作った役人のためのマンションもいくつか

ある。これもその一つだ。

役人に宛がわれるマンシヨンは、少し特殊な作りになっている。

まず、窓はあるが開かない。壁が四角にくり抜かれたようになっていて、そこにガラスがはめ込まれているだけである。

次に、どの部屋にも換気扇があって、すべてにフィルターが付いている。フィルターは平べったい箱のような形をしていて、天井の換気扇にくっついている。換気扇は常に回っていて、こおお、という小さな音を立てている。

しかし役人用のマンシヨンにおいて、最も特徴的な設備は、玄関である。

玄関は二重になっていて、扉の間の左右の壁に細かい縦じまのような格子がはめ込まれている。その奥には、外から帰ってきたときに、体についた細かな塵を吹き飛ばすためのファンが設置されている。

なぜこのような構造になっているのか。それは、怪物の毒から身を守るためである。

怪物は休まずに一日中毒を吐き続けている。その毒は、身体にただちに影響はないが、長く吸い込み続けると病気になるらしい。そういうわけで、国から派遣された、秘密都市を管理するための役人は、外に出るときにはマスクをし、合羽を着て家の中に怪物の毒を持ち込まないようにしている。

今日の夕食はパンとキャベツのスープとソーセージである。

怪物の毒に侵された土地では、野菜を作ることも、家畜を育てることもできない。吸い込んではいけない毒は、口にしてもいけないのだ。実際には外で野菜は作られているし、鶏くらいなら飼われているらしいのだが、少なくともそれらは役人の口には入らない。

役人は国から毎週、食糧を支給されている。秘密都市の外の、汚染されていない地域で採れた安全な食べ物だ。ただ、新鮮な食べ物ばかりが与えられるわけではなく、缶詰や加工食品も多い。新鮮な食べ物を大量に輸送するよりは、加工された食品を扱うほうが国としても楽なのだ。

そういうわけで、今日のメインはソーセージである。でも今日はキャベツがあるからいい。スープに加工されていない生の野菜を使うことができるのは、ここの生活では幸せなことだ。

私とカジゴリは、席について、スープとソーセージとパンを黙々と食べた。私とカジゴリは、食事中に話すことはあまりない。大抵いつも黙って食べている。そもそもカジゴリは、どちらかというと無口なのだ。というよりは、黙っているときと喋っているときの落差が激しい。話すときは、用件だけを一度に全部話してしまう。黙っているときはとことん黙っている。

そんなカジゴリが、今日は口を開いた。

「ミン、今日は何の日だ」

言われて、なんの日だかとうさに思い浮かばなかった。毎日外にも出ず、家に引きこもってばかりの生活では、今日が何日だかも忘れがちなものである。しかも、秘密都市では、祝日やなんかないものはあまり意味をなさないので。

「七月八日、ええと、ちがう、九日」

「七月十一日だ、ミン」

そういつてカジゴリは、足元の紙袋をとって、私に渡した。私はしばらく戸惑ってしまった。これはなんだろう。ああ！

「そうか、今日は」

「お前の誕生日だ。十五歳おめでとう、ミン」

それは誕生日プレゼントだった。私は今日で十五歳になったのだ。

十五歳、あれからもう三年も経っていた。

私とカジゴリが出会ったのは、三年前のことだった。私はその時孤児だった。

私は、もとは秘密都市より少し北の、漁業を営む寒村の生まれだ。

私の父は漁師だった。母は私が幼いころに病気で死んだと聞かされていて、私と父の二人で暮らしていた。父は毎朝早く、小さな船で一人で海に出た。毎日、私が起きる前に漁に出ていった。私は父が出て行ったあと、何時間かして起きて、学校に行き、家に帰っては家事をこなし、本を読み、食事を作って父を待っていた。

あの日も同じような一日だった。朝起きたらすでに父は漁に出ていて、私はいつものように学校に行き、家に帰った。夕食を作り、父が潮の匂いをさせて帰ってくるのを待っていた。しかしその日、父は帰らなかった。その日はちょうど嵐が接近していた頃で、夕方には風が強く吹き雨がざあざあ降っていた。私は家で父を待っていた。嵐は家々を丸洗いするように、寒村を吹き

荒れた。次の日の午後、嵐が去った後に港に行ってみたが、やはり父の船はなかった。

そのようにして、私は孤児になった。十二歳だった。孤児になった私に、人々は冷たかった。誰も私を養おうとはしなかった。私の住んでいた村の人間は、皆貧しく、誰も孤児に構う余裕なれなかつたのだ。

私はしばらく父と暮らした家に住んでいたが、やがてお金が無くなり、食べるものにも困るようになった。私は、私同様の孤児がたくさんいる、ゴミ集めのような仕事をさせる業者に雇われるようになった。鉄くずやアルミを集める仕事だった。大きなトラックに何人も乗って移動し、鉄くずやアルミを集め、日が暮れると野宿をした。驚くほど質素な食事と、毎日少々のお金を与えられた。トラックは毎日移動し続け、私たちは野宿を繰り返したが、私は自分がどこに向かっているのか分からなかった。ゴミ集めの業者は、鉄くずやアルミを求めて彷徨っているように思われた。

何週間かトラックに乗っていた。その日も私は林の中に落ちているスチール缶やアルミ缶を拾っていた。大分暗くなってきたので、そろそろトラックに戻ろうと思った。私は林の中を、缶ごみの入ったビニール袋を担いで歩いた。しかし、歩けば歩くほど、深く迷い込んでいくようだった。これはまずい、と思ううちに夜になった。林の中は真っ暗で、身動きも取れなくなった。私は空腹に耐えながら明るくなるのを待った。翌朝、日が出ると私はまた歩いた。歩いて、歩いて、どれほど歩いたか分からないが、気が付くと、高い柵の前に立っていた。

秘密都市だ、と思った。私は秘密都市の近くの生まれだったので、秘密都市のことを、名前だ

けではあるが知っていた。なんでも怪物を閉じ込めるために、高い柵で囲ってある地域で、人が入ることはできず、出入口は常に見張られていると聞いていた。

私は最初、誰かに助けを求めようと思った。出入口を探していると、それらしきものを見つけた。秘密都市と言うくらいだから、よっぽど厳重に警備してあるのだろうと思ったが、高い柵にはめ込まれた様なその小さなスチールのドアには、どういうわけか鍵がかかっていなかった。私は恐る恐る中に入った。中に入ると、すぐそばに物置のような、小屋のような物があって、中に椅子や机や、土嚢やベストのようなものが置いてあった。その時人は居なかったが、人が使ったような雰囲気があった。私は空腹でふらふらになりながら、あたりをうろろして、人が来るのを待つことにした。外からきて迷い込んだのだと言えば、誰かが少なくとも死なない程度には保護してくれるだろうと思ったのだ。

しばらくして、緑色の上下を着て、黒いベストとガスマスクを付けた男の人が現れた。私はほっとして、その人に話しかけようと思い近づいたが、男の人は言った。

「出口に近づくんじゃない！」

ガスマスク越しの声はくぐもって聞いて聞き取りづらかったが、どうやらそう言ったようだった。男の人は銃を持っていた。どうやら、出入口を監視することを仕事にしているようだった。私は、ちがうんです、外から迷い込んできたんです、と言った。

「身分証明書は」

そんなもの持っていなかった。私は家を出るときに、数日分の着替えと少しのお金のほかは何

も持って出なかった。私を雇った業者も身分証明書を持ってこないなどとは言わなかった。それに子供だったので、身分証明書の意味も良く分かっていなかった。

私はふらつきながら、必死に弁明した。ここに至るまでを、その警備員に（後から分かったことだがこの人はカジゴリと同じ役人だった）話した。しかし警備員は頑として聞き入れなかった。「秘密都市に入ることも、秘密都市から出ることも許されない。お前は身分証明書が無いから、どうせうかれまちから来た人間だろう。」

私は違うと言ったが、警備員は、そら戻った戻った、と言って私を追い払った。

私は途方に暮れた。空腹はすでに限界に達していた。極限の空腹を感じながらも、秘密都市の中をさまよい歩いた。やがて、コンクリート建てのアパートと、屋台が乱立する場所に出た。

これがうかれまちだった。

うかれまちは人で溢れかえっていた。人々はさっきの警備員と違い、マスクをしていない。街自体に色彩は無く、しかし派手な色合いの服を着ている人もいれば、私と同じようにみすぼらしい恰好をした人も居た。建物の窓からは物干し竿が突き出っていて、洗濯物がはためいていた。

屋台では、パンや肉の串焼きを売っているようだった。私は、鶏肉の串焼きの屋台に行き、ポケットに入っていたお金を見せた。肉を焼いていたおじさんは、それを見て頷き、串焼きの値段を言った。私の持っていたお金はちょうど串焼き一本分だった。私は秘密都市でも外と同じお金が使えることと、その物価の高さに驚いた。私は串焼きを一本買って、それにかぶりついた。それでも空腹は満たされなかった。全然足りなかった。

私はうかれまちをふらふらと彷徨った。街かどにはぼろを着た、がりがりに瘦せた子供たちが固まって立っていた。きっと私と同じ孤児だろうと思った。

うかれまちにはコンクリート作りの建物しかなく、灰色だったが、様々な店があるようだった。道行く人もまた様々だった。どうやらこの国の人では無いような外見の人も多数いた。

あたりはすでに暗くなっていた。私はとうとう地面に倒れた。さっき食べた串焼きが、余計に空腹をひどくしているような気がした。それはまったく空腹を満たさず、いっそ呼び水になっているように感じた。

私が倒れたのは路地で、傍らの建物からは光が漏れ、ぼんやりと薄暗かった。私は乾いた地面に顔を付けながら、このまま死ぬのか、と思った。思いながら、目だけで辺りを見回してみると、ライトアップされたように一際明るくなっている場所があった。それはずいぶん遠くに見えた。

怪物が闇に浮かび上がっていた。

私はそれを見たとき、それが怪物だと直感した。十何本かの大きな機械の脚が、動いているのが見えた。また、怪物からは十何本かの煙突も生えていたが、そこから何かを出しているようには見えなかった。

私は遠のいていく意識の中で、ぼんやりと、動く怪物の脚を眺めていた。それは天に伸びたり、地面と水平になったり、回ったりした。怪物は大きな機械仕掛けだったのだ。

私は怪物の脚を眺めながら、父のことを思った。幼いころに亡くなったという母のことや、故郷のことを思った。孤児になる前のことを思った。父親と二人で暮らしていた頃だって、決して

楽な暮らしでは無かった。でも何がどうなって、秘密都市の地面に伏しているのか、私には分からなかった。

じわり、と涙が出てきた。それは体中から絞り出された水分であるように思われた。私は何もかも諦めて目を閉じた。

「死ぬのか」

突然、頭上から声が降ってきた。私は驚いて、しかし億劫にゆっくりと目を開けた。目を開けると、ごつごつとした黒いブーツの足が目に入った。首だけを曲げて見上げると、緑色の上下と、黒いベストを着た男が立っていた。出入口で会った警備員と同じ格好をしていた。

男はガスマスクを手に取り、私を見下ろしていた。背が高く、がっしりとした体つきで、顔の下半分が黒い髭に覆われていた。目のあたりは落ち窪んで、鼻が大きい。かなり彫りの深い顔で、四十代後半くらいに見えた。この国の人だろうか、と私は思った。

「名前は」

男はそういった。

「ミン」

私はそれだけ答えた。

私はミンである、苗字はもう無い。

そう思うと泣き出しそうになって、ぐっと堪えた。家族が一人も居なくなっただのに、ファミリーネームが何の意味を成すというのだろうか。

「死ぬのか」

男はもう一度そう聞いた。分からない、と言おうとした。分からない、自分は死ぬのだろうか、なぜ、なぜこんなところで自分は死ぬのだろうか。

分からない、と言おうとして、舌がもつれた。自分にはもう、話す体力も残っていないのだと、いやに冷静に考えていた。

私が口をもごもごさせているのを見て、男はふん、と頷いた。そして地面に張り付いている私を引っ張り上げ、肩に担いだ。担がれながら私は、だらんと力を抜いていた。

その日の記憶はそこで途切れている。翌日、気が付くと私はベッドの上に横たわっていた。

私とカジゴリの生活はそうのようにして始まった。

カジゴリは、怪物を監視するための役人だ。毎日マスクを被って、うかれまちで怪物を見守っている。私は毎日少ない家事をして、本を読み、夕食を作ってカジゴリを待つ。

私はこの2LDKから、この三年間、一歩も出たことがない。まず第一に、外に出る必要がない。生活必需品や食料品は国から支給されていて、カジゴリが毎週持って帰ってくる。第二に、それは目には見えないが、外は怪物の毒で満ちている。怪物はその煙突から、目には見えない透明な毒を吐き続けているらしいのだ。それは吸い込み続けると病気になるので、私は外に出ない。そして、第三に、私は居ないはずの存在なのだ。役人が自分のマンションに他の人間を住まわせることは固く禁じられている。その規則に反して、カジゴリは私をこの部屋に置いている。私は、

他人にその存在を知られてはならない。だから外に出ずに、引きこもっている。

私は一日の大半を本を読んで過ごす。私は毎日物語を読みながら、時々、むしろそれを書いてみたくなる。物語は私を大きな世界へと連れ出してくれる。この小さな部屋からこころを羽ばたかせてくれる。物語を書いて、それが人に読まれるのはどんな気持ちだろうと思う。でも私は居ないはずの存在だから、物語することはできないだろう。

夕食の後、リビングのラグにカジゴリと向かい合って座り、紙袋の中身を出した。中には紙の箱が入っていた。箱を開けると、白い布が敷き詰められるようにして入れられていた。布を取り出してみると、それはワンピースだった。

「着てみる、ミン」

カジゴリがそういうので、私は自分の部屋に行ってそれを着た。しっかりとした白い生地で作られたワンピースだった。私は姿見に映る自分の姿をまじまじと見た。ワンピースは、小さな短い袖が丸く膨らんでいて、襟ぐりは四角く開いており、膝までの丈の裾がたっぷり広がっている。シンプルで古風な作りで、カジゴリらしいと思った。

私がワンピースを着て部屋を出ると、カジゴリは私を見て、すこし眩しいような目をした。

「花嫁みたいだ」

そう言った時のカジゴリの目は、なんだか寂しそうだった。

「カジゴリ、これ、どうしたの」

私はふと、こんなものをどこで手に入れたのか気になって聞いてみた。私がカジゴリと暮らしていることは外部には漏れていないし、カジゴリ一人の生活に、国はこんなものを支給しないだろう。

「うかれまちで取り寄せたんだ」

「カジゴリ、それは」

私は驚いた。役人がうかれまちで物を買うことは禁止されているのだ。

「いいんだ、ミン」

カジゴリはそう言って、一人でふむふむと頷いていた。そうして、ちょっと回ってみろだとか、サイズはどうだとかそんなことを言った。

「いいか、ミン、夢を見るんだ」

カジゴリは私を眺めながら突然そう言った。

「人は夢をみて生きていく。それは人にとって糧になるんだ。どんな小さな夢でもいい、しかしそれは無くてはならない。特にお前にとっては」

だから夢を見るんだ、ミン。カジゴリはそう言った。

カジゴリがまた苦しみだしたのはその夜遅くのことだった。

カジゴリは最初、胸を押さえてカジゴリの部屋と台所を行ったり来たりしていた。薬を飲んでいるらしかった。私はお風呂から上がって、リビングで本を読んでいたらあった。

カジゴリは自分の部屋に籠っていたが、しばらくすると、ミン、と呼ぶ声が聞こえた。私は慌ててカジゴリの部屋に行った。カジゴリはベッドの上で、苦しんでいた。胸を押さえ、目をぎゅっと固く閉じ、脂汗を流して、ぜいぜいと息をしていた。

「シバ先生を呼んだほうが」

私がそう言うと、カジゴリは黙って頷いた。話すことも出来ないようだった。

私はいつものように、シバ先生に電話を掛けた。シバ先生の家の電話番号はとくに暗記していた。先生、カジゴリがまた苦しんでいるようなのですが、というとシバ先生はすぐ行くと言って電話を切った。

シバ先生が来たのは十分後だった。シバ先生はマスクを付け、茶色い皮の鞆を手に提げ、やってきた。そして玄関で風に洗われると、合羽を脱いで中に入った。

「ミンさん、カジゴリはどんな風だね」

私はシバ先生をカジゴリの部屋へと連れて行った。カジゴリはまだ胸を押さえて苦しんでいた。「ふむ、鎮痛剤を打っておこうかね」

シバ先生はそう言って、鞆から注射器と薬の瓶を取り出した。老眼鏡をずり上げるシバ先生の皺だらけの手はぶるぶる震えている。注射器を扱う時も、目を細めるようにしている。私はいつも、そんなシバ先生を見てはらはらしてしまふ。だがシバ先生は、注射する時になると不思議と手の震えが止まるようだった。

注射して間もなくすると、ぜいぜいとしていたカジゴリの息は整い始めた。やがてカジゴリは

眠ってしまった。いつものことだった。

私はとりあえずほっとして、シバ先生をリビングのテーブルに座らせた。そして、台所に行き、お茶を淹れた。

カジゴリは時々、こんな風にして苦しむことがある。三年間一緒に暮らしてきたが、最近ではその頻度が高くなってきているような気がする。

私はどうぞ、と言ってシバ先生にお茶を差し出した。先生はありがとう、と言ってそれを啜った。

私はシバ先生が何者なのかをよく知らない。知っているのは、どうやら医師の資格を持っているということ、天災の前から秘密都市に住んでいた人間だということ、そしてこのマンション同様の設備のある、秘密都市のいずれの一軒家で生活しているということだ。

「先生、カジゴリはどうなんですか」

私はシバ先生と向かい合って座り、そう聞いた。先生はううむ、と唸った。しばらく唸った後、大分酷くなっているようだ、と言った。

「カジゴリは怪物に一番近い場所で、毎日働いているから、特に毒に侵されているようだね」

「マスクをしているのに」

「それが万能というわけではあるまいよ」

シバ先生は真っ白な口髭をいじりながら、怪物の毒は少しずつではあるがガスマスクをすり抜けるのだと言った。

「見なさい、人がごみのようだ」

そう言ってシバ先生は、窓の外を見やった。見なさい、というのが何のことなのか私には分かっていなかった。カジゴリのことを言っているのかもしれないし、外の人間のことを言っているのかもしれないかった。

「うかれまちでは毎週のように人が死んでいく。うかれまちの人たちは毒に対して無防備だ。マスクもしていないし、何の対策もしていない家に住んでいる。そう、ここや私の家とは違う、普通の建物だ。しかもうかれまちは怪物を取り囲むようにできている。秘密都市の出入口から遠い場所に人々が住み着いた結果、そうなったのだ」

そりゃあ病気にもなってる当然だろうね、と、そう言ってまた口髭をいじった。

私とシバ先生はしばらく、二人して窓の外を見ていた。リビングの窓からは、明かりに照らされた怪物が見えた。二十四時間体制で監視されている怪物の周りには、夜でも明かりがついている。怪物の機械の足は、絶えず動き続いていた。でもやっぱり煙突からは、何も出ていないように見えた。

「シバ先生はどうして秘密都市にいるんですか」

私はふと聞いてみた。カジゴリが注射をされて寝ている間、シバ先生と話をするのが習慣になっていた。シバ先生は、ほほ、と笑った。

「ミンさん、あなたと会うのはこれが最後になるだろうから、少し話をさせてはくれんかね」

「先生、最後ってどういうことですか」

「や、まあ、聞きなさい」

そう言ってシバ先生は、口髭をいじりながら語りだした。

「もう何十年も前のことだ。あれは八百六年の春だった。カジゴリは十二歳で、私はまだ四十歳だった」

先生はまたお茶を啜った。私もつられて、口にした。

「突然地面が揺れて、それからしばらくしてここを大波が襲った。すべての家々が流されるような大波だった。船が陸に流れ、沢山の人が海に流れた。それはこの世の物とは思えない光景だった」

そこでシバ先生は、こほん、と咳ばらいをした。

「多くの人が波にのまれた。しかし私はその時、病院の最上階に居て助かった。カジゴリは学校に居て生き残った」

「家族は」

「私の家族かね？」

シバ先生はふっと笑った。それはどこか悲しそうな微笑みだった。

「私には妻が一人いた。子供は居なかった。妻は……妻はその時外にいたのか……きっと波に飲まれたのだろう。今も行方不明のままだ。私はね、ミンさん、一度秘密都市を出たのだ。しかし、国に申請して、秘密都市の役人専門の医者になった。そうすることによって、この地に住むことが特別に許された。私の家はほかの家と違って木造ではなくコンクリート建てだったから、波に

流されず残った。私が役人専門の医者になってこの地に住むことになる、国は私の家を改築して、このマンションと同じような作りにした。私はもう、そこに何十年も住んでいる」

シバ先生は、笑うかねミンさん、と言った。私は、何をですか、と聞き返した。

「私がこの地を捨てられなかったことを笑うかね、ミンさん。まあ笑いなさんな。私は、私の父親や、祖父の代から住んでいた土地を捨てられなかった。この地のどこかに妻が眠っているかもしれないと思うとなおさらだった。人はそんな理由で、怪物の毒という危険にさらされながら、秘密都市に住むものなのだ。良いかね、ミンさん、人はそう簡単には住み慣れた土地を捨てられないものだよ」

「カジゴリは」

「カジゴリかね。私はカジゴリを生まれた時から知っているよ。カジゴリは私の近所に住んでいた。天災の年には十二歳で……、見るかね、ミンさん」

シバ先生はそう言って、ポケットから財布を出した。なんだろうと思って見ていると、先生は財布から一枚の写真を取り出した。

「これがカジゴリだよ」

差し出された写真には、三人が写っていた。まだ髪が黒く髭を生やしていないシバ先生と、おそらく奥さんであろう女性と、男の子だった。三人は小さな四角い建物の前に立って写っていた。おそらく先生の家の前だろうと思った。男の子は背が低く、華奢だったが、目鼻立ちがはっきりとした彫りの深い顔で、確かにカジゴリの少年時代のように思われた。

「天災が来る前、最後にとった写真だ。カジゴリは……、カジゴリは大波が来たとき学校に居て助かったが、カジゴリの家族は駄目だった。カジゴリには両親と妹が居たが、天災の後しばらくして全員遺体で見つかった」

「先生、それじゃあカジゴリは」

「そうだ、カジゴリは十二歳にして孤児になったんだよ」

「ミンさん、あなたと同じだ、と先生は言った。」

「孤児になったカジゴリは、最初秘密都市の外に出た。どこかの施設に居たのか、詳しくは分からないが……。それが十五歳の時、役人として秘密都市に帰ってきた。そのころは秘密都市の役人になった孤児が沢山居たんだよ。秘密都市の役人はやりたがる者の居ない職業だから、後ろ盾のない孤児が役人になることは多かった」

先生はそこまで言うと、ふーっと息を吐いた。そして、テーブルの上で手を組んで、その皺だらけの手をしばらく眺めていた。私たちは沈黙した。どこか緊張感のある沈黙だった。

しばらくして先生が口を開いた。

「カジゴリは知ってて言わないのか、知らずに言わないのか、いや、きっと知ってて言わないのだろう」

「そこまで言って先生はまた黙った。私は先生をじっと見つめていた。」

「ミンさん、おかしいと思わんかね、秘密都市が秘密にされていることが」

「それは、怪物の毒に侵されている土地で、本来は人が居ないはずだから」

「それならば人々をこの土地から避難させるだけでよい。何も秘密にすることはない。それに、一度秘密都市に入った人間が外に出ることも禁止されている。これは、怪物の毒から人々を守る為ならば、辻褃の合わないことだ」

「では、秘密都市とは何なのですか、怪物とは」

そう聞くと先生はまた黙った。押し黙ったまま、組んだ手を見つめていた。しかし、やがて口を開いた。

「怪物は、実は神だったのだよ」

「神、ですか」

「そうだ。それは人が作りし神だった。神は人工の太陽によってこの北の土地を温めた。それによってこの地ではそれまで作れなかった作物が作られるようになり、生活は豊かになった」

だが、と先生は言った。

「八百六年の天災の時、大波の混乱によって、人間は人工の神のコントロールを失った。そもそも人間が神を創造すべきでは無かったのだ」

人間は神を創造すべきではなかった、というシバ先生の言葉を、私は心の中で繰り返した。人間が神を創造する？ それは許されないこと？ 私は続けて聞いた。

「じゃあ、秘密都市が秘密にされているのは」

「国は、神を作った当時から、それを安全なものだと言い張っていた。人は神をコントロール出来るのだと、国民に説明していた。政治家も、学者も、口をそろえて神は人々に幸福をもたらす

と唱えた。だが、怪物はコントロールを失った」

国は隠蔽しているのだよ、とシバ先生は言った。

「安全だと謳われた神が、暴走することはあってはならないことだった。なぜならすでに、神はほかの地にも作られていたからだ。既に多くの利権が絡みすぎていた。それは安全でなければならなかった。だから、神がコントロールを失い怪物となったことは誰にも知られてはならなかった。そうして秘密都市は秘密都市となったのだ」

「告発する人は居なかったのですか？」

「居たには居たが……、次々と粛清された。そうするうちに、もう誰も告発などしなくなった」
私は言葉を失った。自分の住んでいる国で、そのようなことが本当に起こっていると信じたくなかった。しかし事実、秘密都市は秘密にされているのだ。

「ミンさん、あなたにはよく考えてほしい。あるものがあると言うことすら出来ない世の中を、ミンさんはおかしいとは思わないかね」

私は何と言って良いか分からなかった。確かに、ただ単純に、あるものがあると言うことが出来ない世界は、おかしいと思う。だがしかし。

だしかし、私たちの中に、それを容認する心が無いとも言えないのではないか。

私たちの中には、あるものを無いと言う事を、良しとはしないまでも、場合によっては仕方ないと思う心があるのではないか。あえてあると言わなくても、無いと言ってしまえば他のすべてが平和に続く社会で、あるものを無いと言ってしまいう心があるのではないか。それは国にはな

く、私たちの中にあるのではないか。

私とシバ先生はそれきり黙った。ふと時計を見ると、もう深夜だった。私が時計を見てみると、シバ先生も時計を見て、時間の遅いことに気が付いたようだった。シバ先生は立ち上がると、そろそろお暇するとするかね、と言って帰って行った。

カジゴリは次の朝遅くに起きだしてきた。カジゴリが非番の日だったので、私は起こさずにいたのだ。カジゴリが起きだしてきたとき、私はカジゴリからもらったワンピースを着て、姿見の前で回ったりしていたところだった。カジゴリからのプレゼントが、それほど嬉しかったのだ。

「外に出るぞ、ミン」

カジゴリは言った。私は驚いて聞き返した。

「外に出るって？」

「いいから、そう、それは着たままで」

私とカジゴリは玄関を出た。カジゴリも私も、マスクをしていなかった。カジゴリは手にリュックのようなものを持っていた。私は足が震えた。カジゴリに尋ねても、なぜ私を外に出るのか答えなかった。なんだか悪い予感がした。

エレベーターに乗って一階に下り、外に出ると、そこには駐車場があった。私は、マンションの外に駐車場があることすら知らなかった。そしてカジゴリが車を所有していることも。カジゴリはポケットからキーを出して、緑色の車に近づいた。そして私に車に乗るように言い、自分も

車に乗り込んだ。そしてキーを差し込み、エンジンをかけた。車はゆっくりと走り出した。

「カジゴリ、どこへ行くの」

私は聞いた。でもカジゴリは答えなかった。

「お前が最初うかれまちで死にかけていたとき」とカジゴリは言った。

「おれはお前を、国に保護させるべきだったかもしれない。ちゃんと、外から迷い込んだ人間だと説明して、しかるべき施設に送るべきだったかもしれない」

車はゆっくりと走り続けていた。私は外から姿が見えないように、後部座席で身を縮めていた。

「いまでも、あの部屋に三年間もお前を閉じ込めておいたことが、正しかったのかどうか分からない。でもおれは、この国で孤児が生きていくという事が、どれだけ辛いことか知っていた」

「なんの話をしているの、カジゴリ」

私は聞いた。カジゴリは答えなかった。

「十五歳というのは、一人立ちするにはまだ早い歳だと、おれもわかっている。でも出来ないことは無い。それから、色々なものを用意するのに時間がかかった」

ここまで聞いて、私はカジゴリが何を言おうとしているのか理解した。

「カジゴリ、まさか」

「お別れだ、ミン」

そこで車は静かに停止した。私は窓の外を見た。近くに高い柵が見えた。

「南の首都に行くんだ、ミン。必要なものはこのリュックに。身分証明書も整えておいた。身を寄せる先のメモも入っている。そこまでの地図も。それから、その出口の警備員も買収していた」

私は全てを理解しつつあった。唇がぶるぶると震えた。手が冷たくなっていて、でも汗をかいていた。

「この街を出ていくんだ、ミン。お前はもう居ないはずの存在じゃない」

私は黙っていた、何も言えなかった。

「ミン、怪物の本当のことは、もうどうせ知っているんだろ」

カジゴリは言った。私は答えなかった。

「でも、だからどうしろという訳ではないんだ。怪物の本当のことを知っているお前を外に出して、何かをしてほしいわけじゃないんだ。告発なんてしなくていい。もちろん、そうしたいのならおれに止める権利はないが、でも」

カジゴリはそこで一呼吸置いて言った。

「でもこれだけは知っておいてほしい。おれはお前が幸せになればそれでいいんだ。正義のためにお前を逃がすんじゃない。正義なんてお前に比べればなんの価値もない」

だからミン、お別れだ、とカジゴリは前を向いたまま言った。

「カジゴリ、私、カジゴリと離れるくらいなら」

「ここに居るくらいなら何を投げ出しても逃げたほうがいい」

カジゴリはそう言って、後部座席の私を振り返った。髭で口元が隠れて良く分からないが、少し笑っているようにも見えた。カジゴリが笑っているのを見るのは初めてだった。それは穏やかな笑いだった。

「知っているだろう、ミン、この街は怪物の毒に汚染されている。住み続けるほど危険なんだ、それに」

カジゴリは運転席で、前に向きなおして言った。

「それにおれだって、もう、そう長くは無いだ」

お互いに、しばらく車内で黙っていた。私は混乱していた。でもここから出ていくのだという事は、唐突に理解していた。理解していて、でも別れの間際に、何を言えばいいのか分からなかった。

数分の沈黙の後に、カジゴリは叫ぶように言った。

「走れ！ ミン！」

私はリュックをもって、弾かれるように車の外に転がり出た。転がり出て、言われた通りに走った。一生懸命走った。それでも三年間あの部屋に引きこもっていた足は、がくがくと震えた。走り方も忘れてしまったようだった。それでも精一杯走った。

走って、走って、胸が苦しくなりながら、出口を抜けた。警備員は私を見て見ぬ振りした。

秘密都市を出て、私は走り続けた。転びながら走り続けた。着ていた白いワンピースは泥にまみれた。泥にまみれながら、私は生きていた。もう居ないはずの存在ではなくなっていた。

私はしばらく走って、立ち止まって秘密都市を振り返った。

怪物はいつものように機械の足を動かし、煙突からは何も出ていないように見えた。

私はまた走り出した。走りながら、夢を見るんだ、と言ったカジゴリの言葉を思い出していた。あるものがあると云えない世の中はおかしいと言ったシバ先生の言葉を思い出していた。

私は、自分が居るはずの存在になって、何をすればいいのか分からなかった。それでも空は雲一つないほど青く、無限に広がっているように思われた。

(理学部理学科二年)

ビューティフル・ライフ！

坪井 希

「ああもう疲れた、ウンザリだわ。何であんな実のないことばかり喋れるのかしらあのオンナ。こっちだって忙しいのに！」

恐らく「アゲハ」との通話が終わったのだろう、姉は赤茶けたロングヘアを深紅のネイルで掻き乱しながら、どかどかとりビングに入ってきた。

爪と同じ色をしたワンピースが翻り、三十路手前とは思えないほどすらりとした美脚が一瞬だけ見えた。床に置きっぱなしだった桃色のクッションが宙を舞う。

「深刻な声で聞くことが『青春ってもう取り戻せないんでしょうか……』とか、考えられる？ 私の知ったこっちゃないわよ！」

俺だって知ったこっちゃない。

頭上に落ちて来たクッションをソファアの上に放り投げると、俺は再びパソコンの前に視線を戻した。こういう時は無視が一番だ。ヒステリックな姉を宥めても咎めても、間違いないとばかりを喰らうのだから。構わずキーボードを叩き続けていると、ユミは「聞、い、て、ん、の」

と言葉を切りながらぐりぐりと拳を押し当てて来た。頭が痛い。

「……ちょっと苛々しすぎじゃないの。皺が増えるよ」

「皺なんかなんかないわよ。それに、二時間もあんな会話してたら苛々もするわ。あんたに代わって欲しいくらい」

「俺が喋ったらバレちゃうだろ。ちなみに何て答えたの、そのアドバイス」

たった一人の実姉、藤崎ユミは、先ほどまで演じていたであろう「美の伝道師」——加刈屋エリカの気品に満ちた声を作ってすらすると答える。

「青春を満喫できないのがそこまで心残りなら、高校時代の制服を着て、通学路を歩いて、青春気分浸ってみてはいかがですか?」

「……ひどい回答だ」

「冗談よ」

再び自分の声に戻ると姉は小さく鼻を鳴らした。

ところで、俺は三年前から、それまでとんと縁の無かった「詐欺」という犯罪に手を染めている。こつこつ歩み続けた「真っ当な」人生はたったの二十年ばかりで終わりを告げた。

忘れもしない、新年が始まってちょうど一カ月後のことだ。散々話しあった上で大学院の進学を許可してくれた両親が、酔っ払いの運転するバンに跳ねられて死んだのだ。進学の手定はパアになり、慌てて始めた就職活動はと言えば、大学を卒業する日になっても一つとして実を結ばな

かった。

式場で死人のような顔をして突っ立っているのは俺だけだった。頭の中は「これからどうやって生きて行こうか」ということでいっぱいだった。何の感慨も持てないまま卒業式が終わると、俺は人波に押し流され、式場前の広場にぼいっと吐き出された。

そのときだ。派手な格好をした女がいきなり話しかけてきた。

『あら、なんだかシケた面してんじゃないの。良い男が台無しよ』

その女は深紅のコートを纏い、やけに大きなキャリーケースを持っていて、広場にいる誰よりも目立っていた。ローズブラウンの巻き髪が風になびいていたのをよく覚えている。

女はぼかんとしている俺の前で、芸能人がかけるような馬鹿でかいサングラスを取り去った。きりりと吊りあがった形の良い眉、人工物かと疑うほど長く量のある睫毛。瞳は底知れぬ力を湛えた瞳、すうっと通った鼻筋。その下の、ふるぶるとした唇がもう一度動いて——ようやく俺は彼女の正体に気が付いた。

『さっさと口を閉じなさい、阿呆に見えるわよ。……シヨウちゃん』

『そのサングラス捨てたほうがいいよ。同じくらい阿呆に見えるから。……姉さん』

『言うようになったじゃない。——久々などこ悪いんだけどさ、ちょっと協力してくれる？』

六年振りに再会した姉は、両親に勘当されて家を出たときよりも更に美しく、危険な女になっていた。

家を出た当時の彼女はまだ二十歳になったばかりであり、俺はといえば県立高校の二年生

だった。

今までずっと音信不通だった姉は、これまで世界各地を転々としながら自由奔放に生きていたらしい。嬉々として語るいくつものラブロマンスには若干誇張がある気もしたが、何人もの男と組んで「仕事」をしていたのは事実のようだ。時には法の裏を掻き、時には真正面からぶち破るその「仕事」を、姉は分かりやすく「詐欺」という言葉にまとめた。

そんな彼女が言う「協力」とはもちろん、帰国したばかりの日本で初めて取りかかる仕事を手伝えることだった。

そして現在、我々姉弟は「美の伝道師・加莉屋エリカ」という架空の存在を作りあげ、そこから広げていったビジネスによって生活費を稼いでいる。

「まあ、お疲れ様。……詐欺師も楽じゃないね」

「あったりまえでしょ」

少し機嫌が直ったのか、ユミは背中に覆いかぶさって来た。俺の右肩に顎を乗せてノートパソコンの画面を見つめる。

画面に表示されているのは、加莉屋エリカが立ちあげたことになっている基礎化粧品会社「パルテールparterre」のトップページだ。

「パルテールle parterre」は美しき生活を追求する貴女を応援します。

○完全無添加 理想の肌を作る基礎化粧品セット

○毎日ぶるり 濃密コラーゲンカプセル

○美に触れる、美を纏う 宝石展示会・絵画展チケット販売

(不定期開催 数に限りがございます)

○美しく生きてゆくために エリカのビューティ・アドバイス

(メールにて承ります)

●現在試運転中 エリカのビューティ・コンタクト

※いずれも会員様のみにご提供させていただきます。登録はこちらから

〈ビューティーアドバイザー・加莉屋エリカ プロフィール〉

身長167センチ、B99・W55・H88、「美しく生きること…」

俺の手ごとマウスを操作してプロフィールの内容を見終えると、ユミはそのままの体勢でけらと笑った。

「我ながらすごい出来だわ。張りぼてなのに本物みたい」

「サイト作りは俺に任せきりだろ。ここまで大きな張りぼて、維持するのも一苦労だ」

「でも成功してる。後ろ盾もないのにこれって、けっこう凄いことかもね。私の美貌や能力……と、あなたの知恵のおかげだ」

ル・パルテールの主力商品である『基礎化粧品セット』だが、これは俺達が開発したわけでは

ない。他所から買ってきた製品をただ詰め替えて、会員達に発送しているのだ。

化粧水、乳液、美容液、クレンジングオイルに洗顔料。全て県境にある小さな製薬会社から買っている。その会社はオーガニックに拘った高品質の製品を作っているにも関わらず、社長の手腕がないばかりに潰れかけていた。ユミはそれを見抜き、「酔狂な資産家」として、へっぴこ社長に取引を持ちかけたのだ。

俺達の要求と助言に従った結果として、その会社は見事経営危機を乗り越えた。社長はユミを女神のように崇め、今も製品を格安で提供してくれている。

また、液体より詰め替えが楽な『濃密カラーゲンカップセル』も似たような方法で入手していた。言わずもがな、どちらの製造元にも本当の目的は隠し通している。……しかしここまででは、恐らく他所の詐欺師も普通にやっていることだろう。我が姉の本領は『宝石展示会のチケット販売』というビジネスで発揮される。

ユミは独自の情報網に引っ掛かった宝石商や画廊からたまに展覧会のチケットを入手し、ル・パルテールの会員達に売っている。「チケット販売委託料」という名目で主催者から金を得るのが目的だ。展示会が終わる度に彼らからクレームの電話がかかってきたが、彼女は平気な顔で、それを軽くあしらっていた。

『展示会自体の成果はあなた方の責任でしょ？ こっちに押し付けられないでくれるかしら!』

……会員にチケットを送付する際、「悪徳商法に注意」というピラを同封したのはユミ自身である。

ピラを同封した理由は二つ。一つ目は、信用なしではこの商売は成り立たないということ。同じ穴のむじなである画廊や宝石商側が万一へまをやらせば、こちらまでダメージを負いかねない。

そしてもう一つの理由は、もし会員達が化粧品以上に金のかかる絵画にハマってしまうと、こちら側の実入りが少なくなってしまうということだった。

これらを踏まえて、我々は「表面上は協力しつつ取引先の足を引っ張る」というやり方をずっと貫いていた。その甲斐あって会員二百名からの信頼は厚い。

そう、たったの二百名である。「八百名突破!」というのも実は全くの嘘っぱちなのだ。

紹介者の会員ナンバー、職業、収入といった様々な質問事項が記載された申込書が「加莉屋エリカ」の審査を突破しなければ、ル・パルテールの会員にはなれないことになっている。ユミは申込書を見て、裕福な志望者のみを会員に加えていた。

だいたい一年前だったか——彼女は週に数十通は送られてくる申込用紙をいつものようにチェックすると「これ以上は増やさなくていいわね」と言った。

二人でこの「商売」を続けていくには、顧客は二百人以内に留めておくのがベストということらしい。「審査に受かる人間がいなくなれば顧客は怪しまないか」と聞いた俺に対して、ユミはポテトチップスをつまみながら当然のように答えた。

『会員だって、紹介した相手が入会出来なくてもあまり気にしないわよ。あら残念だったわね——とか、口では言うでしょうけど。自分は選ばれたんだって意識があるから、大した問題は起きな

いと思う」

さすがに経験が違うと思った一言だ。利益の七割がユミのものというのは、客観的に見れば妥当な配分だろう。仕事以外の場面で酷い目に遭わされている自分としては、少々納得いかないが。ユミはほっそりした顎で、ごりごりと俺の右肩を攻撃してくる。

「で、今週分の『ビューティ・アドバイス』は送り終わったの？ 加・荊・屋・エ・リ・カ・さ・ん」
「もちろん」

そう、俺だって雑用に徹しているわけではないのだ。

電子メールならば男が送ってもバレることはない。俺は美容やダイエットに関する専門書、また何十冊もの女性雑誌から知識を学び、「エリカのビューティ・アドバイス」を行っていた。このサービス自体は無料で提供するところがミソだ。これがあるから、会員達は商品がいくら高くても納得してくれるのである。

「今やあんたの方が美容オタクよね。素直に頑張りすぎじゃない？ このお人好し」

「……専門家と同じような助言をしてたら張りぼてだってバレにくいだろ。警察に駆け込まれたら終わりなわけだし」

専門書を買いあさっているのが「ほんの少しの罪悪感を払拭するため」だなんて、姉だけには絶対に知られたくない。

さっきから頭頂部をさわさわしてくるユミの手を、力一杯払う。

「そういうのやめろよ、もう二十五なんだから！」

「はいはい、大人なのよねー」

ユミはニヤニヤ笑ってリビングを離れ、十分も経たずに戻って来ると、テーブルにカクテルグラスを二つ並べた。逆三角形のボウルには、薄く緑がかった黄金の液体が満ちている。

「昼間から酒か。いい加減肝臓壊すよ」

「『ビューティ・コンタクト』で疲れちゃったの。男なら黙って付き合いなさい」

「アゲハさんねえ。メールを見る限り可憐な人なだけだな……ああはい、この話はなしね」

「分かってんじゃない」

ユミに促されるまま、俺は手前にあるグラスを取った。ジュニパーベリーと柑橘類の爽やかな香りがする。

「ギムレットか。また度の強いヤツを」

「使ったのはノールドジュネヴァの二十年よ。たったの四十二度」

「どこが『たったの』だよ……酒弱い奴なら一杯でダウンだ」

「お互い強いんだから問題ないでしょ。味わって飲みなさい、これ見つけるの大変だったんだから——乾杯」

硝子のぶつかる涼やかな音が、小さく弾けた。

「おはようございます、エリカ様。」

先日の『ビューティ・コンタクト』では、つまらない質問をしてしまって申し訳ありません。

けれどエリカ様の御言葉は大変参考になりました。エリカ様はいつでも私に力を下さいますね。

それから、アドバイスの通り、先日から林檎を食事に取り入れていています。一人暮らしだということに、つい買いすぎてしまいました。余ったらジャムを作ろうと思っています。

また「ストレス解消に効果的」ということで夜の散歩も始めてみました。秋の夜空はとても澄んでおり、月が本当に美しく――

「……相変わらず丁寧な文章だなあ」

およそ三十行にわたる本文を流し読みし、文末の文句まで確認してから、俺はメールボックスのウィンドウを閉じた。

『もっと美しく生きるためにはどうしたらいいんでしょうか。度々お伺いして申し訳ありません。宜しかったら、ご指導下さい』

近頃こんな文章で締められることが増えた。こんなに頻繁だと、こっちもネタに困ってしまう。前回までと同じ回答を寄越すわけにもいかないし。

返事は後でゆっくり書こう。

メールの送り主は、会員ナンバー001、ニックネーム「アゲハ」こと小柳ミキ。ル・パルテールの最古参会員にして、俺達の最初のカモだ。

かつては身長160センチ、体重78キログラム、スリーサイズは上から98・94・100という悲劇的な体型だったようだが、今までのメールを見ると、この三年間で体重を52キロまで落としていた。元々の素材が悪くなければさぞかし綺麗になっていることだろう。

彼女は三年間にわたりこちらが提供する商品やサービスに毎月七万以上支払っている超優良客だ。自身の「美しき生活」の様子を勝手に会員サイトの掲示板で紹介してくれるので、ありがたい広告塔でもあった。一部の会員達からは尊敬を込めて「カガリヤー」と呼ばれているらしい。

先月から始めた「エリカのビューティ・コンタクト」というサービスに、いの一に申し込んできたのも彼女だった。

これはパソコンの音声通話ソフトを用いて、姉の演じる「美の伝道師」加莉屋エリカが会員と直接会話し、彼女たちのありとあらゆる悩みに対してアドバイスをするというものだ。試験的な取り組みということで、これを受けられる会員は十人だけに絞っている。

一回のサービスにかかる時間は一時間程度、利用は週四回までと決めている。それだけで一人につき月に四万円が振り込まれるというポロイ商売だが、これ以上利用者を増やすことは難しくうだった。

ユミ曰く、「アゲハの対応だけで精一杯なのー」ということらしい。

何がそんなに気に食わないのか知らないが、この三年間「美の伝道師」として小柳ミキとメールでやり取りしてきた俺は、彼女に明確な好意を抱くようになっていた。

なにせ彼女は、姉とは全く正反対の女性なのである。

ユミは勝気で、苛烈で、自由奔放。まだ家で一緒に暮らしていたときも両親はよく手を焼いていた。慎ましさは演技の中でしか持たず、自分の外見がどれだけ魅力的かを知っている。

実際に、研ぎ澄まされた刃物のような美しさは、道行く「まとも」な人間達をつまらない木石に変えてしまう。鮮やかで華麗な行動は他者を圧倒し心酔させる。妖艶な唇から紡がれる言葉には力がある。

二百人が信奉する偶像「加莉屋エリカ」の真核は、ユミのカリスマ性に他ならない。

三年間、法を裏切って金を稼ぐ人間を多々見て来たが、彼らの姿には必ず暗い影が差している。「全てが公になれば間違いなく裁かれる」という暗い未来から来る影だ。

それは俺だって例外ではない。違うのはユミだけだった。真っ当な道を思い切り無視して、無限の荒野を驀進する姉は、しかし誰よりも輝いている。

それが俺には不思議でならず、同時に恐怖を感じるのだ。魅力的には違いないが少々毒気が強すぎる。

対して小柳ミキは清楚で純朴、世間擦れしていないお嬢様といった感じがした。メールを読んだだけでこちらのアドバイスを健気に聞いてくれるのが分かる。外見もきつと年端のいかない少女のように頼りなげで、可憐であるに違いない。「ダイエットしたら萎んでしまいました……」と書くくらいだから、胸も慎ましやかなのだろう。

なんて好ましい！

実のところ、俺が「エリカ様」としてメールを返す際に罪悪感を覚えるのは彼女に対してだけ

だった。美容に関する知識を溜めこみ、「人が美しく生きる方法」を一人で悩み続けているのも、ほとんど彼女のためである。

ユミに知られたら鼻で笑われるか、張り手を喰らうことだろう。

ル・パルテールの会員データをチェックしたとき、ミキは俺の二歳年下で、しかも同じ市内にずっと住んでいたことが分かった。彼女の家がある自由ヶ丘は、ユミの指示を受けて三年前に引き払った家のすぐ隣にある地区だった。出身校は分からないが同じ校区にいたのは間違いない。お互いの存在を認識していないだけで、もしかしたら今までに何度も擦れ違っていたかもしれないのだ。

そう思ったら絵文字も何もないパソコンのメールにだってますます愛着を感じてしまう。……ちなみにこのマンションがある唐辻通りだって、ミキの住む自由ヶ丘まで徒歩で一時間もかからない。

「――何考えてんだ」

ガリガリと頭を引っ掻いて、俺はそそくさと自室をあとにした。さすがにこれ以上の妄想は危険だ。どうせ会えやしないのだから。

リビングで淹れたてのコーヒーを啜っていると、そこに上機嫌のユミが乗り込んでくる。酒豪の彼女にしては珍しくふらついていた。相当飲んで来たようだ。

「たっだいまー!」

「うわ、抱きつくなよ。酒臭い。こんな遅くまで何してたんだ」

「ん、もう十二時前？　ちょっと花宮にいたのよ」

花宮は県を中心地で、最も大きい繁華街があるところだ。

ユミは筆を取るように衣服を脱いでいく。床に放り捨てられたスカートや鞆を見て、俺は軽く首を傾げた。

「このバッグ、減多に使わないやつじゃん。服もやたらキラキラしてるし。男でも落としに行っただけ？」

最後の言葉が余計だったらしい。ユミは途端に不機嫌になった。

「失礼ね、これが勝負服なわけじゃないでしょ。今日はちゃんと仕事してたの！　遊びじゃなくて！」

「分かった、分かったから怒るなよ。……ん、仕事？」

ユミは俺から差し出されたコップを当然のように受け取り、中身をぐいと呷った。冷水が効いたのか、幾分しっからした顔に戻る。

「週刊誌から取材の申し込みが来てたのよ。断ると後々厄介なことになりそうだったから行って来ただけ……ちょっと、コーヒー吹き出さないで！」

「取材、受けて来たのかよ！」

開いた口が塞がらない。今までありとあらゆるメディアへの露出を避け、「加莉屋エリカ」という存在があまり沢山の人間に広まらないようにしてきたのに、その取り組みは一体何だったのか。ル・パルテールの会員達に送った写真だってたった一枚きりなのだ。「顧客の信用を得るためにどうしても」ということで俺が撮影した、たった一枚！

「もちろん食事は奢らせたわ。エスポワールホテルの最高級フレンチよ、凄いでしょ」

「いや凄いけど、何考えてんだよ、ユミ！」

『姉・さん』！……そうね、あいつらほんとに何考えてんのかしら。犯罪者だって疑ってるならもうちょっと警戒すればいいのに」

ユミは鞆から黒い物体を取り出し、こちらに向かって放った。慌てて手の中に収めたそれは大きさを割に重い。

「……何これ、携帯電話に似てるけど」

「ICレコーダー知らないの？　ちゃんと別れる前に掏ってきたのよ。ブラフのメモ帳も没収済みだし、記者もしっかり酔い潰したし」

文句ある、とばかりに睨んでくるユミから俺は目を反らした。

「……ま、まあ、とにかくそれで遅くなったわけだ」

「いや、その後一人でちょっと飲み直して……呆れた顔すんのやめてくれる？　で、タクシーに乗ったんだけど、バーでほとんどお金使っちゃったからさ、途中で下ろしてもらったの。さっきまで歩くのもやっとだったのよ。冷たい道路の上で寝ちゃうとこだった」

「へえ。……そのまま風邪ひけば良かったのに」

「何か言った？」

なにも、と返す前に視界が真っ暗になった。恐ろしい勢いで投げつけられたクッションが顔面に命中したのだ。

ユミは「くああ」と大あくびをし、ソファァーに裸同然の身体を横たえる。さっきので気が済んだらしい。

「そういえばね、家まで歩いて帰るとき、肩貸してもらっちゃった」

「……明日から知らない男が何度も訪ねて来るとか、俺、いやだよ」

かつて姉に付きまとう男を追い払うため、無理やり「彼氏役」をやらされて酷い目に遭ったことを突然思い出した。

「何でそう考えが飛躍するわけえ? ……あー、確かに階段登るときも助けてもらったけど、今は女子高生よ。安心しな」

言いたいことは山ほどあったが、ユミはひらひらと右手を振ると、そのまますっかり寝入ってしまった。

「……せめて寝間着くらい着ろよ」

分厚い毛布を何枚も被せて、下着しか身につけていない姉を隠した。コーヒーカーップを空にした後リビングの照明を落とす。糞虫のような状態で吞気に寝入っているユミが、なんだか少し恨めしい。

家までついて来たのが男でない以上、ストーカーの心配をすることはない。ユミの言う通り安心すべきだ。——だがしかし、さっきから胸を引っ掻くこの感覚は一体何なのだろう。

「女子高生ねえ……」

もやもやとした気持ちのまま、俺はそうと扉を閉めた。

「……なんかおかしいわね」

パソコンと向かい合ったまま、ユミは顎を右手に乗せて怪訝そうな声を出した。

自室での化粧水の詰め替え作業に飽き、休憩がてらユミのファッション雑誌を眺めていた俺は、彼女のベッドから身体を起こす。

「あれ、通話はいいの？」

『『マイクの調子がおかしい』って言って、ミュートにしてるわ。こっちの声は届かない』

「そっか。で、どうしたのさ」

「車の音とか、人の声とか、ずうっと雑音が混じってる。いつもは何も聞こえないのに」

体勢を元に戻して、俺は「モテカワ女子の丸秘スキンケア法」という記事を指でなぞる。ユミにしてはえらく神経質だと思った。

「窓が開いてるだけじゃないの？」

「それも考えたんだけど、変なのはそれだけじゃなくってさ。今日はアゲハ自体が……げ」

ユミは画面を見るなり、ちょいちょいと俺を手招いた。片方のイヤホンを外すとこちらの手に押し付けてくる。

画面には「アゲハ」——小柳ミキのメッセージが表示されていた。

『エリカ様？ 大丈夫ですか？』

「応答しないとまずいんじゃないの」

「まずいわよ、だから会話は筆談でお願い。メモ帳とペンはそこ」

「……オーケー」

とりあえず引き出しから筆記具を引っ張り出し、イヤホンを左耳に嵌めた。俺の顔を確認したユミは、一度咳払いをするとマイクのミュートを解除した。

「ごめんなさいね、アゲハさん。新しいマイクを探すのに時間がかかってしまって」

「——大丈夫です！ マイクの換えまであるんですね、すごい！ あ、そうそう、違う話になるんですけど、エリカ様ってお茶菓子では何が好きなんですか？ 好きなお菓子屋さんとかありませんか？」

マシンガンのように放たれた質問に面食らう。しかしユミは冷静なもので、一瞬考えただけで『レゾン』のクッキーかしら」と答えた。「レゾン」とは、この近くだけでなく全国のデパートや百貨店にまで支店を持つ、大手洋菓子店の名前だ。

ユミはペンの背で俺の手を突くと、メモ帳に文字を綴った。

『ね、うるさいでしょ。元気すぎる』

『俺にはなんとも。アゲハさんの声も初めて聞いたし』

確かに澁刺としすぎているが、だいたい想像した通りの可憐な声だった。ただユミの言った通り、度々大きくなる車のエンジン音が彼女達の会話を邪魔している。本当に、窓の外でしている音な

のだろうか？

『こんなにハキハキ喋らないのよ、普段はもっとぼわっとしてんの』

ユミがそう書くと同時に左耳の中でサイレンが響いた。イヤホンを共有している俺と彼女は、同時にバツと顔を見合わせる。

「ごめんさい。声がちょっと聞き取れなかったのだけど……アゲハさん、今そちらで救急車と
か通らなかった？」

「——え、あついえ、通ってませんよ！」

小柳ミキは鈴のような声を震わせ、明らかに動揺しながら否定した。ぶんぶんと首を振っているのが見えるようだ。

音源の位置までは分からなくとも、あの独特のサイレンは間違いなく俺達の耳に届いていた。音自体がしていないというのはどう考えても嘘だ。

『絶対通ったよね、救急車』

『うん。アイツ何であんなに慌てるわけ？ 家の中でもサイレンくらい聞こえるでしょ、もしかして家の外にいますか』

ユミは文字を書きつつ的確にアゲハへの回答を喋っている。不自然な間を作らず、「加莉屋エリカ」として会話を成立させながら冗談まで挟む余裕があるというのが恐ろしい。

と、電話の向こうでいきなり雑音が増えた。ミキが意図的に声を張り上げ隠そうとしていたあの音を、俺はしっかりと聞き取った。

——『イラッシャイマセ』って……本当に外か!

『店の中だ。ひとつでいいです、とかも聞こえた』

『屋外にいるのは決まりね。店も今出たみたい。あのさ、ケー』

一度ペンを止めたユミは「睡眠不足解消法」をマイクに向かって淀みなく話す。会話を聞く限り、小柳ミキは時間が経つにつれどんどん興奮しているようだ。矢継ぎ早に浴びせられる質問にユミが集中できるよう、俺はペンを握ったまま何もせず待機する。

そうして十五分が過ぎた頃ようやくユミがペンを動かした。電話の向こうのミキはといえば、喋り疲れたのか軽く息を切らしている。

『……ケータイにも使えたっけ、この通話ソフト』

『たぶん。でもそんなことする理由がな……あれ、音が』

音が反響して聞こえる。

——戦慄が走ったのは俺だけではない筈だ。傍らにいる実姉も、顔を珍しく強張らせて固まっていた。

ミキの声や吐息には、ちょうど鉄筋で作られた建物に入ったときのようによくエコーがかかっていた。そしてそれに気付くと同時に、家の中で「びんぼーん」とチャイムが鳴ったのである。……今まで滅多に聞いたことのなかった、このマンションのチャイムが。

ユミから『行け』と言われるまでもなく俺は席を立とうとした。再びチャイムが鳴る。そういえばイヤホンの向こうで、一切車の音が聞こえなくなっている。

「——エリカ様？ えーと、チャイムとか鳴ってませんか？ ……お家、『グリーンヒルズ』の302号室で合ってますよね？」

稲妻のような疑問が脳内で炸裂する。

——昨夜酔っ払って帰って来たとき、ユミは戸締りをしたか？

姉はマイクをすかさず無音にすると、その答えを鋭く叫んだ。

「ショウちゃん、走って！」

「了解！」

コードを千切りかねない勢いでイヤホンを耳から引き抜いた。ノブを捻るのももどかしく、俺は右足で扉を蹴り開け、玄関から最も離れた姉の寝室を走り出る。

訳が分からない。どうして彼女に家がバレた？ いや、今はそんなことを考えている場合じゃない。玄関の鍵を閉めない——。

オートロックでないのが不思議なくらいの広い部屋だけれど、ここまで廊下が長く感じたのは初めてだ。パニックに陥りかけた頭が、玄関までの数秒を信じられないほどの長さに引き延ばしている。

どうして、ドアがこんなに遠いんだ！

ユミの焦ったような怒鳴り声が遠くで聞こえた。

「ちょっと何考えてんの！ 『開けますねー』じゃないわよ馬鹿、待ちなさい、こちら！」

顔面から血の気が引いた。扉から突き出た銀の円柱がキリキリと歪な音を出す。扉が開かれよ

うとしてゐる。俺たちの秘密を閉じ込めた扉が、招かれざる客の手によって、蝶番が軋む「ぎ、い、い」という音は、終・わ・り・が・始・ま・る・カ・ウ・ン・ト・ダ・ウ・ン・だ。光が一筋、差し込んだ。

カーテンの僅かな隙間から差し込んだ日脚が、床に広がった女の髪をより艶やかに見せていた。俺とユミは息を潜め、互いに口を聞かない。小柳ミキの横顔をただ眺めている。彼女の瞳は完全には閉じられておらず、ブラウンのアイシャドウが塗られた目蓋の下で、輝きを失くした眼球がほんの少しだけ覗いていた。

ミキの顔立ちはユミほど整ったものではないけれど、十分に素朴で可愛らしい。小さな蕾がぼつと開くような、そんな笑顔は、メールを返していたときに俺がイメーজした彼女と全くずれてはいなかった。俺やユミのアドバイスを盲目に信じて、身も心も「美しく生きよう」としてきたのだろうと思った。

ユミはフロリングに散らばった硝子片をおもむろに拾い上げた。つい三十分前までミキが持っていたグラスの残骸である。姉に倣って腰を屈めると、強い匂いが鼻腔を突きあげて来た。

ローテーブルに乗っていた食器はほとんど駄目になってしまった。ゴミや破片を全て片づけたら、きちんと床を拭かなければならない。

ユミは破片を一つ拾っただけで動きを止めてしまっている。俺は黙々と作業を続け、フローリングを片付けていった。

「——あんなことするなんて思ってなかったわ、ショウちゃん」

ユミは意図のはかりかねる声でそんなことを言った。

「頭が真っ白になったんだ。他にいくらでも方法はあった筈なのに、何故か身体が動いてた。……悪かったよ」

「まあ、二人で相談できるような状況じゃなかったでしょ。謝ることじゃない」

ユミはぼいと硝子片を放り捨てた。

「寧ろ助かったわよ。それに、こんなことになる最初の原因を作っちゃったのは、あんたじゃなくって私だから」

破片はゴミ箱の中には入らず、プラスチックの縁に当たって跳ね、ミキのスカートの上に着地する。

「なんか、何もかも『まさか』って感じよね。私がふざけて言ったアドバイスをこの子が本気にしてたなんて」

「同感だよ。……まさか、姉さんを介抱したのが彼女だったなんて」

「家が近いのは知ってたけどさあ。あの写真だけでバレるとは思わなかったわよね。わざと離れた位置から撮ったのに」

「でもバレて、こうなった。……わざわざこんな所に来なければ良かったんだ」

なんだか力が抜けてしまって、俺はだいぶ破片が少なくなった床にしゃがみこんだ。
小柳ミキは、動かない。

ドアを閉めるのが間に合わなくて、彼女を家に入れてしまった。ドアノブを掴もうとしたその時に扉が外から開けられたのだ。

ミキはかなり驚いていたが、俺の顔を見てすぐにぱっと表情を明るくした。「エリカ様の弟さんですか！」と距離を詰めてきたその時点で、彼女の靴は玄関の中だ。

そして、ミキはローファーから足を抜きだしたと思いきや俺の腕の下をくぐり抜け、「すごい！ エリカ様のお家だ！」と我を忘れたようにはしゃいだ。慌てて廊下に出て来たユミに向かって、ほとんど押し倒すような勢いで飛び付いた。俺は彼女の後姿を呆然と眺めていた。

「ほんと、狂信的というか何というか。芸能人のファンってこんな感じなのかしらね。家が分かれば即押しかけてき。プライベートよ、仕事じゃないのよ。まったく……」

俺の隣にしゃがみ込んだユミは、ミキの着ているセーラー服のスカートの裾をつまんで軽く持ちあげた。少しむっちりした色白の太腿が露わになり、すぐにまた、濡れて黒に近くなった布で隠れた。

「……こんな風に、痛い目見るとは思わないのかしら」

ユミは飛びついて来たミキの身体を引っぺがすと、すぐに穏やかな笑顔をとり繕い、快く彼女をリビングに通した。小柳ミキは、目の前にいる「エリカ様」にまず家に突撃した非礼を詫び、それからその理由や今までの思いの丈を熱っぽく語った。

ほとんど途切れることなく紡がれた話の一部を抜粋する。

曰く、昨夜は太っていた頃のことを思い出して憂鬱になってしまった。ストレスは美の大敵なので、「エリカ様」に言われた通り夜の散歩に出かけることにした。

曰く、「エリカ様」に言われた通り制服もきちんと用意していたが、二十歳を過ぎた人間が着ると流石に目立つので今までは家の中でしか「青春気分に入る」ことが出来なかった。しかし出かける際に、真夜中ならどんな服でも目立たないだろうと思いつき、セーラー服に袖を通した。

曰く、昨夜に会ったときから「エリカ様」だと気付いていたが、強かに酔っていらっしやっただけで介抱に専念した。ただし家はしっかりと記憶に刻み込んだ。あそこで出会えたことは運命だと思う。昨夜は興奮して眠れなかった。

曰く、夜通し「エリカ様」について考えている内に、「ビューティ・コンタクト」中にお邪魔するのはちょっととしたサブライズになりはしないかと思った。二日酔いで苦しそうな場合は再び介抱して差し上げるつもりだった。より早く自分が昨夜の女子高生だと気付いてもらえるように制服を着た。家を出発し、通話を初めてすぐに、元気であることが分かって安心した。

ミキはこれらのことを、ごく当たり前といった風にべらべらと喋った。憧れの存在に会えた感動のためか両頬は紅潮し、目付きはとろんとしていて、本当に発熱しているようだった。

そして俺も熱が出そうだった。ユミに向かって熱心に喋る彼女に見とれていたのだ。彼女の声や表情、顔の造形、想像通りの慎ましやかな胸を持つスタイル。全てが俺の鼓動を無理矢理速めた。

発言の内容など最早気にならず、今が危機的な状況だということも半ば頭から飛びかけていた。しかしすぐに、俺は冷水を浴びせられたように現実には引き戻された。

ユミと談笑していた彼女は、ふいに言葉を切るとソファから立ち上がった。

『すいません。御手洗いをお借りしてもいいですか？』

『えーと……そこを出て左に曲がって、廊下を突き当たった所です』

『ありがとうございます』

ミキはにっこり微笑んで俺の隣をすり抜ける。

リビングと廊下を隔てる硝子戸に彼女が手をかけたとき、俺は自室の扉が開けばなしなのを思い出した。俺の部屋はリビングとトイレの間にあるから、廊下を歩いていけば必ずミキの視界に入る。あの部屋の床には、絶対に見られたらいけないものが転がっていた。

他所の会社から買い上げた化粧水の空瓶と——「le parterre」と印字された、中身を詰め替えたばかりの硝子瓶だ。

小柳ミキをリビングから出せば今度こそ全てが終わる。そう思った途端に思考回路の一部がショートした。俺は硝子戸を開けようとする彼女の手を掴み、リビングに隣接したキッチンまで引きずって、それから。

それから。

「結局何も解決してない。寧ろ墓穴だ。……これからどうしよう」

「決まってんじゃない」

ユミはきびきびと言った。

「逃げるのよ」

「……彼女を残して？」

「当たり前でしょ。あと、『加莉屋エリカ』に関する全てのビジネスから手を引くわ。それで出来るだけ早くここを発つ。一時間か、最悪でも二時間以内だね。こいつが飛びついて来た時点でそうしなきゃいけないと思ってたの。……あんたが時間を作ってくれて本当に助かった」

ユミはすっと立ち上がると、俺を見下ろして言った。

「残念だけど、もうおしまいよ」

「……姉さん」

ユミの顔つきはいたって冷静だった。ただ彼女の足だけが乱暴に動いて、ミキが持ってきた菓子店の紙袋だとか、運よく割れていなかったグラスとか、とにかくミキが暴れたせいでぶちまけられたものを蹴飛ばしたり踏み潰したりした。

ユミの動きによって床の液体がぴしゃんと跳ねて、俺の顔にかかった。頬についた滴がつう、と肌の上を滑り、唇の縁に触れる。もうあまり温度は感じない。

舌先で舐め取ると喉が焼けるような味がした。

未だリビングにしゃがみ込んでいる俺を放って、ユミはさっさと自分のベッドルームに消えた。彼女は時折りリビングに戻ってきて戸棚などを漁りながら、携帯で誰かと話し続けていた。この状況には全くそぐわない、加莉屋エリカの上品な声でだ。恐らく相手は製薬会社とか、今まで取引してきた者達だろう。

俺は小柳ミキの近くにずるずると移動して、伏せられた長い睫毛や制服の隙間からちらりと覗いた胸元に、また少し見とれた。

そしてこれからのことを考える。「逃げるならきっと海外だろう」、そんな感想がふと頭をよぎった。

ユミは着々と逃亡の準備を進めている。この商売に関する彼女の行動にはいつだって澱みが無い。偽造パスポートなんてとくに用意しているだろう。……そういえばこの家を借りるときも別人の身分証明書を使っていた。

また、三年のプランクがあるとはいえ外国語もかなり喋れる筈だ。彼女ならすぐに新しい拠点を決めて、新しい「仕事」に取りかかるような気がした。

ユミについて行けば何の問題もない。何処へ行ってもある程度刺激的で贅沢な生活が送れる筈だ。この三年間そうだったように。

まったく頼もしい姉だ。人としてどうかはともかく、詐欺師としては完成された存在なのではないだろうか、不甲斐ない弟は思う。

彼女は己の武器を知り尽くし、とにかく用意周到で、大事な時には恐ろしく頭が回り、決断力もある。そして美しい。彼女がそうでなければ、人々の中で「加莉屋エリカ」が命を得ることはなかっただろう。……それは外見だけの問題ではなくて。
美・し・く・生・き・て・い・る。

俺はもう一度小柳ミキに目を移した。

「ぼさっとしてないで荷づくりしなさいよ。 着の身着のまままで出るつもり？」

声を荒げるユミは、既にはほとんど準備を済ませたらしく、例のキャリーケースをリピングに引っ張り込んでいた。

「いつまでそこに座ってんの。 いい加減立ちな」

「あのさ、姉さん」

「なによ」

「姉さんみたいに生きるってどうすんの」

「はあ？」

俺は顔を上げ、たった一人の姉と目を合わせた。

『美しく生きる』って、どうすんのさ」

ユミはやたらと量の多い睫毛をばちばちとさせ、赤い紅をひいた唇を引き結んだ。猛禽類のよ
うな目がギッと俺を睨む。彼女は物凄い勢いで距離を詰め、俺の頭の上に手を乗せた。

ぶちぶちい、と無慈悲な音がした。

「そんなの自分で考えな！」

「ちょ、頼むから離して、痛い痛い痛い」

強制的に立ち上がり、彼女を見下ろす形になってもユミはまだ手を離してくれなかった。毛根が、頭頂部の毛根が悲鳴を上げている。

「うじうじしないで自分の答えを出すの。さっさと動いて、その責任も自分が全部引っ被るの。甘ったれんじゃないわよ、気持ち悪い」

鼻息荒くそう捲し立てた姉を見下ろし、俺は少し笑った。

「……ありがとう」

「言葉なんか要らないのよ。いいからさっさと動け」

どん、と強く胸を押されて少しよろめいた。足を踏ん張って背筋を伸ばす。決意はすんなり口から出た。

「俺、ここに残るよ」

「残るって、一緒に逃げる気はないってことよね。じゃ、これからどうすんの？」

「どうにかする。これからの結果も自分で全部引っ被る。とにかく、姉さんには迷惑かけないようにするから」

ユミは一旦口を嚙むとキャリーケースを蹴り倒し、中から何かを抜き出した。再びケースのファスナーを閉め、立ち上がる。

「分かった。……じゃ、後始末はよろしく」

キャリアケースの取っ手を掴み、ユミはあっさりとそう言った。ローズブラウンの髪がさっと俺の横を過ぎたとき、ズボンのポケットに何かが捻じ込まれた感触がした。

ユミは一度も振り向かず颯爽と廊下を進む。俺は何も言えずに黙ってそれを見送る。銀色のノブに手をかけ、扉を押し開いたときも、彼女は外の世界だけを見ていた。

「じゃあね、ショウ。上手くやんなさい」

力強く艶やかで、けれどとても優しい声がして——ばたん、と扉が閉められた。

折れ曲がった通帳には見たこともない数字が並んでいた。大学の学費を払うために作ったっきり俺自身は全くいじっていなかったこの通帳を、ユミはいつから自分の手元に置いていたのだろうか。

今玄関を飛び出せばもしかしたら追いつけるかもしれない。しかしそんな事をすれば確実に姉は激怒する。俺は公衆の面前でキャリアケースや拳骨によってポコポコにされた後、ヒールで容赦なく踏み付けられるに違いない。

そんなのは御免だ。他にやるべき事もある。

俺は通帳を再びズボンの後ろポケットに捻じ込んだ。

「——さて」

小柳ミキは相変わらず床の上で眠り続けている。

俺はぺたぺたと彼女に近寄り、先ほどと同じ位置に腰を下ろした。完全に横を向いていた身体の角度を変え、覗きこんだ時に閉じられた彼女の目が見えるようにする。そっと両頬に手を添えた。

「おい、いい加減起きて下さいよ。この酔っ払い」

指でキメ細やかな肌を叩くと、ミキは少しだけうぞうぞと動く。

華奢な肩を掴んで揺すぶる。同時にまた声をかける。暫くそうして、ようやく彼女は薄目を開けた。

「…………う。頭痛いです」

可愛らしい顔をきゅうっと顰めている。

「そりゃ、ギムレットをグラス三杯も飲んだらねえ。お酒駄目な人だったんでしょ、えーと……ミキさん」

どさくさに紛れて名前を呼んだが、彼女はそんなことより視界がぐにゃぐにゃと歪んでいることを気にしていた。

「だって、だってエリカ様が勧めて下さったから……言いだしたの、確か弟さんでしたよね。あんまり覚えてない…………」

その通り、と俺は口の中で呟いた。

一時間程前。正常な思考力を完全に失いながら彼女の右手を掴んでいた俺は、更に何を血迷ったのか、反対の手で酒瓶を握った。

『お、お酒飲みましょう、お酒！ 紅茶もいいですけど、姉さんはこっちの方が好きなんです！』
ポトルはノールドジュネヴァ・ジンの二十年。アルコール度数はユミ曰くたったの四十二度である。

ミキは酒瓶を見た瞬間に困り果てた顔をした。掴まれた右手を揺らして首を振る。

『アルコールは駄目なんです、私』

『一杯くらいなら大丈夫ですよ、ほら座って』

『いえ本当にすぐ酔っちゃって。ご迷惑、おかけしたくないですし……離して下さい』

『あら、カクテルだったら飲みやすいし、ちょっとくらいなら全然平気よ。私とアゲハさんの出会いに乾杯しましょ』

ユミの一声でびたりと抵抗を止めたミキは、あっさりと席につき、夢見るような表情で笑った。
『はい、エリカ様！』

そうしてへべれけに酔っぱらった彼女は悪魔のように笑いながら机の上をなぎ払い、蓋が開いたままのノールドジュネヴァの瓶を思い切り床に倒して、ついでに自分もぶっ倒れた。

下戸に強い酒を飲ませるとあんな風になるのか。アルコール中毒で死ななくて本当に良かった。一人で胸を撫で下ろしていると、ミキはゆるゆると首を動かし、歪み切った視界の中で「エリ

カ様」の姿を探し始めた。

「弟さん。なんだかお部屋がぐちゃってしてるんですけど。エリカ様は一体どちらに……？」

「あ、え、ええと。姉さんは、さっき出かけて行きました。ちょっと急用が出来たみたいで」

「ええっ——あ」

ぱちっと目を開くと、ミキはバネ仕掛けの人形のように上半身を起こした。しかし途端に眩暈を起こす。吐息のような声が漏れ、彼女の身体からふっと力が抜けた。

俺は咄嗟に、ミキの頭の下に右腕を差し込んだ。

「あ、ありがとうございます……」

心臓が別の生き物のように跳ね上がった。彼女の肩を抱きとめた右手を火が包んだような気がした。水分を失くした舌を必死に動かして、俺はやっとの思いで「いえ。大丈夫すか」と声をかける。……なんてそっけない。

ミキは見るからにしゅんとしていた。飲めない酒を飲んで酔っ払うわ、目覚めてみたら「エリカ様」はいないわ、彼女にとって是不本意なことばかりだろう。

「ごめんなさい。姉も凄く残念そうで、謝ってました」

「あ、いえ。私のことはいいんです。エリカ様のこと、あんまり知れてはいませんけど……お忙しい方ってことは分かりますから」

そんなことを言いつつ目元はじんわりと朱に染まり、くりくりとした瞳は若干潤んでいるのだった。俺は心の中で悶え、叫ぶ。

その、顔を、やめろ！

彼女を支える右手の熱はじわじわと血管を伝い、手首を、肘を、身体中を侵食していく。顔にまで到達したところで、堪らなくなつた俺は一度思い切り目を瞑つた。

「えっと、あの！ 姉は他にも謝ってました。一昨日の質問への答えをまだ送っていません」

背中を抱きとめられながら、ミキはゆっくりと首を傾げた。

「答え、ですか」

「そう、文末にあった質問の答えです」

『もっと美しく生きるためにはどうしたらいいんでしょうか』

がちがちになつた右手に力を込めて、彼女の身体を更に引き寄せる。二百人の女を騙してきた、一人の女を口説くための洒落た文句など一つも浮かびはしなかつた。

器量の問題かもしれないが——どのみちこれが精一杯だ。

「……美しく生きるためには、恋を試してみるのも良いそうですよ」

ミキは一瞬きよんとした後、花が咲くように笑ってくれた。

(文学部歴史学科三年)

夜空にねがう

亜木山レイ

「お願いだから、お前は母さんみたいにならないでくれ……」
父の静謐で傲慢な願いが、僕の体を絡めてやまない。

*

「ただいま」

首筋にじっとり汗をかきながら玄関で靴を脱いだ。今は夏休みも空けた季節であるというのに日差しは強く、僕の制服のシャツはぐっしょりと汗をかいていた。

夏は嫌いだ。

体じゅうが汗でべとべとになるのもそうだが、なによりも自分が子供のころの記憶を思い出させる季節だからだ。

……嫌な記憶も。楽しかった記憶も。

家の中には誰もいない。仕事中毒の父は当然帰りが遅いし、義母の方もどうやら買い物に出て

いるようだ。

「はぁ、勉強すっかな」

冷蔵庫からアイスを取り出し、二階の自室に上がる。

なにも僕は勉強が好きなんだというわけではない。受験をひかえた高校三年生にもなったこの時期ならば、こうして机に向かう義務があるというだけの話だ。

机の上にノートをひろげ、しばしばうつつとする。

窓の外に広がる空は心をかき乱すような青をしていた。

……本当はこんなことしていたくないのに。本当は、本当は……

ピンポン

一階の玄関からチャイムの音が聞こえた。思考を一気に中断され、頭を搔く。

「……はいはい」

溜息まじりに階段をどかどかと下りる。玄関の鍵を雑に開けると、紺色の制服を着た宅配業者の男が立っていた。

「お届け物ですー。ハンコかサインをお願いします」

愛想のよさそうな青年が書類を差し出す。しかし、おかしなことにその青年は肝心の荷物を持っていなかった。いったいどういうことなのだろう。

「お届けの荷物なんですが、何分場所を取るものでして、どちらにお運びすればよろしいでしょうか？」

「え？」

予想外の言葉に面食らう。青年の後ろでは他の宅配業者が大型の荷物の搬入をおこなっているのが見えた。しかもかなり大型のようで、トラックから直接積み降ろしている。いったい何を運んできたというのだ……。義母のきっかけサンダルに足を引っ掛けながら慌てて表に出る。

「！」

高校三年生の夏

そいつは僕の

運命を変えにやって来た。

*

「中西ん家行ってくるわ」

台所に居る義母に声をかける。

「今から？」

夕飯を料理しながら顔だけを向けて義母が尋ねた。

「一緒に勉強してくる。俺、今日は飯いらさないから」

「そう……」

抑揚のない声でやり取りを交わし、玄関のドアを閉める。

頭は昼の荷物のことでもいいだった。

逸る心を宥めながら、家の近くにある「和み川」に向かう。

「和み川」とは、高校の通字路の途中にある緩やかな川のことである。ゆったりとした壮大な川で、大雨洪水警報が鳴ろうともその様相が変化しない穏やかな性格をしていた。

「和み川」には大きな鉄橋が掛っており、その下にはコンクリートで舗装された下水排出口があった。この排出口は現在使われておらず、しかも対岸からは死角になるという有り難い場所であった。

苔の生えた排出口の中から、大きなビニールシートにくるまれた塊を引きずり出す。頭上の鉄橋を電車が通過した。電車の中にいる人からは僕が今何をしているのか分からないだろう。それでも心臓の音がバクバクと五月蠅い。秘密の宝箱を開けているような気分だ。

電車が完全に通過するのを待ってから、空色のビニールシートを引き剥がす。足元に咲いていたキリン草がさらりと風に揺れた。

「……………」

視界の大半を埋め尽くす白が広がる。

しばし言葉を失い、その存在を十分に確認すると自然と笑みがこぼれた。平均よりも背の高い高校生男子である自分が、両手を広げて余りある大きさをした……

それは、真っ白なキャンパスであった。

昼間にこれが届いたとき、まず考えたのは隠し場所だった。しばらく考え、思い当たったのがこの「和み川」の排出口だった。キリン草が茂り、ほとんど人目に付かないこの場所は毎朝登下校で見ている自分にはかき隠し場所であったと思う。

そっと、キャンパスに貼り付けられた紙片をなぞる。この送られて来たキャンパスにはメッセージが添えられていたのだ。

“誕生日おめでとう、好きにしなさい。”

母より“

細々とした筆跡に、間違いなく母のものだと分かった。

僕の母と父は、僕がまだ小学生の頃に離婚している。僕は母と離れ父と暮らしていたのだが、僕の誕生日にはこうして母が贈り物をくれることがあった。しかしそれも僕が十歳までの話で、何故今になって母から誕生日プレゼントが届くのか甚だ疑問であった。配送業者の人の話による

と、このキャンバスは何年も前から今日届くことが決まっていたらしいのだが……

キャンバスのざらざらとした表面を撫でる。

「母さん、どうして今なんだ？」

母はいったい何を考えていたのだろうか。

キリン草は首を振るばかりで、応えてくれそうにもなかった。

*

「よお、おはよう」

朝、「和み川」のほとりを登校していると友人の中西が声をかけてきた。中西は高校で出来た友人で、ひょろっと背が高く、フレームの厚い眼鏡をした奴だ。同じように背の高い僕とは色々と共通するところがあり、気が付いたらあっという間に仲良くなっていた。

「おはよう中西」

「お前、今日あてられてた数学の問題解いてきたか？」

中西の言葉に、たちまち真っ青になった。昨日はあの後ずっと「和み川」の河原に居たため、あたってた数学の問題のことなど忘れてしまっていたのだ。

「うわぁ、完全に忘れてた」

「おい、大丈夫かよ。中山の奴しつこいぞ」

はあ、と思わずため息が漏れる。中山というのは僕の担任兼数学教師の名前だ。嫌味な中年男で、質の悪い粘着質な性格をしていた。

ある時のこと、中山の授業で予習をしてきていないことがばれた女子生徒がいた。中山はその日にやる問題の全てをその女子生徒にあて、彼女が「分かりません」と俯いて答える度に「だからお前は馬鹿なんだ！」と怒鳴った。これは終業のチャイムが鳴っても当然のように終わらず、他のクラスの野次馬が見ている中で何度も何度も繰り返して、狂ったように同じ行為を続けた。

必要以上の責め苦である。

「なんで数学の教師まで中山なんだよ……」

「だよな。しかも中山以外の先生の回答を板書しようもんならさ、その時間中なじられることが確実だもんなあ。数学は受験に一番重要な科目だし、俺ら一年間は中山から逃げられねえよ」

国立大学の理系を志望する学生が多いうちのような学校では、必然的に理系科目、特に数学や物理に割く時間と熱意が並みのもではなかった。そのため僕のように理系科目を不得意とする生徒は肩身の狭い思いを強いられ、息苦しい環境以外の何物でもなかった。しかも、この自分と同じように不平を述べている中西との間でさえも埋められぬ学力の差が存在し、同じ話をしていてもその深刻度は大きく異なっている。つまり僕は、数学をやってきていないことが到底許される身分ではない……。

取るべき行動はひとつしかあるまい。

「中西、俺、一時間目の中山の授業サボるわ」

「はぁ？」

脱兎のごとくその場を後にする。

後ろから中西の非難の音が聞こえたが、そんなことは気にしない。だって、逃げられるものからは逃げた方がいいじゃないか。

そんな言い訳ぐらいしか、この年までに身につけていなかった。

*

油の匂いが立ち込める部屋に入る。床には造花や絵の具が無造作に散らばっていた。なるべく物音をたてないようにそっと部屋を物色していると、突然右肩を叩かれた。

「おい、授業は始まっているぞ。ここで何をしている。」

「！あ、すみません」

「……なんだお前か。三年がここで何してるんだ？」

僕の肩を叩いたのは、美術教師の原田だった。

「先生、俺のこと覚えてるの？」

「覚えてるよ。二年の時、美術取ってただろう？」

原田は当然のようにそう言った。

原田は中山と違って生徒に人気のある教師だ。気さくで優しいし、わかりかし派手な顔立ちをし

ていた。取り立てて真面目でもなく目立ちもしない自分のことを原田が覚えていたのは意外だった。

「二年の時、授業で油絵やったの覚えてるか？」

「あの、花瓶とか果物とか描いたやつですか？」

「そうそう。だからさ、お前のことはよく覚えているよ」

自分としては特に心当たりがなかったが、原田にはよほど印象深いことでもあったのかもしれない。

がたり。原田が手近な椅子に腰掛けたので、僕もそれにならった。

原田の白衣の襟には、黄色い絵の具のシミがついていた。

「うちみたいな高校ってさ、教養の科目にあんまり力入れてないだろう。美術部もあるっちゃあるが、部員のなかで美大に進む生徒なんて皆無だ」

「はあ」

原田の話は脈絡がなく、何を言いたいのか掴めなかった。油絵の話はもういいのだろうか？

「だからさ、この学校では誰も本気で美術なんかやっちゃいないわけだ。……俺も含めてな。」

「……」

会話の内容にばかり気を取られていて気が付かなかったが、原田はいつもと様子が違っていた。口元では笑みをつくっているのだが、目が笑っていなかったのだ。

……瞳は暗く、泥水のように淀んでいる。

「先生？」

原田は尚も言葉を紡いだ、どこか虚ろで、誰に話しかけているのか分からなかった。

「始めから本気じゃない奴はいい。そういう奴らは、毛ほどの痛みも感じないんだからな。……だが、そうじゃない奴は、ほんの少しでも本気だった奴はどうなるんだ。掴めない、覚めない夢に苦しむしかないのか？」

頭を抱えた原田の顔は、ここからではよく見えなかった。

美術室の窓から光が差し込む。光は原田の前方にしか降り注がず、影となったところに居る僕と原田を嘲笑っているようだった。

美術室に舞う埃を雪のようにキラキラと輝かせながら、誰もいない空間ばかりを照らし続けた。

原田が顔をあげる。酷く痛めつけられた犬のような顔だった。

「俺はもう、自分の感覚に麻酔をかけて生きていくしかないらしい。気が付かないうちに、そう強いられたみたいなんだよ。」

「……………」

僕は原田の目を真っ直ぐ見ることができず、彼の肩口の黄色いシミをみつめた。若々しいはずの原田の皮膚はたるんで見え、体は小さく見えた。

それっきり会話は途切れ、終業のチャイムが鳴った。廊下を移動する生徒達のガヤガヤ声に、先ほどまでの空気が霧散する。

原田も次の授業が有るようで、さっさと準備室に引っ込んでしまった。しばらくすると、準備室の方から係の生徒に指示を出す原田の声が聞こえてくる。いつもと変わらない朗らかな声に、違和感を覚えた。

そろそろ帰るか……。原田と生徒の楽しげな声を背に、目的のものを鞆に押し込んで美術室を後にした。

「奪われていない奴は自分が持っていることにも気が付かない」

そう、どこから泣いている子供のような声が聞こえた。

それでも僕は、振り返らずに歩みを進めることしか出来なかった。

*

昔、僕が小学生だった頃。ささいなことからイジメの標的になったことがあった。そのときの僕は今と違って背も高くなり、内向的な性格をしていたために、こうして見くびられることが珍しくなかったのだ。クラスメイトはひとつの生き物のように意見を統一させ、自分達と僕との差異を見つけては、それをなじった。

一学期に広まったイジメで僕の居場所は完全になくなり、重苦しい気持ちのまま夏休みを迎えることになった。

夏休みになると、僕の家では父方の祖母の家に行くのが恒例であった。祖母は、生真面目で融通の利かない父の母であるとは思えないほど、温和で優しい人だった。

僕がしょぼくれた様子をして一人で遊んでいると、祖母は思いつめたような顔をして、僕の肩をそっと抱いた。

「お母さんに会えなくて、寂しかろう……」

「え……？」

僕是要領を得なかった。どうしてここで母の話が出るのだろうか。この時すでに父と母は離婚していたが、母の話がでるとは思いもよらなかったのだ。

「あなたのお父さんには黙ってろって言われてたんだけどね、ばあちゃんは元氣のないあんたを見ちゃいけないよ……」

「ばあちゃん……」

「お母さんに、会いたいだろう？」

「……………」

不思議だった。僕は目に涙を浮かべていた。

ばあちゃん、ちがうんだ。そうじゃなくて僕は、クラスの友達が僕を無視したり、父さんがちっとも目を合わせてくれないことが悲しくって、それで……。

しかし僕の涙は止まらなかった。

はらはらと頬を流れる雫に、自分では気付けなかった真実を悟らされた。

寄る辺のない不安に悲しみ孤独に傷つくたびに、僕の心は知らず知らずのうちに失くした温もりを求めていたのかもしれない。

今まで堪えていたものが堰を切ったように溢れだす。涙がぼろぼろとこぼれ、鼻の奥がつんと痛かった。

母に、会いたかった。

次の日、僕は祖母に教えてもらった住所を頼りに、一人で電車に乗った。ガタンゴトンと大きな電車で身を揺られる。向かいの席で楽しそうにおしゃべりをしている母子が羨ましかった。

途中までは以前に母と来たことのある街だったのだが、それから先は見知らぬ街であった。初めて見る看板や店に、言い知れぬ心細さを感じた。シャツの胸元を握りしめながら、歩き続ける。祖母の家を出発したのは昼前であった。しかし、途中で道を間違えたりしたため、母の家の近くまで着く頃には日がどっぶり暮れてしまっていた。

母の旧姓を探して、暗闇の中を歩く。

ぐるぐると同じような道を歩いているうちに、僕は完全に道を見失ってしまった。

辺りは真っ暗な闇。周りに人影もない。

もしかしたら、僕はもう母さんに会えないのかもしれない。

大きな不安がクジラのような大口を開けて僕を飲み込む。

もう、指一本も動かさせない。僕は道の端に座りこんでしまった。
その時、

「探したわよ」

暖かくて細い指が僕の手を引いた。

「あ……」

月明かりも見えない夜だった。

道は暗く、先も見えなくて、どうすることもできなかった僕に道を示してくれたのは

「まったく、もう会えないかと思ったわよ」

天上に輝く一等星。

闇を穿つ星明かりに照らされて、母は僕を抱きしめた。

*

結局、一時間目は丸ごとサボってしまい、休み時間に入った生徒の群れにまぎれて自分の教室に帰った。鞆を机の上に置いて、一息つく。原田の異様な態度が気になったが、なんとなくもう会うこともないような気がして、気にもとめないことにした。

「おい、まずいことになったぞ。」

中西が苦笑を浮かべながら近寄って来た。

手には数学のノートを持っている。とてつもなく嫌な予感がした。

「実はな、二時間目の先生が急遽出張が入ったみたいで、中山の数学が二時間目に変更になったんだよ……。」

「げえ」

喉から不快な音が漏れる。それはまずい。なんとということだ。背中にじっとりと嫌な汗が浮かんだ。

「……じゃあな、中西」

先程降ろした鞆を再び肩にかけ、駆け足で教室の扉に向かう。

途端になり響くチャイム。

「おい席つけえ！問題あたっての奴は前出ろ！」

中山の濁声が教室にこだました。

*

小鳥のさえずりで目を覚ますと、自分は見知らぬ部屋にいた。
体を包む布団は柔らかく、花のようないい匂いがした。

「……お母さん？」

目元を擦りながら布団から這い出す。

目の前の襖の隙間からは光が漏れていた。

縁に指をかけて襖を引くと、

「……！」

あまりのまぶしさに瞳孔が収縮する。強烈な夏の朝日が僕の視界を奪った。

網膜を焼く光の先。

僕は、それを見た。

「……………」

それは、見事な花園だった。

樞、朝顔、月見草、立ち葵、金糸梅、猿すべり、薊、桔梗、カンナ、ゼラニウム、スイート
ピー……………

およそ夏に咲き誇る花々と木々が、無作為な構図で咲き乱れていた。高い塀に隠され、誰にも
知られずに。

うつくしい庭の中心には母がいた。

僕に背を向ける形で、一心不乱に何かをしている。

母の周りには顔料を溶くための乳鉢と、様々な細さの筆が散乱していた。

「お母さん……？」

子供らしい心細さから母を呼ぶ。

母は僕が呼んでいることに気が付かない。

真っ白いキャンバスに覆いかぶさるようにして、常軌を逸した集中力で指を動かしている。瞳には強い光を湛え、瞬きは最低限しかしていない。呼吸も深く、少なく。体の全細胞をその行為に総動員しているようだった。

僕の知らない母がそこにいた。

庭に出て、母の絵を覗き込む。

青い花にかかる濃藍色の影、日の光に淡く透ける花菖蒲、重なり合ったやわらかな花卉。

母は手元に与えられた数種ばかりの顔料を組み合わせて、自然界に横たわる全ての事象を再現していく。

僕は目が離せなかった。

母の絵は、この庭の花園を凌駕する美しさだったのだ。

こんな風に絵を描いたら……

気が付くと母は手を止め、僕を見ていた。

「一緒に描いてみない？」

うつくしい庭の真ん中で、二人並んで絵を描く。

僕は初めて、自分の居場所を見つけたような気がした。

ずっとこの時間が続くといいのに……。そう思った。

*

教室は剣呑な雰囲気にもまれていた。

鳴りやまない中山の怒声。

まるで地雷原を忌避するように、クラスメイトは僕の方を見ないようにしていた。

「どうしてこんな簡単な問題も分からないんだよ！一年生だって解ける問題だぞ！この程度の問題も解けないんなら、どこの国立にだって入れん！お前の人生、終わったようなものと一緒だ！」

唾を飛ばしながら怒鳴る中山。

僕は終に、例の繰り返し地獄に捕まってしまった。

僕がこうして黒板の前で吊るしあげられるのも、今日でもう五回目だ。

捕まって初めて気が付いたが、この繰り返しの地獄は予想以上に精神を疲弊させる。何度も何度も同じ罵倒の言葉を聞いていると、本当に、自分の人生がもう、どうしようもないくらいお先真っ暗であるよう思えてくるのだ。

数学のできない奴は人生の落後者であり、欠陥品である。そうとしか考えられなくなってくるのだ。

「お前は寄生虫みたいなやつだな！お前が中西のノートを写したり、数学の授業の前にこそそこそ逃げだしたりしているのを知らないでも思ったのか！」

とぼっちを受け、名前を出された中西がうつむく。申し訳ない気分ではいっばいになった。すまん、中西。

早くこの時間が終わることを願う。

はやく終れ。はやく終れ。

最近はこのことばかり考えている。

*

次の週の放課後、美術室の前を通ると、廊下には大量の荷物がはみ出していた。いくつかの段ボールの中に、原田の私物を見つける。

「原田先生……？」

気になったので準備室の中を覗き込んで見ると、原田ではない教師が出てきた。

「どうした？君も美術部の生徒か？」

いぶかしむように眼鏡をずり上げた教師は、あまり見ない顔であった。原田が使っていたデスクの上からキレイにものがなくなっているのが、その男の肩越しに見える。

「あの……原田先生はいらっしゃいますか？」

眼鏡の教師に尋ねる。彼は心当たりがあるようで、人の好い笑みで答えてくれた。

「ああ、原田先生なら、先週いっぱいこの学校を辞められたよ」

「え……？」

よく、意味が分からなかった……。

驚愕して固まっている僕のことと置き去りに、その教師は原田が辞めた経緯について語りだした。

原田の退任は急なことで、職員室は雑務の処理に苦勞しているということ。この眼鏡の男は大西先生といい、原田の授業を代行しなくてはならないということ。原田の退任の原因は、実家にいる一人暮らしの父親が寝たきりになってしまったことであり、その父親は原田に残された唯一の肉親であるということ。

「何もこんなに急に辞めることはないと思うんだがねえ。原田先生はこの仕事があまり好きでは

なかったみたいだけど、それにしても、……もっとちゃんとして欲しいものだよ」

大西は不快感のこもった溜息を吐いた。

原田が辞めた……？

あまりにも急なことで、実感がわかない。

しかし、あの日の原田は確かに様子がおかしかった。何か苦しみを抱えているような、やりきれない思いを抱えているような顔をしていた。

「原田先生は国立の美大を出られた先生なんだけどね、どうしてそんな人がうちみたいな高校に居るのかと思っていたけれど……。どうもずっと病気がちだったお父様を看病しながら生活してこられたみたいだよ。就職も、国立の美大ならば他の道もあっただろうに、時間に余裕のある教員の職に就いて。もったいないことだよねえ。」

大西という教師は、訊きもしない原田の過去についてまでペラペラと話をした。よほど誰かに喋りたかったのだろう。上っ面ばかりの憐憫からは、原田へのコンプレックスが隠しきれていない。

「……大西先生は、どうして美術の先生になられたんですか？」

「え？ 私かい？ そりゃあ……ただ絵を描いているだけでは家族を養いきれないからねえ。私だって昔は画家を志したこともあったけど、それも学生の頃までだ。……君、知ってるかい？ 画家っていうのはね、自分も、周囲の人間も巻き込んで不幸にするくらい覚悟がない奴はなっちゃいけないんだよ。収入が不安定なのもあるが、なにより、ずっと苦しまなければならぬ。創造の

苦しみにだよ。心が休まる時はないし、思い通りにいかない作品に憤って涙するんだ。私はそんな葛藤だらけの一生より、温かな家庭を持って、好きな時に絵を描いている方が気楽でいいがねえ」

まるで、用意してあったような答えだった。
きっと、彼が学生の頃から温めていた「理由」なのだろう。

僕は大西に会釈をして、その場を去った。

誰も不幸にしない、わずかばかりの挫折を含む幸せの形。
僕にはまだ、早すぎる気がした。

*

母と再会した夏休みを経て、僕が絵筆を取るようになったのは自然な流れだった。母のマネをして、自由帳に絵を描く。花、鳥、木、星……。心に思い描いたものを紙の上に起こしていく。始めは上手くいかなかったが、何度も練習して、対象を観察する。そのうちに、自分が描きたいように、またはそれを上回るように絵を描くことが出来るようになった。担任の先生に「絵画コンクールに出さないか」と言われ、出展したコンクールではいつも最優秀賞をもらった。自分をイジメていた友人も、先生も、みんな僕の絵を褒めた。僕は誇らしかった。

学校が始まって母に会えない日々が続いても、紙に絵を描いている間は寂しくなかった。絵を描いている間はそのことに夢中で、時間の流れるのが速く感じた。

世界が輝かない日はなかった。

そんな日々にも、ある日突然終りが来る。

「母さんが死んだ。」

黒いスーツに身を包んだ父が、そう言った。

「お願いだから、お前は母さんみたいにならないでくれ……」

今まで、僕とちっとも目を合わさず、まともに向き合ってこなかった父が、僕の肩を掴んでそう言った。

「……うん」

僕はこの時、確かに絡めとられた。

思えばこの日は、星のない空であった。

*

実は原田が辞任したと聞いた日、中山から呼び出しを受けていた。心当たりが痛いほどある。先日の授業のことが頭をよぎる。午後の授業が終わった後、準備室に来るようにと昼休みのうちに放送があった。わざわざ数日後、しかも放送で呼び出す辺りが中山のいやらしさを表わしていた。重たい足を引きずりながら、美術室を通り過ぎ、数学準備室に向かう。

その途中で、中西に会った。中西は何人かの生徒達と連れだって歩いている。赤本を広げて、熱心に話しこんでいるようだった。

僕のことには気が付いていない。

この解法は陳腐だの、定石がどうの、別解が他にも有るだの、僕と一緒に居る時にはしない勉強の話をしている。中西は彼らと対等に話をしているように見えた。

……中西はとてもいい奴だ。

一年の頃から成績が下がrippばなしで、明らかに無気力である僕とも友達でいてくれる。うちのような学校は勉強へのモチベーションが大切であるため、落ちていく者からは自然と人がいなくなっていくのが普通である。それにもかかわらず、中西は僕から離れていくことも、見下すこともせず、変わらぬ態度で接してくれる。

彼らの会話を邪魔してはいけなから、黙ってその隣を通り過ぎる。中西の隣にいた生徒と目が合った。彼は冷淡な瞳で僕を一瞥すると、小さな声で中西に話しかけた。

「おい、中西。なんであんな奴と一緒にいるんだよ。」

その言葉を背中で聞きながら、歩く速度を速くした。早く中山の所に行こう。これ以上、生徒達の声を耳に入れたくなかった。

「…………うるせえなあ」

怒気を含んだ中西の低い声が廊下に響いた。

驚いて後ろを振り返る。他の生徒も同様に驚いているようだ。

「一生懸命考えてる奴の邪魔すんなよ」

「……………」

少しすると、固まっていた生徒達がまばらに愛想笑いをした。「お前、これは簡単な奴だって」「そうだぞ中西、このレベルなら参考書にも載ってるぞ」中西も表情を入れ替え、困ったような顔で笑う。

「わかんねえって。もっとちゃんと教えろよ」

楽しげに通り過ぎていく生徒達の中で、一度だけ中西と目が合った。

頑張れよ。分かっているからな。

フレームの奥の瞳が、そう語りかけているような気がした。僕は髪の毛をくしゃくしゃとかいて、一步前に進む。

……まったく彼にはかなわないな。

重たかった足が、少し軽くなったような気がした。

*

母が死んでからは授業以外の場面で絵を描かないようにした。

答えのない日々が続いていた。

答えとは、“何のために生きるのか”という問いへの答えだ。

中学に進んでからは、がむしゃらに勉強に打ち込んだ。絵のことを忘れたかったのだ。幸い中学の授業はそんなに難しいものではなかったため、僕は県でも有数の進学校に進むことができた。これには父も喜んだ。父は僕がまっとうな道を進むことを願っていたし、この学校に入れば、ある程度の将来が約束されているからだだった。

しかし、高校に入ってからには中学よりも苦しかった。

少しでも気を抜けば授業についていけなくなった。もともとそんなに要領の良い方ではなかったため、だんだんと苦手を解消することができなくなっていった。毎日、毎日、自分をすり減らしながら勉強していく度、……ある日突然、手が止まった。何をやるにもやる気が起きなくなってしまったのだ。

これはまずい。こんなことをしている場合ではない。そう思ってペンを握るのだが、頭は回らず、問題を解くことができなくなった。

それから、僕の成績は下降の一途をたどった。高校三年生にもなったこの時期、志望校を決めていない生徒などほとんどいなかったが、僕は夏休みを過ぎても自分の将来を決めることが出来なかった。

自分が何をしたいのか、何のために生きるのか、分からなかったからだ。

……終わりのない 夜の中にいるようだった。

*

中山の準備室のなかを覗いて、くらくとした。

予想を上回る最悪の事態だ。

「……なんで父さんがいるんだよ……」

準備室の中に、背広姿の父が座っていた。

中山と対になるようにして座っているため、ここからでは背中しか見えなかったが、あれは確かに父だ。

背広を着ていることから、父が仕事の途中で呼び出されたということは明白だった。最悪だ。

胃がきりきりと締め付けられる。口の中が途端に乾いてきた。今日という日ほど中山のいやらしさを呪ったことはない。

「失礼します……」

中西に軽くしてもらった足も、もはや鉛のように再び重くなっていた。準備室の中には中山以外の教員もおり、皆気まずそうな顔をしている。

中山の顔を見る。

なんと、あの中山が顔面蒼白で僕をすがるように見てきた。

……中山め、自分のしでかしたことに後悔しているのだろう。ばくばくと鳴り響く心臓を宥めながら、父の後ろに立つ。

「遅かったな」

「授業ならとっくに終わっているだろう」

「今まで、何をしていたんだ？」

警察官が容疑者を詰問するような威圧感で、父は僕を振り返らずに問う。

一つ一つの言葉が、釘を打ちつけるようなプレッシャーを持っていた。ここからでは見えないが、その顔は憤怒で歪んでいることだろう。

「……美術室に、いた」

父の問いに答えることは絶対だ。たとえそれがまずい答えであると分かっているとしても、虚偽を述べることは許されない。

僕が父に逆らえぬことは、数年前から変わらぬ不文律であった。

「……美術室？」

父がガタッと椅子から立ち上がる。

顔に刻まれた深いしわからは、怒りが立ち込めているようだった。

中山も他の教員達も、この厳しい父に委縮している。

僕とて、その例外ではなかった。

「……は、美術室だと？こんな受験の大事な時期に、何のために、そこにいたんだ？」

父が毛嫌いする類の単語が僕の口から洩れたため、その表情はより厳しいものになっていく。

「……」

「そこに居る中山先生から、お前の成績のことで電話があったよ。仕事の途中だったというのに急いで来てみれば……。お前、学校で何をしているんだ？」

停止する時の流れ。

この空間全てを、父の怒気が支配していた。

中山は父の向かいで縮こまっている。己のもくろみ以上の展開に青くなっているのだろう。

父はきっと中山から僕の成績が底辺であり、しかも授業態度まで悪いと言って聞かされたに違いない。しかも僕は先程まで美術室にいたこともばれた。一触即発である。

コロソ。

「あ……」

僕のポケットから、黄色い絵の具がこぼれ落ちる。数日前に原田の準備室から拝借した絵の具だった。

事の成り行きを見守っていた教師たちは気にも留めていない。生徒がポケットから物を落とすにすぎないからだ。

しかし、その絵の具は、父を激昂させるには十分なものであった。

次の瞬間、僕は胸倉を掴まれて壁に押し付けられていた。

ガタンッ！

「……！！」

背中を壁に打ち付けたことよりも、こうして追いつめられたことの方がショックだった。数年ぶりに近くで見る父の顔は怒りに震えていた。僕を掴んだシャツでぎりぎりとう首を締め上げる。

「よくもこんなまねができるな！ 恥ずかしいとは思わんのか！」

辺りを震撼させる一喝。僕は頭の中がぐちゃぐちゃになってしまい、父の言っていることを理解するのに時間がかかった。

“恥ずかしいとは思わんのか！” “恥ずかしいとは思わんのか！”

“恥ずかしい” ……。

…… “恥ずかしい” ？

視界の中に黄色の絵の具が転がる。想起した。

あの夏の日。

きらめく一等星。

隠れた花園。

キリン草。

原田の襟。

中西の背中。

白い、キャンバス。

「！」

僕の胸倉を掴んでいる父の手を、万力を込めて引き剥がす。奥歯が碎けるくらい歯を喰いしばっていた。

「何が、……は、恥ずかしいんだよ……！」

情けないことに緊張で声が裏返っている。こんなに大きな声を出すのは久しぶりだ。

「恥ずかしいって、何だよ……！ 僕も、母さんも、恥ずかしいことなんて、ひとつも……して、いない……！」

押し返した父はふらついていた。信じられないものを見ているような目をしている。僕がこうして、父に面と向かって反発することなどなかったからだ。

息苦しくなって呼吸を整える。

心そのままに言葉を紡ぐのは、一苦労だった。

「お、おい」

中山がうろたえたように僕の顔を見つめている。

「え……？」

頬から水滴がこぼれた。

僕は驚いた。

まさか、自分が泣いているとは気が付きもしなかったのだ。

ぼろぼろ、ぼろぼろと次から次へと雫が溢れてくる。

祖母の家で泣いたことを思い出した。そう言えばあの時も、押し込めていた本音を解放するときに、こうして涙が出たものだった。

「……っ」

小さなうめき声とともに、父の体がぐらりと傾いだ。

誰が止める暇もなく、大きな音をたて、父はその場に倒れこんでしまった。

*

重たい臉を無理やり持ち上げる。

どうやら腕組みをしたまま眠っていたらしい。

強張った肩と背中を伸ばしながら目頭を軽くもむ。時間を確認するために時計を探すと、病院のベッドに横たわる父と目が合った。

「……起きたか」

「あ、う、うん……」

あまりの気まずさに、ぎこちない返事になってしまった。腕に点滴用のチューブを指した父は仕事用のシャツのままであった。

「よく眠っていたな。疲れていたのか？」

父はどこか険の取れた顔をしていた。

次に父が目覚めた時には学校での続きが待っていると思っていた僕は、正直、拍子抜けをした。

学校で父が倒れた時、中山がいち早く救急車を呼んだ。その後、心配してやって来た義母とともに医者のお話を聞いたのだが、診断によると、父は重度の過労と睡眠不足が原因で倒れたということだった。過労も死にいたることがあるため安心できないが、主治医が「しばらく安静にすれば大丈夫」と言ったので、僕も義母もほっと胸をなでおろした。数日間の入院で済んだため、義母は今、父の着替えを取りに家に帰っている。

僕と父は病室で二人っきりとなり、しばらくの間沈黙が続いた。

最初に口火をきったのは父の方であった。

「お前を母さんから引き離したことは、間違いだとは思っていない。」

静かに独白するように父が言葉を紡ぐ。僕は沈黙を続けることで先を促した。

「母さんは、結婚や家庭というものにとんと向いてない人だった。お前はまだ小さくて覚えていないだろうが、赤ん坊のお前が高熱をだしていようと、絵を描くことをやめなかったし、私や

お前よりも花や星ばかりに心を砕いていた。」

あの夏の日の母の背中が蘇る。

父の言う母の姿は、真実のものなのだろう。

あの日、とり憑かれたように絵を描いていた母は僕のことなど気が付いていないようだった。

「母さんはよく私を責めた……」一緒になんてなりたくなかった。よくも私を閉じ込めたな」と。確かにそうだったのかもしれない。自分の才能で人生を切り開こうとしていた母さんを、お前を理由に閉じ込めた……。」

……あれは、首から落ちるはずの花だったんだ。

そう呟いた父の言葉が印象的だった。

「お前が母さんと離れても、その血を継いでいることは分かっていた。だから言ったんだ」母さんのようにならないでくれ”って。」

父は優しい声色で僕に論ず。

「分かってくれるな？」

今までの、意思を持たない僕ならば、再び領いていただろう。

その言葉に絡め取られることをよしとしただろう。

しかし、僕はもう、自分の本意に気が付いてしまった。

「父さん、それでも僕は母さんと同じ道に進みたい。」

父は先程までの表情を一変させ、自分を裏切った息子を睨んだ。

「お前も、母さんも、何故そんなものに心を奪われるんだ。美だの、芸術だなどというものは幻想にすぎない。有りはしないんだ。」

腹も満たさず、体も温めない。どうしてそんなものに一生を預けるんだ。絵なんかなくたって、普通の生活が送れるじゃないか。」

父は憤っていた。母に聞けなかった答えを、僕に求めている。

「父さん、僕は取り上げられてやっとわかった。」

僕達にとって、絵は“星”なんだ。

描いていなければ、自分を見失ってしまう。

何をしたいのかも、何のために生きたいのかも分からなくなるんだ。……真っ暗な夜に置き去りにされた気持ちになる。」

くさいセリフだというのはわかっていた。しかし、これが僕の答えだった。

今まで一度も声に出さなかった、心からの言葉だった。

「……父さん、僕はもう、星のない夜にかえりたくない。」

今まで胸の奥でくすぶっていた痛みは消えていた。きっと、明るい場所に出られたからだろう。

痛みのなくなったところに手をあて、父を見る。

父の瞳は尚も険しいままだった。

「……星か。母さんもよく、そんなことを言っていた。では訊くが、どうしてお前はその星を選んだんだ。空には人の夢の数ほど星が瞬いている。その中でお前が母さんと同じ星を選んだ事に、まったく影響を受けていないと言い切れるのか？お前は母親を亡くした寂しさから、その星と母を重ねて追いかけているだけだとは言えないのか？」

父の言葉と入れ替えに義母が入ってきた。

僕は自分の鞆を手に、病室を出る。

答えられなかった。

でも、僕はもう、今までの僕ではなかった。

*

その日の「和み川」は、休日であるというのに騒がしかった。

この「和み川」に面した三田原総合病院の中にまで伝わってくるほどの賑わいだ。

今日は父の主治医に、先月の検査結果をもらいに来たのだが、外来でずいぶん待たされた。料金を精算する番もまだまだ先なので、喫煙所を探して院内をウロウロすることにした。

随分見当違いのところまで来てしまっていたようで、気が付けば辺りは入院患者の病室に切り替わっていた。ふと目をとめた病室のネームプレートに、珍しいが、よく知った名字を見つける。有名な女流画家と同じ名字で、ものすごく絵の上手い生徒が前の職場にいた。

無遠慮だと思いながらも病室の中を覗く。

ここは三階に位置する部屋であるため、窓から「和み川」がよく見渡せた。対岸には人だかりが出来ている。

「何かあったんですか？」

窓際のベッドに腰掛けた入院患者に声を掛ける。

「……」

しばらく待っても応答がない。聞こえていなかったかと思ひ顔を覗きこむと、どこかで見たことがあるような顔をしていた。もしかしたら、と思い、先程のネームプレートで見た名字を呼ぶ。その患者は驚いたように私を見た。

「失礼、どちら様でしたか？」

サラリーマン風の男が丁寧に応える。自分が知っている生徒とは違い、生真面目で神経質そうな雰囲気をしていた。

「三田原高校で美術教師をしておりました、原田と申します。」

「息子の高校の……美術の先生がなにか？」

美術という言葉に、妙に険のある人だった。ますます自分の知っている生徒とは対照的な父親だ。

「和み川」の対岸の騒ぎは、この病室からよく見えた。

いや、まるでこの窓から見えるよう、計算されているような位置だった。

「ほお……」

対岸の人だかりの中心。

真昼だというのに、宵闇があった。

畳三十畳ほどであろうか。

巨大な横長いキャンバスの上に、真っ暗な夜空が現れていた。

夜空の下にはそれを見上げる夏の花々。

皆一様に美しく、本物と見紛うばかりの精密さだ。

キャンパスの中心で絵筆を握っている人物に心当たりがあった。
あいつがこれを描いたというのか。

絵を描いていた青年が手を止める。

周囲の者はこぼれんばかりの拍手を送った。

この絵の完成に、称賛が絶えない。

暗いモチーフの絵であるというのに、これだけ人の心を惹きつけるとは……

病室に居る他の患者達も手を叩く。

誰もがこの洒落た趣向に、拍手で応えた。

温かな空気が流れる。

皆、自分の子供のお絵かきを褒めるような生温かさだ。

しばらくすると、青年が再び絵筆を動かした。

あれで終わりではなかったというのか。

皆気になって青年の指先に注目する。

これは……

キャンパスの夜に光が灯る。
黄色の星が、闇を穿つ。

夜空に満足していた人々が沈黙する。

自分もその中のひとりであった。

胸に、熱いものがこみ上げる。

視線をそらすことが出来なかった。

たぶん、この時私は、泣いていたのだろう。

「自分は、奪われたんだと思っていました。」

生徒の父に話しかける。ここからではあの生徒に届かないから、せめてこの父親に伝えたかった。

「自分が高校三年生の頃、父に二択をせまられました。結果として私は父の金で美大に進み、卒業後は田舎に帰りました。だから高校生である息子さんがうらやましかった。余りある才能を抱えて、ウジウジと悩んでいられる息子さんが。私はもう、何も選ぶことが出来ないから。これから先、自分から夢を奪った周囲を憎みながら生きていくんだと思いました。ですが……」

私は勘違いをしていたみたいです。

独り言を残してその場を去った。

これ以上の言葉はあの親子でかわすべきだ。
窓から差し込む陽光に背中を押されて、出口へと歩いて行った。

*

じっとりとかいた汗をシャツでぬぐって、一息つく。

心地よい疲労感が体を包む。

心はかつてないほど幸福だった。

この気持ちこそが僕の答えなんだと思った。

対岸の病室を見つめる。

きっと父も僕を見ているはずだ。

残念だったね、父さん。

僕は「好きにする」よ。

夜空にねがう

大切な物を抱きしめるように、強く絵筆を握った。

星は輝く。

たとえどんなに夜が暗くても。

(医学部保健学科一年)

幕末のユーカラ

清 洲

九月、蝦夷地北東にある標津の空は澄み渡り、海はこの土地の常として凜いでいた。東にある国後島が波除けとなり、穏やかさを絶やすことがない。昼の陽射しは、寒さの訪れが早いこの地にも仄々とした暖気を満たしていた。

望めば、西の空に標高一〇六一メートルの標津岳が見える。草深い山中を、一人の男ががっしりとした平蹄の黒馬を走らせていた。普段であれば柔和な顔を形作るだろう小さな目を大きく引き裂き、氣道を行き来する息は馬以上に荒いようにも見える。南摩綱紀羽峰、この標津の地の代官を務める壮年の武士であった。

標津川河口に位置する代官所からここまでは馬でほぼ半日。未明から碌に休みも摂らず走りとおして来たのである。羽織袴の腹に片腕でしっかりと風呂敷包みを抱え込ませ、木立の先一点を注視する眼差しには鬼気が迫る。標津の奥地にあるアイヌコタン（集落）。そこで昨晚、重傷を負ったものが出たという。

頼む、間に合ってくれ――。

草葺きの小屋がまばらに集まる平地に出ると、南摩は馬から転げ落ちるかのように駆け出し、戸外にまで集まった人が溢れている一軒の家屋に走り寄った。

「すまん、薬を持ってきた。開けてくれ」

突然の来訪者に彫りの深い顔を驚かせているアイヌ達を分けて、体当たりのようにして箆戸をくぐる。

腥い香りが南摩の鼻を突いた。

横たわる男を囲んだ人々が一齐に南摩を見上げる。その中で一番奥に座っていた禿頭の僧が、口を開いた。

「南摩様でございましたか。残念ですが、もう助かりますまい」

「……桂涅槃殿!? お主もここへ来ていたのか」

顔に刻まれた皺を一段と寄せている老僧は、南摩の見知ったものであった。江戸幕府の撫育が、続く蝦夷地ではあるが、一方で樺太などの北方からは山丹満州や露西亞人の影響が強く及んでくる。桂涅槃は、宗教家や商人を通じて反和人の意を持つに至るアイヌの増加を憂いて、本州からアイヌの教化に渡ってきた者の一人なのである。数年前にも標津を訪れており、そこで蝦夷の各地を廻っていくのだと南摩は聞いていた。

「拙僧も手を尽くしましたが、この有様です」

墨染めの袖から骨ばった手で指し示した先には、部屋の中央に横たわった男がいる。歪ませた顔を脂汗に濡らし、微かに上下する胸から下は、肌蹴させられた厚子という着物の下にきつく晒

しが巻かれていた。しかし本来は白かったであろう晒しの布は一面赤黒く染まり、一部にはじくじくとした濁りの色までもが伺える。

「はらわたまで達していたのか。一体、何故こんなことに……」

「……キ、キムンカムイ（山の神）……」

呻くように漏らした南摩の言葉に、誰ともなく周囲のアイヌは呟いた。キムンカムイとは、アイヌ語でクマのことを表す。

南摩の出身である会津にも、喉に半月形の印がある熊はいる。しかしそれより一回り以上は大きいと聞く蝦夷の熊を思うと、身の毛のよだつ思いがした。男の腹は、熊に喰い破られていた。

「蝦夷熊か……！　しかし、我らよりも熊のことを解っているお主らアイヌが、何故むざむざとこんな目に」

「……熊の気が恐ろしいほどに昂ぶっていたらしいですな。何か山奥で異変があったのかも知れませぬ」

ぼつりと応じた桂涅の視線の先で数度大きく呼吸をしたアイヌの男は、中途半端に吐気を止めた後、二度と晒しの巻かれた胸を打たせることは無かった。

鈍く音をたてて落ちた風呂敷包みから、塗り薬の壺や一反巻きの晒しが零れ落ちる。力なく東の窓を見やる南摩は、眼下で真昼の陽を返す青い海に、一艘の船を見たような気がした。

——そうだ、今日はいつがこの地に来る日のはずだったのだ。

同じ会津藩の出身で、共に学んだあの男がこの蝦夷に来る。南摩は会えなくなってしまうこ

とを心の中で詫びるとともに、胸をよぎる不安を払うように、何にともなく祈っていた。

どうか、あの秋月悌次郎に、恙無きよう……。

九月入蝦（九月、蝦に入る）

漁獵を生と為し秋を知らず

蜻蜒洲の外に一蜻洲

頭を回らせば郷里豈遠しと言わんや

海を隔てて青山、即ち奥州

漁獵をもって生業としているところだと聞く。時潮の巡りも知らないのだろう。しかし、そこも日本には変わらない。想えば郷里からそう遠いわけでもない。海を越えれば青山があり、そこはもう会津のある奥州ではないか――。

出立してすぐに書いた詩を眺める男へ、肩越しに声が掛かった。

「どうしたんですのお前さま。ほら、景色がこんなに綺麗ですよ」

「おう、すまん。ちょっと出発した時を思い返していてな」

「今は今の景色を見ないと勿体無いですよ」

会津藩士・秋月悌次郎と、その妻の美枝であった。海の上を穏やかに進んでゆく船の名は『若松丸』。白地に会津葵の抜かれた帆が風を孕んでいる。和船である若松丸は船底が平たいため、

津軽海峡や納沙布岬などの難所では大変な縦揺れで悌次郎たちを苦しめたが、今は海と同じような静謐を以って彼らを運んでいた。

彼らが赴いているのは、先ほど発った標津から北西の位置にある斜里という土地である。網走湾の最奥にあるこの地では先代の代官が亡くなってしまったため早急に次の代官を必要としており、悌次郎には体の良い左遷先であった。

気落ちを隠せない悌次郎と変わって、肉の薄い色白の顔が無邪気に微笑ませる美枝は、矢立と懐紙を手に、被布のない市女笠をあみだにして根室海峡の静かな海を覗いている。左手に見える知床岬の先などを眺めやっは、さらさらと懐紙にその景色を描き付け、見る間に伸びやかな筆致の絵が完成してゆく。

一方の悌次郎は懐紙を手にしたまま、夏羽織の上に据えた顔を心持ちしかめているようだった。眉が柔らかな曲線を描く悌次郎の顔は、四十路に見合わぬ童顔とも言えるほどだったが、目には失望の色が濃い。

「南摩様に会えなかったのがそんなに残念だったんですか？」

「それは残念に決まっている。これほどまでに遠くの地で知己に会えるはずだったのだぞ？」

「楽しみはそれだけではないでしょうに」

「それはそれ、当然だ」

悌次郎と南摩綱紀羽峰とは同じく湯島の昌平齋で学んだ先輩後輩の仲であり、同じ会津藩士でもある。悌次郎はそのころ『誰も布団に入って寝たところを見たことがない』と言われるほどの

勉強好きであった。日本中の国々を調査し、会薩同盟の締結、桜田門外の変の調停、八・一八の政変など東奔西走して藩に勤めたものだったが、唯一の不幸が、その悌次郎を登用してくれた家老・横山主税の死であった。

どこにでも立身を妬む輩はいるもので、南摩綱紀や、同じく蘭学者の山本覚馬らが左遷や禁足の憂き目にあつたとの報せを耳にしたかと思つた矢先、悌次郎も藩中の旧守派の策謀により、北の蝦夷地においてもさらに北方のこの斜里にまで飛ばされることとなつてしまつたのである。

南摩は三年ほど前から樺太に飛ばされており、現在は斜里よりも南東に約五十数キロメートル離れた標津を任されていた。境遇だけなら悌次郎よりも悲惨かも知れず、旧知の仲として先輩たる南摩との話は是非ともしておきたいものだった。

会う機会が果たしてもう一度あるだろうかと考えながら、悌次郎は鬢の毛をふわりとした風に遊ばせる。

——だが、あの羽峰さんもこの地で頑張っているのだ。私も頑張るしかなからう。

このような僻遠の地でも、身を粉にして人々を助けに行く。まさに仁を為す儒学者の鑑ではないか。左遷にも自棄を起こさず、思うさまにならずとも癩癩を起こさず。

次に待つ境遇を自分から楽しみに行くのだ。

思えばこの旅も、美枝との結婚を果たして一月経つか経たないかという時分である。下手をすると杜甫の『新婚別』を再現しかねなかつた突然の辞令。

恐る恐るその報せを家族へ切り出した陰鬱たる悌次郎を救つたのは、この美枝の一言であった。

「まあ、それはおめでとうございます！ 東蝦夷と言えば、あの素晴らしい海の幸がとれる処でございましょう？ わたくしも一度は行ってみたいと思っておりますの」

ほら、鯨に棒鱈、塩鮭、するめ——。

嬉しそうに指折り挙げる美枝の笑顔を思い返して、悌次郎は水面を見下ろす船縁から顔を上げた。その動きに気づいて、舳先から美枝が振り向く。

「やっと鬩が取れましたのね。素晴らしいでしょう、この景色」

「ああ、本当に。清らしい」

はためく美枝の懐紙には、蝦夷の青い空と海とが、澄んだ黒の流れで写し取られていた。

「お頼み申します」

あくる日、そうして秋月悌次郎たちが斜里に到着する少し前に、斜里代官所に現れた一人の女性があった。

アイヌ民族独特の括弧紋を大きくあしらった鉢巻——ヘトムイエへに留められた長い黒髪が靡く肩には、一丁の火縄銃が無造作に片手で担がれている。襟足にやはり括弧紋を入れた厚子に鮭皮の靴と、服装はアイヌの普段着として一般的なものだった。門前に立つ切れ長の眉目は何故か顰められている。

取り次ぎに戻った門番は人を呼び止めているのだが、年嵩の者は話半分にとだの若いアイヌ女性と見て、焦ってでもいるように急いで通り過ぎる。赴任している十五人の藩士のうち若い者は

表長屋の陰から様子を覗いていたが、呼び立てる語気も荒くなってきた門前の声に、面倒を躲そうと小突き合っているだけである。

「お頼み申します、なぜどなたもお出でにならないのですか！」

長屋の陰にての長い小突き合いの末、理由をこじつけられて対応に出させられたのは、この夏に若年寄の田中鉄之丞が病死して以来、慣れない代官代を任されていた柿沼新八という手代であった。角ばった顔に笑みを浮かべて進み出る柿沼だったが、常は柔和なその笑顔があからさまに引きつっている。眼前の彼女は夫婦そろって斜里一の漁の名人だと言われており、柿沼にとっても知らない顔ではなかったが、名前を覚えるほど関わりがあったわけでもなく、顰めた眼差しで睨まれたためしもない。

「えー、どのようなご用件でしょうか。あー、い、いペ……さん」

どもりを隠そうと無意味に視線を逸らし、柿沼は更にどもった。

その柿沼の様子を女性は暫く眉を顰ませたまま見つめていたが、その後彼女はため息とともに柿沼へ返す。

「イペランケと申します。柿沼さん」

「うわ、いや、これは、すみませんイペランケさん」

狼狽する柿沼に対し、イペランケは南の斜里岳へ目を上げて呆れているだけである。先ほどから彼女が呆れと怒りをない交ぜにして視線を飛ばしていたのは、ただ単に彼ら会津藩士の対応が無駄に遅かったからというだけであり、火縄銃を担いでいるからといって何の他意があった訳で

もない。早く用件を済ませようと、彼女は狼狽を続ける柿沼へ口を開いた。

「柿沼さん、この前交換していただいたこの鉄砲なんです。弾が出ないんです。替えてもらえませんか」

響聲を解いてみれば、イペランケの眼差しは年頃の女性に似つかわしく穏やかだ。落ち着いた声音も、柿沼の慌てようを取めるには十分だった。

それでも柿沼は逃げるように一人の足軽を呼びつつ長屋の裏へ去っていく。木村万作という男は、柿沼と交代するように長屋の裏から引きずり出され、『面倒臭い』という感情を露骨な摺り足から据わりの悪い頭まで全身で表現しながらやってきた。先日、イペランケが鉄砲を交換した本人であった。

「アイヌがどうしたんだよ。俺の鉄砲に文句があるってことかよ」

舌打ち交じりに投げられたその言葉を受けて、イペランケの視線は一瞬にして大量の陰を含んだ。

「ええ。こちらもユク（鹿）三頭という対価を支払ったものですから。それ相当のはたらきをしてもらえないと困ります」

「お前らの狩った獲物の価値なんてその程度だったってことなんだよ。あきらめな」

見下しつつ返された木村の言葉を聞きつつイペランケはじっとその目を見返していたが、嘲りをも含んだその顔へ、突如耐えかねたように笑いを噴き出した。

予期せぬイペランケの行動に木村はいきり立つが、彼女はひとしきり笑った後、微笑み混じり

にゆっくりと切り出した。

「そうでしょうね。田中さんから前に聞いたけど、標津と紋別を合わせても、ここであなた達が稼げるお金って四千五百両くらいなんでしょ？ でも、そのお金は私たちの獲物以外のどこから出てくるのかしら。こんなにお代官の対応が悪いなら、移住してきたシサム（和人）さんたちにも言っ、もう獲物を納めるのはやめちゃいましょうか」

イペランケ夫妻は漁の名人として、和人も共に働く漁場では一目置かれている。斜里の酋長の一家とも親しい。田中鉄之丞が生前に私的な交流を持っていてもおかしくないことではない。

ところで、この時会展藩は幕府より役高五万石と一時金一万両を受け取っていたが、京に一千人も藩士を常駐させている状態ではその維持費だけで吹いて飛ぶほどのものでしかなかった。鑑みるに、『その程度』の金額さえ稼げなくなったとすれば、東蝦夷地の代官所にはどのような仕打ちが下されるか――。

柿沼新八が風のように走り来て、拳を振りかぶる木村万作を羽交い絞めにしていた。

「すみませんイペランケさん！ こちらも備えには限りがありまして、鉄砲を新しいものに替えるのはちょっと出来ないんです。すみませんが今日はお引取り下さい。また交換ならいつでも受け付けますので！」

「いい気になるんじゃないぞアイヌが！」

暴れる木村を引きずりながら、柿沼は代官所の奥へ消えていく。後にはイペランケだけが門前に取り残され、彼女はやり場のない視線を代官所の広場や板倉へ呆然と向けていた。

担いでいた火縄銃を下ろし、ため息をつきながら海へ振り返る。

イペランケは確かにこの斜里の集落においてそれなりの影響力を持っている。しかしそれでいざ漁場を管理する和人に対し一揆のようなことをしてみたらどうなるだろうか。イペランケも木村も柿沼も、その帰結は脳裏にはっきりと思いつかべられていた。

今もアイヌの間で語り継がれるクナシリ・メナシの反乱のような大規模な抗争を起こすまでもなく、斜里の代官一同は御役御免になるだろう。自治の形態を確立できるかもしれない。しかし、それよりも可能性が高いのは、漁の最盛期などに本州から出稼ぎにやってくる『やん衆』と呼ばれる人々や商人達のタガが外れてしまうことである。

その日その日の風模様次第でフトコロのあたたまりそうな漁場へ転々とするようなならず者の多いやん衆は、働き手としての頭数を増やすには良かったが、アイヌ・和人の差別なく賭博からの騒動や暴行に及ぶこともしばしばであり、それを抑止する力の多くは、内地流の法や銃火器の扱いに明るい藩士達であった。また、アイヌとの交易にやってくる商人達には、算術に暗いアイヌを騙して暴利を得ようとする者が非常に多く、交易の正当性を監査してアイヌ達を安堵させてくれるのも会津藩士であった。

会津藩とアイヌは今や絶妙な共生関係にあるということになるだろう。アイヌにとっても会津藩士たちにとっても、腹中には様々なほげぬ思いが溜まっているのだ。

少し沖を覗いて見れば、鮭捕りの建て網がいくつも垣根のように張り出している。海岸線に対して直角に張られた網は、沿岸を泳いでくる鮭を堰き止めて、落とし網の中につきつきと引き入

れていた。既に日も高くなってきた時分である。恐らく斜里川の河口では仲間や夫が漁に励んでいる頃だろう。

——まったく無駄足だったわ。

砂に深く足跡をつけて踵を返したイペランケの歩みを、耳に飛び込んできた歓声が止めた。

「わあ、可愛いらしい！ お前さま、あれは何かしら！」

「わかったからそう引っ張るでない。おお、なんぞ獣のようだが」

振り向いたイペランケの視線の先には、代官所の方へ歩んでくる一組の和人の男女がいた。そして彼らの視線の先には、浅瀬の岩場にて寝そべる一頭のゴマファザラシがいる。

「若松丸からも見えませんでしたわ。なんと言う獣なんでしょう？」

十代後半の新妻と見える女は男の袖につかまりながら、笠を上げて子供のように波打ち際へ身を乗り出している。秋月悌次郎とその妻の美枝であった。肩越しにその様子を暫く見ると、イペランケはゆっくりとその二人へ近づいていった。

「……あれはトッカリですね。この時期に見るのは大分早いです」

「とっかり？ お前さま、とっかりと言うのですってよ」

美枝はアザラシに夢中のようで、イペランケがやってきたことはさほど気にしていないようだった。半ば困惑顔だった悌次郎は救いが来たように感じたのか、眉の端を下げてイペランケを見る。

「いや、かたじけない。なるほどトッカリか。こちらで『独干皮』という名前で流通していたのが恐らくあれの毛皮なのだろうな」

「シサムさんたちのほうでは、『悲ら獣』と呼ぶとか聞きますね」

「ドゥカンとか悲ラシとか、うつくしくありませんわ。とっかりと呼ぶのが一番合っている気がいたします」

話題の中心となっているゴマフアザラシは暫く顔を上げて三人の様子を見ていたが、ゆっくりと黒く丸い目を閉じると、寝そべっていた岩場からころろと回転して海に落ちた。

かすかな音を立てて丸々とした滑らかな毛並みが波に入ってしまうと、瞬間、「あ」というかすかな声が美枝の喉から漏れた。

「……行ってしまいましたわ」

「いつもならあと二月ほどは先にならないと見かけませんからね。仲間のところへ帰ったのではありませんか？」

目を潤ませて夫の袖にすがる女性を、イペランケは微笑みつつなだめる。目を瞑って転がるアザラシの姿は、梯次郎の眼には簀巻きにされる巻き寿司のようだと感じられた。

「色々と教えてもらい助かったが、ときに、主は一体なんという者なのだ？ 見たところアイヌのようだが」

鉢巻に厚手に鮭皮靴というあからさまなアイヌの出で立ちのイペランケへ『見たところ』と訝りが響いているのは、梯次郎の滞在していた標津の代官所でも堂々と厚子を着用していた者がいたことと、イペランケの日本語があまりにも流暢だったことによる。

「この斜里コタンで漁師をやっております、イペランケと申します。あなたも会津の方なのです

か？」

出身地を当てられたことに、悌次郎は少し驚いた。

「おお、その通り。秋月悌次郎と申す。こちらは妻の美枝。何故わかったのかな？」

「ここへ刀を二本差してくるシサムさんはほとんど代官所の人ですし、それにあなたの言葉は代官所の人と同じです」

悌次郎は主を「にし」と発音していた。会津方言である。

会津は元来方言のきつい地域なので、ほとんどの者が標準語を身につけるために謡曲を歌ったり詩吟に励んだりなどして矯正している。ふとした瞬間に出てしまった方言を耳聴く聞きつけて判断できるのはある種の才能ではないかと悌次郎は感心した。

イペランケは悌次郎の表情を見ながら、思いついたように付け加える。

「それから……、秋月さんはもしかして、この代官所の新しい代官なのではありませんか？」

悌次郎は、ほう、と息を漏らす。

「そこまでお見通しか。……面白い、面白いな」

臉を大きく上げて発した言葉は、感嘆で半ばつぶやきのようにになっていた。美枝のほうも先ほどから夫の袖に取りすがったまま目を丸くしている。

「まあ、このあいだ柿沼さんが漁場でぼやいていましたからね。これで少しは代官所の機能も上がるんでしょう」

羽織を着ている時点で、既に上士か中士の身分であることをイペランケは知っていた。代官の

不在により現在代官所で大きい顔をしている木村万作などを例にとってみると、彼は一足軽で襟が柿色の下士である。新しい代官の身分がもし物頭以上の高さだったならば土下座三昧の日々になることは間違いない。少しいい気味だと感じてしまう。

イペランケがそう目を落とした視線につられて、梯次郎は砂地に銃床で立つ火縄銃に気づいた。「その銃はどうしたのだ？」

「え、ああ、これですか。この前、代官所で交換していただいたものなのですが、壊れたのか弾が出なくなってしまうして。取り替えてもらおうと思ったのですが、断られてしまったところだったのです」

銃の巢口をいじっていた手を止めて、イペランケはその火縄銃を砂地から抱え上げた。それを梯次郎は何の気なしに片手で受け取る。

「ふむ、拙も決して火縄の仕組みに詳しいわけではないのだが」

「でも、お前さまは細かいお仕事は得意なほうではありませんか？」

美枝は梯次郎の袖から離れ、イペランケとともにその作業を見守った。

銘に刻まれている文字は『仙台涌谷住青森仗之助戈良作』と読める。大きめの銃床と、真直ぐで細長い八角銃身とを合わせて考えれば、会津藩の北隣にある仙台藩で作られたものであることは間違いないだろう。口径は小さめの六匁筒であったが、安物では二匁半の口径が大半だったので対人用・狩猟用としてみると十分すぎる程だ。銃口にも無駄に大きな柑子は作られておらず、長い銃身は命中率の高さを窺わせ、軽量で取り回しやすい機能美が感じられた。前目当の先に堂々

と会津葵が象嵌されているところを見ると、この代官所で藩士が愛用していたものだろうと思われ。悪い品ではなかった。

それが何故弾が出なくなってしまったのだろうか。柑子を見ながら何の気なしに菓口の中に指を入れてみる。黒い粉が指について落ちた。

「はぁ。これかな」

銃身の下に仕込まれている木の槊杖を引き抜いて内部を力強く掻き出してみると、黒い火薬の燃え残りがごっそりと砂の上に降った。

「イペランケ、と申したかな。この銃は撃った後に中を洗っていたか？」

顔を上げた悌次郎の問いに、イペランケは首を振る。

「いえ。その棒は弾を込めるときにしか使っていませんでしたし、使い終えたら掃除をしろとは言われませんでしたので」

「なるほどな。火縄銃というものはどうしても使用後に火薬の残滓が砲身に残り、放っておくと弾が詰まってしまうので、何回か撃った後は掃除するのが望ましいのだ」

「それはわかりましたが、その細い棒では今のように力を込めて使っていたら耐えられないのではありませんか？」

不思議そうにイペランケは聞き返した。

確かに装填用としても清掃用としても、火縄銃に備え付けの槊杖は細く、耐久力が低すぎる。銃身下の木部に掘れる穴の径に限界があるためである。そのため備え付けのものをもっぱら緊急

時にのみ使用し、普段は太目の丈夫なものを別に携行するのが一般的であった。それなのにこの細い木の槊杖を毎回使用していたとなれば、かなり繊細に作業せざるを得なかったであろうと想像される。

「太いものは貰わなかったのか？」

「いいえ。もらったのはその銃だけです」

交換した者の不手際だろう。この槊杖で掃除をし続けたら数回で折れてしまうかもしれない。とりあえずは先端に湿らせた布をつけて、優しく何度か中を拭き取るようにと悌次郎は指導した。「ありがとうございます。これでまた使えるようになるんですね」

嬉しそうに火縄銃を押し頂くと、イペランケは深くお辞儀をして漁場の方へ去っていった。

その後姿を見送る悌次郎たちを、持ち場へ帰ってきた代官所の門番が見止める。すると気づくが早いのか、二人に呼びかけつつ彼は転びそうな速さで走り寄って来た。

「もしや、秋月様でございまするか！ 船着場に見当たらなかったということで、一同、ご心配をしております」

「おお、それはすまないことをした。予定より幾分早く着いたので、妻と共に景色でも見ていこうと思っただけ」

門をくぐり表長屋を回ると、早くも報せが行ったか気づく者が居たか、十数人の藩士がわっと駆け寄ってくる。真っ先に悌次郎の視線へその角ばった顔をつけたのは柿沼新八である。代官代の苦勞もこれで終わるかという慮外の喜びが目端から口の端から滲み出していた。

「ようこそお出でくださいました秋月様。手代の柿沼新八と申します」

「出迎えはかたじけないが、こうも皆が出てくることはなかるうに。一体どうしたのだ」

突然の人波に悌次郎と美枝は慌てふためき、折角の歓迎に却って身を硬くする。よもや勝手に出歩いていたのが図らずも大事になってしまったのではないだろうか。

悌次郎の不安を、新八の柔和な笑みが溶かす。

「いえ、まあ先程も鉄砲のことなどでいらした方がおりまして。何分詰めている者も少ないので、騒ぎが広まるのはすぐですし収まりもつきづらいのです」

言葉の端々からも周囲の人々の様子からも、どれだけ正規の代官が切望されていたかが良く分かった。更に続く言葉にも、先導者もおらず僅か十五人でこの斜里の地を切り盛りしてきた苦しさと言外に漏れている。それでも仕事の質を下げずやってきたと言う柿沼新八に劳いの言葉をかけつつ、ふと悌次郎は辺りに投げていた目を止めた。

「その銃、汝の使っているのは戈良の仙台筒ではないか？」

急に言葉を掛けられ、銃床の芝引金を立たせて火縄銃にもたれていた足軽は焦りと嬉しさを混ぜながら首を下げる。

「ええ、はい、そうです。お目が高い。もしかして、秋月様も鉄砲が好きで？」

身を縮めつつ掲げた鉄砲は、先程悌次郎が見たのとまったく同じ型の六匁筒で、微かに鹿の子の浮く銃身は新品のように黒々と磨かれている。悌次郎が目を落とすと、半開きの口元を緩ませた上目遣いの顔の下に、腰に下げた太目の槊杖が見て取れた。

「いくら愛用の道具を交換したとしても、気配りを忘れてはならぬぞ。對手が誰であれ、自らがしてもらいたいことをせねばな」

顔を近づけて、穏やかに悻次郎は言った。事情を知らぬ周囲の藩士は、早くも目を掛けてもらったらしい足軽を羨んだり冷やかしたりしていたが、柿沼新八と美枝の笑顔は少し苦いものになった。

「さて、それではこの代官所の内外を案内してもらえるか、新八」

暫く呆けていた木村万作の目元は、悻次郎らの一行が去ってから一拍置いて、僅かにひくついた。

火縄銃を担いだイペランケは斜里川の河口にまで帰ってきていた。代官所の陣屋から斜里川は直線距離で六百メートルほどしか離れていないのだ。このまま集落に戻って女子の内職仕事に就いても良かったのだが、夫の様子を見るついでに漁の手伝いをしようと彼女は考えていた。本来は狩猟が男の仕事、服飾・炊事は女の仕事などというように分業されているのだが、イペランケなどはどちらかというと縫い物よりも漁の方が得手だったので、若い頃からよく手伝いに行っていた。他にも何人かは人手集めのために妻を呼んだり、見学させようと子連れ女連れで来ている者も居るが、流石に夫婦揃って漁の名人と言われるのはイペランケのみである。

見やると、沖には和人の伝えてきた建て網が張ってあったが、約六十メートルの河口いっぱいには昔ながらの止め川が成されているようだった。

この止め川はアイヌ語ではテシというもので、川底に打った杭に竹のスノコを立て掛けて鮭の遡上をさえぎる物である。ここで堰き止められた鮭を、マレクという鉤鉾やヤスで突いて獲るわけだ。

止め川の付近には大きな人だかりが出来ていたので、さぞや大漁なのだろうとイペランケの歩みも浮き立つ。がやがやとした声ははっきり聞こえるまでに近づいてみると、一番手前に居る髭面はどうやら夫だったらしく、それが誰かと話し合っているらしいのが見て取れた。

「このカムイチェプで食ってるのは俺らもお前らも一緒だろう。お前らが沖で獲っている分、俺らはここで獲っているんだ」

カムイチェプ——、直訳すれば『神の魚』であるが、これはつまり鮭のことで、チェプだけでも鮭を表すほどアイヌ生活に馴染んでいる魚である。ここでわざわざ『カムイチェプ』と呼ぶのは強調のために他ならず、あまり普通の会話とは思われない。脇に鉤鉾を携えた夫は、太い眉から相手の男へじっと眼光を飛ばしていた。

周りに居るアイヌの中で一際目立つ筋骨と体躯を持ったその視線を受けてなお怯まず睨み返すのは、和人の男と見えた。着ているものは襤褸と言って差し支えなく、継ぎはぎや鉤裂きだらけであり、髪も蓬髪を後ろに撫で付けているだけであったが、垢に塗れている訳ではない。赤茶けた肌はその下に筋肉を充満させ、細身ではあるが上背はイペランケの夫よりもむしろ高い。

——やん衆であった。

「はん、あの沖の網がオレたちのだって？ 笑わせるなよ。あんなもんが物の数に入ると思うか」

上からイペランケの夫を睥睨する男の後ろには、薄ら笑いを浮かべたやん衆たちが十数人から二十人あまり集まっている。数の上では相對するアイヌたちよりも僅かに上回っているようだ。夫は深い黒髭の間から割れ鐘のような声で威圧する。

「言いがかりも大概にしろシサム。お前は後ろのそいつらの口が凌げれば良いのだろうが、俺らには妻子が居る」

「国にカカアとガキ残してるのはオレたちの方さ。漁場に連れてきてよろしくやってるだけ羨ましいぜ」

柳のように覇気を躲して、男の声は刃物のように鋭く耳に届く。

「……どう言おうが、俺らはここを退く気はない」

夫の声は、巖を据えたように周囲の者の腹に響いた。

二人は暫くの間睨み合いを続け、アイヌもやん衆もそのさまに食い入って動かない。そしてふと、やん衆の男は鋭い目を閉じて微笑を浮かべた。

「はん、まあお互い生活のためってんなら仕方ねえ。……怨むなよ」

呟いたその時、高い悲鳴と共にばたと駆ける足音が立った。

「親分！ 人質を取ってやりましたぜ」

「コチャン（いやっ）、離してー！」

アイヌたちの裏から突如飛び出したやん衆の男は、半ば狂ったかのような笑みを引き攣らせながら親分と呼んだ男のそばまで走り寄る。振り向いたその腕の中には、八歳ほどの女兒が抱えら

れていた。男の黒く太い腕の中でもがき、華奢な白い首を厚子の襟から伸ばして叫ぶ。

「ノシケオマさん、助けて！」

「シンナイペッ！」

ノシケオマ——イペランケの夫の背後で、老人が喉の潰れるような声を上げた。酋長エタンヒ口の悲鳴に十数人のアイヌたちは俄かに騒然となり、先程まで重心をまったく揺るがせなかったノシケオマも、焦るように歯を噛んで彼らの狼狽に眼を走らせた。そして素早く向き直ると、やん衆の群れに向かって噛み付くように声を浴びせる。

「きさま……、こんなボンメノコ（幼女）に手を出すとは、恥を知れ！」

ノシケオマの怒気をそのまま顔面に食らったかのように、女兒を抱えた男は思わずたじろぐ。すがるように親分を見上げたが、その親分は見下げる視線に呆れを隠すこともなく黒々とした蓬髪を指で搔いていた。

「女を捕まえてこいとは言ったがよ……。お前いい趣味しすぎだろ」

「で、でもですね、こいつは、奴らの酋長の娘なんですぜ」

「ああ、そう……」

失敗したかも知れないという懼れの顔の中に若干の期待を込めて男は報告するが、親分は既にノシケオマの方に視線を逸らして、男を見ようとしめない。

下手にか弱い者を人質にとると、相手方の義憤を買って却って不利になる。元々妻子ある者たちではあるし、人質を取ったところで傷ついたり殺したりするつもりはない。小うるさく抵抗し

ない程度の中年女でも連れてくればそれで良かったのだ。そこへ騒ぎ盛りの子供で、しかも酋長の末娘かなにかというのを持ってくるのは悪手に他ならない。

やん衆の親分は、ノシケオマが更なる行動に移る前に辺りへ一喝した。

「ガキを返して欲しかったらその止め川を外せ！ 勝手に叫んで良いなんざ一言も言っていないぜ」瞬間、彼は内反りの凄いい柄の鉞鎌を抜き、隣でもがく女兒の下顎にびたりとつけた。抱えられたシンナイペツは水を浴びせられたように、小さな喉をヒッと詰まらせる。

「……早くしねえと、この柔らかい首の肉が削ぎ切りになるぜ」

低い声は、冷たい鉞鎌をさらに白い喉笛に食い込ませ、シンナイペツの大きな瞳は震えにぶれて覚えず涙を溢れさせていた。屈強なノシケオマをも高みから射すくめるハイタカの如き双眸には、この上ない殺気が籠っていた。

——力押しである。

ここまで来たとなれば、本気で人質を殺すつもりがあることを演じ、相手方を完全に屈服させるより他はない。

ノシケオマは、このやん衆に本当に殺意があるのかどうか、未だ見切りきれなかった。

固まってしまったような空気の中で、鮭たちだけが止め川のスノコの上でばたばたと音を立てていた。

「どうした。早くその鉞鎌を置いて、止め川を外さねえか！」

ぐっ、と詰まった吐きが聞こえるとともに、幼女の細い首に音もなく一筋、ゆっくりと朱が流

れた。

「やめろ！ わかった。テシを外すからその刃をどけてやってくれ」

ノシケオマの離れた鉤鉾が川砂利に乾いた音を上げる。やん衆たちの方を見据えながら、砂に摺り足の音を含ませてノシケオマは斜里川の中に入っていった。

「……よもや、本当にそこまでするとはな」

「この刎釣瓶の六郎を見くびってもらっちゃ困るぜ」

ノシケオマは鮭の群がるスノコの端を一枚外して、水に屈んで杭を抜き始める。やん衆の親分である刎釣瓶の六郎は、眼を見開いて震えているシンナイペツから鉞鎌を離して、彼女を抱える男へ手渡した。腕組みをしてノシケオマを見下ろす視線にも満足げな色などなく、川中から眼を走らせるノシケオマは反抗に転ずる隙を見出せなかった。

その頃イペランケは、このやん衆とアイヌの有様が完全に見渡せるほど川辺に足を近づけていたが、足音も声もまったく立てていなかったために、このやり取りに集中していた彼らは彼女の存在にまったく気づいてはいなかった。立ち止まる彼女の真正面では、夫であるノシケオマが恨めしげな視線を廻らせながら止め川の杭を引き抜いている。

そして彼の視線が、彼女の視線と重なった。

「……」

イペランケは夫が窺う中、担いでいた火縄銃を下ろし、重さを確かめるかのように逆手に持ち上げる。銃床の芝引金の硬さを左の指で叩き、肩口の高さまで抱えあげた。仙台筒は、その真っ

直ぐでスラリとした八角銃身と、大きめの銃床が特徴である。

鮭を鉤銃で獲るマレク漁は、鮭をその先端で突いて行うのが普通だが、近距離であれば投げても獲れる。当たった際に鉤銃の鉤が反転して鮭に食い込むので、多少当たりが弱くなっても仕留められるのだ。ノシケオマとイペランケの夫婦は、この鉤銃投げの射程が長かった。

ノシケオマが川底から杭を引き抜いた。

「やりましたね親分！」

幼子と鉤鎌を両手に持ちながら、やん衆の男が身を乗り出す。勿釣瓶の六郎はその様子をちらと横目で窺った。その眼に、遠くで何かを投擲したアイヌ女性と、身を乗り出して笑う男へ一直線に迫る火縄銃が見えた。

「ごっ、と鈍い音を立てて、やん衆の男のこめかみに火縄銃の銃床が食い込んだ。」

抱えた女兒とともに視線の先で倒れていく男に、六郎は目を奪われる。いやにゆっくりと見えたその視界の背後から、ふっと風を切る含み気合が彼の首筋を叩いた。

「けあっ」

「シィッ」

斜里川の底から引き抜かれた木杭が、ノシケオマの手により投げつけられる。ほぼ同時にもう一本の鉤鎌を左手で抜き放った六郎は、振り返りざまの臂力で下からその杭を払い上げた。

間髪を空けず声も無く、六郎は川中のノシケオマへと踊りかかる。岸の砂利に手を突いてノシケオマは転がり、脳天へと振り下ろされた刃は水面を叩く。転がりながら自分の鉤銃を掴み、背

を向ける六郎の足へと振り抜いた。

カキン、という軽い音は鉤鉾の先端を半回転させ、六郎の大腿を鞭のように抉り取ると見えた。斜里川の水飛沫を背景に、鉤鉾は何も無い空間を裂く。先程までそこにいた刎釣瓶の六郎は消えていた。一瞬、在り得るはずも無い状況にノシケオマの視界は固着する。

ふと蔭が差す。

見上げたノシケオマの上方には、中天の青さを逆光に受けて、弓の如く半弧を描いた背が飛んでいた。蔭の内にも見える白い歯と眼差しの上に上から、鉞鎌の刃がノシケオマを目掛け落ちてくる。

——釣瓶刎ね。

どよめきと晴天を引き裂いて軌跡が迫る。倒れたノシケオマの側頭を鉞鎌が打とうとした寸前、その長柄に一本の腕が絡んだ。

慣性を崩された刎釣瓶の六郎はそのまま放り出されるように砂地へ転倒する。呻きと共に向き直った六郎が見たのは、肩で息をしながら自分を見下ろす女性。その右手には自分の鉞鎌が握り締められている。左手に抱えているのは人質にとったはずの酋長の娘だ。火縄銃を投げたあのアイヌであった。

「イペランケ……。助かった」

服についた砂利を払いながらノシケオマは立ち上がる。イペランケと言うアイヌ女性は心拍を抑えるように大きく息をすると、鉞鎌から手を離して砂地に突き立たせた。瞳が開いたままのシ

ンナイペツの頭を撫でながら、静まり返った衆目に向けてゆっくりと詰問した。

「……それで、この諍いの原因は何なの？　まずはあなたに訊くけれど」

隣のノシケオマに目をやる。片膝立ちになった六郎に視線を合わせたまま、ノシケオマは低く唸る。

「このシサムらが、俺らの漁場を奪おうとしてきたのだ。あまつさえ酋長の娘御まで使つての暴虐だ。許せるわけが無い」

「随分と一方的だなアイヌ」

立ち上がる六郎へ踏み出そうとしたノシケオマを、イペランケが差し止めた。夫を抑えながら、背の高いやん衆に向けて言葉を投げる。

「あなたたちがウェンペ（悪者）ということになっているけれど、何か間違いが有るのかしら」

「元々、鮭を独り占めしているのはアイヌじゃねえか。先住してる分だけ利があるのは解るがよ、わざわざ蝦夷まで稼ぎに出ているオレたちにも公平に漁をさせてもらいたいんだよ」

「何を言う！　沖でカムイチェブの大半を攫っておきながら！」

語る六郎に向けてノシケオマが噛み付く。瞬間、「ラツチャル（静かにしなさい）」と漏らしながら、イペランケがその頭をはたいた。とまどう夫を他所に、刎釣瓶の六郎へ向けて再び問う。

「何か勘違いがあるみたいね。沖の建て網は全部シサムさんのものだと思つていたけれど、違ふのかしら」

刎釣瓶の六郎は暫くじっとイペランケを見ていたが、ふと合点がいったように眉根を緩めた。

「なるほどな。あの網は確かに和人のものだが、オレたちやん衆のものじゃねえ。ありゃ全部、商人たちが張ったもんだ。今年はおれたちの入る隙が全くねえ」

「だから川まで仲間を引き連れてきたのね。毎年シサムさんはみんな沖で漁をしているから、一まとめにしてたわ」

二人して納得がいったような表情を見せている中に、ノシケオマが無然として割り込む。

「だからといって、俺らがここを空け渡すわけにはいくまい。川まで来た鮭をほとんど獲らねば生活は成り立たんのだぞイペランケ！」

「それならちょうど、この問題を解決してくれそうな人が来たわよ」

イペランケが視線で指す道の先に、二つの人影があった。

夏羽織を着た和人の男が二人。イペランケにとっては別れて間もない邂逅となる。

「……こちらが斜里川ですね。アイヌたちが漁場としています」

「なるほど、案内ご苦労だった新八。ちょうど人が集まっているようだから話を聞いてみよう」
代官に就任したばかりの秋月悌次郎が、手代の柿沼新八とともに歩いてきていた。方々を廻っていたらしい悌次郎は物珍しい北国の景色に好奇心もそられているようで上機嫌だ。しかし明らか二極対立の構図で膠着している人ばかりとその中央に見えるイペランケの視線に気づき、彼は訝しげに眉を寄せる。

「にしは、先程出会ったイペランケではないか。この様子は、何かあったのか？」

声をかけながら歩み寄るが、左側のやん衆も右側のアイヌも皆一様に怪訝な気を持って悌次郎

に視線を送っている。取り分け、背の高い蓬髪の男と筋骨逞しい髭面のアイヌは品定めを通り越して眼光だけで射すくめてくるようだったため、それに圧された悌次郎はイペランケから十数歩分離れたところで立ち止まった。

疑念とたじろぎを隠せない悌次郎に向けて、シンナイペツを抱き直しながらイペランケはこやかに答える。

「斜里代官秋月悌次郎さん、漁場のことでお願いがあるのです。商人たちが建てている網に制限を設けてもらえませんか？」

イペランケと六郎が悌次郎に一通り事情を説明する間、ノシケオマの号令でアイヌは再び漁の作業に戻った。やん衆をなだめて止め川の補修を手伝わせた柿沼新八は、その後もアイヌとやん衆の間を細かく立ち回って互いの鬱屈を斜里川の流れに浚わせている。川岸には悌次郎と六郎とイペランケに加え、彼女に抱かれたシンナイペツと、酋長が残っていた。乾いた砂利に腰を下ろして車座になっている。

「話は解った。だがあの網が商人たちのものだとしても、実際に張ったのはやん衆ではないのか？」
「オレの知らねえ新参者を雇い込んだらしい。大方オレたちが報酬の良いところを毎年ふらふらしてるから、それよりも便利のある方法にしたんだろう」

悌次郎の質問に対し、六郎は半ば諦念の混じったような声で応じる。

「そもそも、あれほどチェプを獲るのはチェプランケカムイの御心に反しているのです」

「鮭を下ろす神の心？ それはどういふことかな」

ゆっくりと口を開いた老齡の酋長に、悌次郎が聞き返す。返事したのは六郎とイペランケだった。

「単に獲り過ぎてことだらう」

「チェブの産んだ子達の大半は、戻ってくることも無く死にます。戻ってきてもつがいがいなくなってしまったら、もうチェブは消え去ってしまいます」

なるほどと相槌を打って、悌次郎は目を落とすイペランケを見やる。髪を撫でられているシンナイペツは、イペランケの膝でようやく落ち着いた表情を見せていた。その姿に目をやりながら問う。

「にしは、その子を人質としたのだろうか？ アイヌたちはそれに対して怒ってはおらぬのか」

「こっちも必死だったんだが、それについてじゃ悪かったと思ってる。すまん、娘さん」

表情の読めない悌次郎の問いに六郎は渋い顔を作る。謝りながら伸ばした手に、シンナイペツは反射的に身を縮ませた。六郎は僅かに笑みを固ませた後、「当然か」と自嘲しながら手を引いた。

「六郎さんでしたか。血の気の多い人には私や酋長から言って聞かせますよ」

六郎が驚いたようにイペランケを見る。イペランケは膝の子供へ微笑みかけながら言葉を繋いだ。

「皮一枚だけを、痛みも無く切るのは難しかったです。脅しのためとはいえ、きちんと心を

配ってくれています」

白い首筋にあったはずの切り傷は既に塞がって見え、乾いた血の跡だけがその存在を示していた。目を見張った六郎は、思わず切り返す言葉が遅れる。

「だからって、それだけで信用してもらえるのか？」

「毎年お酒を手土産に酋長に挨拶に行っていたんでしょ？」

「そのような律儀な方が根からのウェンペだとは思えませんでしてな」

口を揃える酋長とイペランケに面食らって、六郎は身を反らす。イペランケは依然として微笑んだままシンナイペツの頭を撫でていた。

当然のように些細なことに気づき、その所以を理解し、過去の瑣末な断片まで記憶している。勿釣瓶の六郎は隣に座るアイヌ女性に驚愕していた。そして少し前の出来事を反芻する。

常人には予測できぬ背面跳びからの切り付けである釣瓶匆ね。ノシケオマというアイヌに放った際は鈍鎌を棟に返していたが、それでも回旋により頭蓋にひびを入れる程の速度は出ていたはずだ。そこへ女子がただ手を差し入れたのなら、まず手骨を砕かれることは間違い無かっただろう。しかしあの時イペランケは、長柄の鈍鎌を擦り上げるようにして六郎の柄手を掴み、手首を奥へ押しやるように捻り上げていた。体の回旋が活きるのは横の方向にのみである。腕のみでは前後の運動は女子にも押し負ける。空中の体は飛び上がった勢いを残して進むため、手首を支点として固定されれば後は無様に地に落ちるしかないのだ。

瞬間にそれらのことを見抜き、実行してのける受想行識の的確な連携。天性のものと思われる

イペランケの能力に、六郎は素直に賛嘆の念を感じていた。

「……イペランケさんよ。あんたは凄いな」

嘆息して六郎は呟く。賛嘆の中で、六郎は同時に空恐ろしい予感をも得ていた。

「だがな、それ以上女の身で突っ込まない方がいい。一線を越えるのは男の仕事だ。あんたの聡さは、行事の予定とか商売の勘定とかで活かしときな」

さらりと語られた六郎の言葉に、イペランケは理解半ばのまま軽く笑い掛ける。

「……過ぎたるはなお、及ばざるが如し。ということだな」

沈黙を纏めるように悌次郎が切り出す。注目したイペランケたちを見回して言葉を繋いだ。

「にしろの話は皆、足るを知るところを訴えているものばかりだ。まして和して同ぜずの心まで持っているとなれば、儒学者としても代官としても、拙者は仁を尽くさねばなるまい」

——知足というものの何たるかを、商人ばらに教授してきてやろう。

悌次郎はそう言って、四十路には見えぬ童顔を笑顔に満たす。

ついでに、と柿沼新八を手招きして、悌次郎はその耳元で何かを囁いた。

「宴会——、ですか？」

「うむ。拙の歓待に酒宴を開くと申しておったろう。それ、そこにやん衆とアイヌの者達も招こうと思うのだが」

「そう仰られましても、このような大人数を饗することなどとてもできませんよ！」
目を泳がせながら、突然の言い付けに新八は身を引く。

「誰も三汁七菜の本膳会席で持て成せなど言っておらんだろう。取肴と吸物で煮売り酒屋のよう
にでもしてしまえば良い」

折角の料理を自らの分まで含めて分配しようという意の返答に、新八は正気を疑うように喉を
詰まらせた。高級料亭での宴会をわざわざそこの居酒屋での飲み会に替えてしまうようなもの
だ。

「明朝一番に商人のところへ行くとしても、やん衆は今日の口をどう糊すれば良いというのだ？
それに、やん衆も我々もアイヌとは今一度親睦を深めておくべきだろう」

柿沼新八を言いくるめ、梯次郎はにやりと振り返った。イペランケも六郎も、思いがけない気
さくな饗応の誘いに感じ入る。

「それならば、我らも獲れたチップをお分けしましょうかの。御呼ばれただけで何もなしとい
うわけには行きますまい」

酋長もそうして相好を崩す。受けた喜びが量りきれないのか、刎釣瓶の六郎は眼と口ばかりが
弛んでやん衆の長としての威厳もない。

「……有難い、本当に。この礼は、儲けが出たらアイヌにも代官所にもきっちり返させてもら
うぜ」

口調だけはかろうじて普段の調子を保ったまま立ち上がると、興奮を抑えられぬ子供のよう
に川の方へ走って行った。口々に仲間やアイヌに今晚の宴会のことを語り聞かせている。イペラン
ケや梯次郎はその様子を半分笑いながら見送った。

そんな光景の端で、堰き止められた鮭を狙いに来たのか一頭のアザラシがいるのも見える。六郎も目聡くそれに気づいた。

「おっと、この祝いに独干つても良いよな！ オレたちも何か持ってかねえと悪いぜ」

川岸から波立つ斜里川の中を覗いていたアザラシは、何かを感じたかのように六郎に振り向く。その時、流れるような動きで落ちていた鉤鉾を掴んだ六郎は、既に投擲の姿勢に入っていた。黒いアザラシの瞳に吸い込まれるように鉾を投げようとした瞬間、その手は外輪から掴まれていた。「気持ちには有難いがそれは止める。俺らに必要な分だけしか獲らない」

ノシケオマの太い腕が、六郎の動きを押し止めていた。興奮を殺がれた六郎は鉤鉾から手を離すと、向き直りながら口惜しそうにアザラシへ眼をやる。アザラシは焦るほどにもたつく匍匐の身を川に差し入れ、ようやく水底に消えたところだった。

「全く、どういふことだよ。お前たちは独干食べるだろうが」

「こんな時期にはぐれて来た者を獲る必要はない。チェプも今日は終わりだ。これ以上数は減らせない」

見やると、アイヌたちはもう斜里川を止めていたスノコを取り外して、遡上を待ち望んでいた鮭たちを放している。

「だから、ここでお前らにまで獲らせるわけにはいかない。仮に獲らせても、後々困るのは同じだ」

ノシケオマの語意に納得はできるが、言葉尻が鼻についてどうも気に食わなかった。折角アイ

又とやん衆の仲を近づけつつ、共に満足がいく方向に動いていたというのに、それを止められたのも腹立たしい。

「カカアは冴えてたが、ダンナはただの堅物だな。あそこでオレが頭を砕いたときゃ、もっとまじな話ができたかね？」

「イペランケには本当に助かった」

ノシケオマは背を向けて、落ちかけた日の中で片付けを進めるアイヌたちを見ている。獲った鮭を入れてある籠から一匹の雄ザケを取り出しながら、目だけをゆっくりと六郎に振り向けた。

「お前は知っているか？ チェプの雄は雌をめぐる中で鼻が曲がり背が曲がる」

口元を釣り上げられた紅色の鮭は、口吻が中ほどから殴られたようにへこんで歪み、背中が張り出すように高くなっている。

「こうまでなっても、チェプは争いながら川を上ってくる。俺らもシサムから使役されたり、何年前かの硫黄山噴火の被害を受けたりしたが、気概だけは保っているつもりだ」

鮭を籠に戻し、ノシケオマはそれを担ぎ上げた。帰り始めようとするアイヌの方に歩いてゆく。「イペランケに止めてもらわなければ、その気概がお前を殺してしまっていたかも知れん」

去っていく大きな背中に目を向けたまま、刎釣瓶の六郎は動けなかった。

果して、自分が彼の頭骨を砕いていたら、さらに刃を返して突き刺していたら、それで戦いの決着はついたのだろうか。彼はそのまま長柄の鉞鎌を引き込み、その熊のような腕で自分の喉を握り潰していたのではないだろうか。

投げ鉾を止められた左手に、赤く指の跡が残って熱を持っていた。

この者たちは、自分たちには無いものを持っている。いや、内地の人間が忘れてしまった何かを、未だ無意識の底に覚えている。

再び感じた空恐ろしい感覚を仕舞って、六郎はやん衆をまとめて引き揚げにかかった。

宴会は盛況だった。斜里代官所の陣屋は座敷全てを開け放たれ、日頃十数人しかおらずこの蝦夷地にあつてうすら寒く感じるのが常の空間は、優にその七八倍はある人数で暑いほどだった。もっともこの有様に頭を抱えているのは、会計役など柿沼新八を始めとした手代数人くらいのもので、木村万作などの足軽は日々の仕事から解放された喜びに盛り上がっている。

酒の力は心の垣根をも蕩かす。アイヌは元来祭事の時にしか酒を飲まず、日常で酒を飲むようになったのには和人の影響が強い。酒を表すトノトというアイヌ語も、殿様から下賜された乳汁のような飲み物という意味である。しかし今回はアイヌもやん衆も自らの酒を持ち寄ってきており、ヒエの濁酒であるピヤパトノトから、代官たちのとっておきだったはずの下り諸白までもが何故か持ち出され、アイヌ和人の隔てなく飲まれている。内地の人間が常に飲む酒など、「ムラサメ」と洒落られたような村に着く頃には覚めるほどの薄い酒が大半であったから、興奮の度合いは推して知るべきだろう。

イペランケたちが座る周りでも、彼女の作ったトノトが飲まれている。もろみを漉しただけの濃厚な白さは、咽るほどに甘やかな香りを放っていた。

「……あ、これ美味しい」

「この味は美枝さんみたいな年のメノコには出せないからな。悌次郎さんもよく味わっておくといい」

頬を緩める妻を指されつつ杯を出された悌次郎は、そちらを気にかけてながらも「酒が百慮を払うとは真だな」などと揚々たる飲みっぷりを見せている。座を囲んでいるのは、悌次郎・ノシケオマ夫妻に加え、酋長エタンヒロの一家と刎釣瓶の六郎だった。

「なあ、暗にあんたが年食っているとやられてるんじゃないのか？」

「本当にボンメノコではトノトは作れませんし、実際私も美枝さんほど若くはないですよ」

「こらシサム、イペ姉さまをいじめるな」

ノシケオマの片言隻句が気に障る六郎はイペランケにそう渋い顔を作るが、その問いは彼女の脇から覗いた幼女に嘸みつかれていた。酋長が暴れる娘を引き寄せると、家族とイペランケの間に笑いが広がった。酋長にはさらに息子が二人おり、シンナイペツは末の一人娘である。妻のシンナイペツは外国人のような亜麻色の髪をしており、三人の子を産んだはずなのに、その容姿は二十七のイペランケと同じくらい若々しかった。

「シンナイペツ、怖い思いをしたからといって、こちらが人を怖がらせちゃだめよ。本当にひどい人は、どうせイコンヌプコアンされるのが落ちなんだから」

聞き慣れない言葉に、和人の三人はびくりと眉を動かす。

『魔に狙われる』という意味です。ここでも、オハイヌ（幻聴）とかオハインカル（幻視）な

どを受ける時があるんですよ。ノシケオマも昔、誰もいないのに名前を呼ばれたことがあったらしくて、それで改名したんです」

説明を拾うイペランケに、ノシケオマは緩んだ笑顔で頷いている。早くも顔の赤い美枝がおずおずと切り出した。

「それは、名前を変えなかったらどうなっていたんですの？」

「オハイヌを受けて名前を変えなかった者は、何ヶ月か後には必ず、突然死んでしまうらしいですよ」

「魔物に、連れ去られちゃうんだよ！」

酋長の妻が、大仰なタメを作って美枝に言い放つ。きゃっ、という悲鳴は予想に反さず一座に笑いをもたらした。怪談話の乗りである。

「何事も中庸が一番と言うことであろう。度が過ぎて逸ればこそ妖物にも狙われるというもの。拙も幼少のころこそ血気も早かったが、韓非子のおかげで無事ここまで来られた」

生来気性の激しかった梯次郎は韓非子にあるように、柔らかなめし革を常に携帯することによりその性を戒めていた。今もそれは懐にある。古来より有座の器などといい、中庸を求める者はその象徴を傍らにするものらしい。

「それは、心が激しけりゃつけ狙われるってことか？」

「言動が荒ければそれだけ辺りから目立ち、恨み嫉みの的ともなる。恬淡無欲で喜怒哀楽に動かされないのが長生の秘訣であると、老荘も言っている」

酒が入って上機嫌な悌次郎へ、美枝は「それはちょっと、つまらないですわ」と呟いている。問うた六郎は自嘲的な笑みとともに、問い掛けるようにノシケオマへ視線を投げた。惘然とした顔を見せつつも、ノシケオマは答える。

「時と場合によるだろう。守りたいもののためにはエチウフムセ——気合を以て押してゆく必要もある。動いても戻ればいいのだ。行き過ぎて戻れぬことは、そうあるまい。アイヌ（人間）とはそういうものだ、俺は思う」

重低な言葉に、一座から自然と声が消える。悌次郎は少し美枝の方に目を落とし、六郎はフツと目尻を下げた。広い斜里川で対峙した光景が思い出される。

「あんた、長生きするぜ」

「お前もな」

周囲の喧騒から遠い空間で、かちりと杯が打ち合された。

斜里川の流れに耳をすませながら、六郎は裂け目の多い羽織をはためかせて歩く。両の腰に提げた鉈籠から覗く長柄が、月明かりの中で律動的に揺れている。斜里川は現代でも、河川ごとに見れば日本一の鮭の漁獲量を誇っている川である。昼間ほどの勢いは当然ないが、暗い水面に時折きらりと魚の背が照り返る。アイヌたちが川向の集落へ帰った後も、砂利の上に何艘か木船が残っていた。後の明治二十三年にこの地を訪れた英国人ランドーアは、その著書の中でこの斜里川の景色を「夕焼は川の速い流れの中に繁栄して、実に雄大であった。数軒のアイヌ小屋が、対

岸の砂でかくれている場所であって、輝く赤と黄色の空に向かって、立っていた。そして、ここかしこで、大きい魚が水からはね上り、一瞬水に写った影をうち消すために、同心円の輪を次々とあとに残している」などと述べている。

このような楽しい日は初めてと言って良かった。新たな代官としてやってきた秋月悌次郎を始め、今まで挨拶をする程度だったアイヌとも深く交流を持てた。アイヌもやん衆も引き上げきった夜更けに、わざわざ酔いを風に飛ばして一人斜里川に来たのはその感慨のためでもある。ノシケオマと相見えたあたりに立って月明かりに斜里岳を透かして仰いでいると、ふと首筋にキピッとされた気配を感じた。

海に程近い川岸に、一人のアイヌ女性が佇んでいる。振り返った六郎を見やると、音もなく一歩ずつ歩み寄ってきた。ヘトムイエへを額に巻かずに、髪を後ろでひっ詰めているらしい。二三条遅れた黒髪の下から、ぞっとするほど白い歯がこぼれている。厚子を来た腕を広げ、赤い口角を引き上げた。

「あら、偶然。今日はついでる気がするわ」

宴会にいたアイヌだろうか。六郎にはその女の言動がよくわからない。しかし身体は何故か、自然と身構えていた。こんな不自然なまでに美しいアイヌは、あの座敷にはいなかったはずだ。

「怨むアイヌをすぐに殺せるんだもの」

女の声が聞こえた時、左の斜里川でぼしゃりと何かが跳ねた。十メートルほど離れた女のあたりで上がった水飛沫は、そのまま音を立てて水面を跳ねてくる。

六郎は嘸んだ歯から息を漏らす。川面から飛びかかって来た何かに向けて、シィッと鈍鎌の銀閃が光った。首元から両断されたそれは、血を流しながら砂地で幾度か痙攣する。

「……鮭？」

二つになった紅鮭に驚きと疑念を隠せない六郎は、動揺した足を何かに滑らせた。倒れこんだ地面は、いつの間にか打ち上げられて蠢く鮭の群れで埋め尽くされていた。女は既にすぐ傍に屹立している。

「な、何なんだお前は!？」

「アトゥイコシユンプのアプルルと言っても解らないでしょう？ さあ、死になさい」

女が腕を振りかぶる。六郎は咄嗟に頭の脇に手を突いて、腕力だけで川へと跳ねた。岸辺に置かれた船の縁を体重で沈ませ、翻転した六郎は一気にその女の頭上へと躍りかかる。

棟は返さない。刃を当て損ねたらそれだけで死が見えるような女の頭上へと躍りかかる。得体の知れない女は、澄んだ瞳に鈍鎌のきらめきを映して、にたりと笑った。

振り抜く六郎の左手に、斜里川から大きな鮭が跳ねた。小手を払われた六郎の鈍鎌は、岸のどこかに飛んで行って見えなくなる。その行方を目で追う暇も有らばこそ、彼の顔は下方から伸びた女の手で掴まれ、鮭の溢れる地面に叩きつけられていた。常人の力ではない。六郎は全身を生臭い汁にまみれさせて川岸の傾斜にずるずると腰まで浸かっていった。

先ほどの宴会で聞いた『魔に狙われる』という言葉が思い出される。この女は何かの魔物に違いない。

うつ伏せて動かない六郎を冷やかに見下ろす女の口元は、華やかに綻んでいる。そのまま何の躊躇もなく、目障りな虫でも踏み潰しに行くかのように六郎のもとへ歩み寄っていった。

「セアッ」

背筋だけで跳ね起きながら、六郎の左腕は何の予備動作もなく二本目の鉞鎌を投げる。せめて足止めになってくれることを祈りながら、六郎はそのまま鮭の地面を走りだした。

ばしゃばしゃと鮭を跳ね飛ばす。とにかく代官所に着けば助かるはずだった。

しかしその脚は、僅か数歩目で深く沈む。気がつけば、六郎は陸の方ではなくより一層斜里川の深みに嵌っていただけだった。

「無駄よ。二度目に私を見たら、もう誰も逃げられないわ」

混乱しながら振り返った六郎の首を、岸边から女の腕が締め上げる。後ろで爪を立てているのか、息苦しさとともに切られるような痛みが走った。白く細い腕を掴んで外そうとするも、六郎が力を入れてもがくほど一層、締め上げる力も強くなっていく。

女の表情は恍惚としていた。

「あなたはこんなに汚らわしいけれど、あの方は美しかったですわ。どうせなら昼間、あの方が本当に殺してくれていれば、こんな手間はかからなかったのに」

「ノ、ノシケオマがっ、何を……」

呻きながらの問いを聞くと、女は眼差しをさらにふわりと緩ませた。

「あら、イヤイライケレ（ありがとう）。汚らわしいあなたでも、役に立つのね」

一気に絞められた衝撃に、口から泡がこぼれる。怒張した血管が切れて、意識が引き裂かれそうになる。

「オン・サンマヤ・サトバン」

突如空気を切って、普賢菩薩の真言が飛んできた。女の両腕は飛来した何かにより肘から切断され、驚いた顔の女は数歩後ろにたたらを踏む。

川砂に黒い数珠がさくりと刺さった。六郎には何が起きたのか解らない。

「シサムのエイコンヌ（神官）？ 残念だけれど二度目は無いわよ」

「妖物が喚きおるわ。斯様な姿映しで拙僧は惑わせんよ。さっさと去ぬがよい」

川上の方から、菅笠をのみだにした老僧が歩いてくる。両腕をちぎられた女は袖を下ろすと、忌々しそうな響聲を投げながら老僧を見た。

「いっばしにエチウフムセを使うみだから退いてあげるわ。あの方の所へ行くのは明日にしましよ」

そう言葉を残して、女はそのまま空気に溶けるように消えていった。老僧はハハハと笑って、大量に散らばった鮭の死骸に呆れつつ歩いてくる。

六郎はその景色に安堵しかけたが、何故かまだ自分の首には女の腕が絡み、締め付けを続けている。斜里川から這い上がるようにして僧のもとへ近寄る。

「た、助けてくれ、腕を、取って」

喉の隙間から一音ずつ声を押し出す。女の腕を取ろうと引っ張るほど、よけいに首は締まった。

「なんと、まだ解けておらんのか。意外と彼奴の姿映しも侮れぬやもな」

眼を丸くした老僧は、おい、と声をかけながら六郎の頬を軽く叩く。瞬きした六郎の腕は、女の腕ではなく長柄の鈍鎌を掴んでいた。首の前で逆さに交差した自分の鎌は、喉を押さえながらその刃で首の皮を切り裂いていた。

茫然と鎌に付いた血を見ながら、六郎は斜里川の辺に倒れ伏した。

次の日、明るい日の射す代官所の一室には、暗い顔をして唇を噛む美枝が座していた。向かいには禿頭の老僧が座り、二人の間に引かれた布団を見つめている。そこに寝かされているのは、刎釣瓶の六郎であった。うなざれているらしいその顔は歪み、額には脂汗が浮いている。

「桂涅さまが来てくださらなかつたら、六郎さんは死んでしまっていたのかも知れないですね」
「まだ危ういですな。どうやら昨晩の妖物は、かなり長く残る姿映しを得手とするものだったようで。内地ではあのような使い手には出会いませんんだ故、何とも言えませぬ」

悌次郎は昨晩の事件の概要だけを聞いて、心配そうな面持ちを残しながらも商人たちのもとへ談判に出かけて行った。今まで看病をし詳しい話を聞いてきたのは妻の美枝である。宴会で騒がれた『魔に狙われる』ことが、まさか本当に起ころうとは思ひもしなかった。桂涅も美枝も昨晩は一睡もしていない。特に標津から清里峠を越えて来たままの桂涅は心底疲弊している様子だった。

「桂涅さま、このようなことはよく有るものなのでしょうか。それに『姿映し』や『使い手』な

どと仰っておりますが、こんなことをできる方が沢山いらっしゃるのですか？」

自身も体を重く感じながら、自他を奮わせるように美枝は問いかける。桂涅はしばし思案してから口を開いた。

「我らは、斯様な技のことを纏めて操気術と呼んでおります。彼我の持つ気を自らの思うままに操る技の総てを指すもので、使い手は寺社の内のみならず武芸者や商人、果ては異人や畜生の中にまでおりまする」

つまりは自他との精神的肉体的な駆け引きの中で発展してきた技術体系の総体が操気術であり、その中でも強力なものを大別して『姿映し』と『気当て』というらしい。美枝の脳内で、昨日聞いた『オハインカル』と『エチウフムセ』という言葉が繰り返された。

例えば、と切り出して、桂涅は墨染の広い袖口から黒い数珠を取り出す。親指と中指で以て美枝の目の前に吊下げた。

「今から簡単な姿映しをお見せしましょう。このくらいであれば、訓練次第で誰でも身に付けられまする」

そう言ってパチンと指を鳴らしながら、吊下げた数珠を上に乗せあげた。二人は揃って上を見上げるが、黒い数珠はどこにも見当たらなかった。

「一体、どこに行っただんですの？」

「ここでございます」

桂涅は六郎の枕の下に腕を差し入れ、その下から先ほどの黒い数珠を取り出した。不可思議な

出来事に美枝は眼を丸くしていたが、しばらく考えた後「袖に隠したのですね」と呟いた。

「ご明察です。しかし、その時は分らなかつたでしょう」

数珠を弾いた時、桂涅は掌を滑らせるようにして広い袖口の中へ数珠を隠し入れていた。だがその時の視線・音・一瞬の数珠の動きは完全に美枝を錯覚させ、論理的に考えられなければ決して事実には至れなかつただろう。

このようにして自他の意識の隙を突き、思考や行動を操るものが『姿映し』であった。強力な『姿映し』で思考を操作されれば、死までに行かずともそれだけで廃人になる可能性がある。勿論釣瓶の六郎には現在その危険性があった。

「人の域でそのような境地に至れることは少ないのですが、それでも昔は、『魔人』と呼ばれた信長公や、我らが祖である弘法大師空海、会津でも名君の蒲生氏郷公など数々の使い手がおりました。しかし時は徳川幕府の世。幾年も太平の眠りに埋もれた日の本は、操気術を磨く場を失い、こうした力強い使い手が育つ土壌を失ってしまったのです」

かつては、人々の身近に山野もあった。山川草木の魍魅魍魎と相見え、互いにいなし合う職業や関係があった。しかし内地では既に人跡未踏の山野などはほ無く、整備され開削された土地からは、妖物や逞しい畜生が徐々に姿を消しているのだった。内地の者が人としての地力を落としている原因には、このような理由もある。

「こうして国の力が弱っている時に訪れたもの。美枝様もご存じでしょう」

——太平の、眠りを覚ます、蒸気船。十二年前に来航した、亜米利加軍人ペルリ率いる黒船の

艦隊であった。

「あの出来事で幕府は思い知らされたのです。今まで自分たちが作ってきた太平は、人々を墮落させる停滞に過ぎなかったことを。そこで彼らが眼をつけたのが――」

ここです。と桂涅は地を叩いた。

「今や日の本で魍魎と関わり日々練磨して生きているのは、琉球と蝦夷のみなのです。交易で得られる利益は微々たるものなのに、幕府がここを重要視している理由がお分かりになりますか？ 全てはこの地の操気術を得るためなのです。拙僧などの多少の心得が有る者、また南摩様や秋月様などの優秀なお方が流されてくる裏にはこういった事情もあるのです。この地まで山丹満州や露西亞にやるわけにはいきませぬのでな」

話しているうちに興奮してきたのか、桂涅の顔は老人らしからぬほどに上気している。その表情は、嬉しさに跳ねまわる子供のようだった。

「現に、人の姿にまで化身しうる妖物、大の男の心をここまで崩しうる姿映し。この蝦夷地にはまだまだ我らの知らぬ操気術が存在しているはずですよ。拙僧はそれを手に入れますよ」

美枝は震えていた。目の前にいる僧形の何者かが恐ろしくて仕方がなかった。その感覚はかつて、匆釣瓶の六郎がふと感じた予感と同質のものである。人の心の奥にある何かを目の当たりにしてしまった時の畏怖であった。

「そんなに、楽しそうに、なさらないでください。傷つけあうための技なんて、本当は必要ないはずですよ」

「過ぎたるは及ばざるが如しとは、秋月様もよく言うでしょう。傾いた天秤をつりあわせるには、同じだけの力が必要なのですよ。ところで、蝦夷地とは言っても蚊はいるものですね。長月はまだ暖かいからですか」

ふと見上げた視線につられて、美枝は震えながら空中を見やる。一匹の蚊がかすかな音を立てながら中空を動き回っていた。

「これは清国の方では『井拳』などと呼ばれる気当てなのですが、そのまま行くと少し危険ですが、このように加減することもできません」

腕一本分ほど離れた所にいる蚊に向かって、桂涅は軽く人差し指を振る。その瞬間かすかな羽音はふつりと途絶え、布団の上にぼたりと落ちた。凝視した美枝の視線の先で、蚊はなお手足を動かして布団の上を歩いている。二枚の翅だけが、その生え際から切り取られていた。

「力を持った者がきちんと管理すれば、傷つけあうなどという無駄な問題も無くなるのですよ」
柔和に笑った桂涅の顔が、美枝には怖かった。

その日、イペランケの家に帰って来たノシケオマは怪訝な顔をしていた。籠いっばいの鮭の他に、下した獲物には一頭のアザラシがあった。鮭を狙って放った鉞に、割り込むようにして刺さったらしい。季節外れで奇妙なものながら、とりあえずは収穫を喜んで二人は眠りに就いた。朝起きたイペランケが料理をしようとすると、いつの間にか例のアザラシは消えてしまっていた。

「トツカリを使おうかと思ったけど、仕方ないからチェブのオハウにしたわ。どうかしら」

大根・じゃが芋・やちぶきを乱切りにして鮭とともに煮込み、行者にんにくを添えて、炙ってカリカリにした昆布を碎き入れて仕上げる。たっぷりの出汁がでたスープは、囲炉裏の鍋から暖かく甘やかな香りを上らせる。今日のは塩加減も丁度よく、イペランケ自身とても美味しいと感じていた。

一口飲んで、ノシケオマはゆっくりと口を開いた。

「不味い」

一瞬、夫が何と言ったのかよく解らなかった。

「どうしたらオハウがこんなに不味くなる。チェブに失礼だイノンチブ（クソが）！」
顔に熱いものが降りかかった。汁の入った碗を投げつけられていた。

「帰ってからもこんな不味い物を食わせたら許さんぞ、イペランケ」

ノシケオマは玄関口に唾液を吐き捨てながら猟に出かけて行く。イペランケは碗をぶつけられたまま目を見開き、ただただ茫然としていた。髪から垂れかかったスープは、それでも美味しいと感じた。

勿釣瓶の六郎はふと目を覚ました。ぼんやりした頭に、泣きそうな女の声が聞こえた。

「あなたさま、六郎さんが、六郎さんが気付かれましたわ！」

胸の上が重くなる。目に涙を溜めた美枝が顔を覗き込んでいた。廊下から悌次郎と桂涅がやっ

てくる。

「おお、良かった。一日経っても目覚めぬから一時はどうなるかと思うたぞ」

「これでようやく詳細が訊けますわい。憶測での対策には限界がありましたからな」

顔を綻ばせた老僧桂涅は、衣の裾をはためかせて六郎の枕元に座り、立て続けに問うた。先程まで昏睡していたことは分かるのに虚脱感も疲弊もほとんど感じない六郎は、美枝に退いてもらって半身を起す。六郎を襲った妖物に関しての情報は少なかったが、既に桂涅はそれが斜里の町を狙っているとみて代官所の藩士を交え対策を思案しており、自身のことながら事態の動向を理解しきっていなかった六郎は、説明をしつつ操気術の解説をされることで情報の整理ができた。

「それじゃあヤツは鮭の心を操っていたという訳なのか？」

「お主に方向を取り違えさせたり腕と鎌とを見誤らせたりするほどの力があれば、遡上の時間と方向を狂わせることもまた可能であろうよ。だが姿映しばかりなら、こちらの気当てには対処できまい。これは見えましたぞ」

意気揚々と立ち上がった桂涅は、対策を練るらしく俵次郎を連れて部屋から出ていく。布団から起き上がって見送る六郎へ、美枝は不安げに声をかけた。

「そんなに動いて大丈夫ですか？ 横になっていた方がよろしいのでは」

「いや、自分でも不思議なくらいに体は軽いんだ」

まるで憑き物でも落ちたように。と言葉が浮かぶ。その時入れ違いに、一人の女性が柿沼新八に案内されてきた。

「六郎さんが倒れたと聞きましてお見舞いに来たのですが……。よかった。皆さん心配してましたよ」

イペランケが少し笑顔を固くしながら入ってくる。その顔を六郎が茫然と見ていることに気が付き、少し首を傾げた。

「……そうだ。おい、ノシケオマは、ダンナは大丈夫なのか！」

「え……。大丈夫と言いますと？」

「オレの代わりに、『狙われ』たりしてねえよな」

あの日の昼間、自分へ「殺す」といった趣旨の言動を行なったのはノシケオマただ一人である。あの妖物はその人物を「あの方」と言い狙っていたように思われた。何より、自分で傷つけた首の後ろ以外痛みも違和感も残っていないのは却って無気味であった。

「ノシケオマなら元気すぎるくらいに、斜里川で漁をしていますよ」

数瞬間を置いて、イペランケはにこやかに答えた。それなら良いのだが、と呟く六郎に向かって、アイコンプコアンされたという噂は本当だったのですか、などと話題を変えようとします。

今まで観察するようにイペランケを見つめて黙っていた美枝が、ふと口を開いた。

「イペランケさん。そんなに厚子の袖が窮屈そうなのは何故ですか？ それに、今日は輪っかの帽子を一段と深く被ってらっしゃいますか」

イペランケはびくっと体を震わせて美枝を見る。六郎が改めて彼女を見てみると、イペランケはずばまった厚子の袖に下腕まで隠し入れるように左手を縮めていたし、髪を留めているヘトム

イエへは宴会の時より確かに目深だった。

「自宅では何かあったのではありませんの?」

美枝の目聡さにイペランケは心底驚いた様子だったが、彼女の眼差しがとても悲しそうなのに気付くと、目を落として答え始めた。

「お二人にはお見通しなのです…。確かに、ちょっと色々ありました」

袖から出した左腕には、五本の指の跡が真っ赤に腫れ上がっていた。六郎は目を見張る。彼もノシケオマに掴まれたことがあったが、それよりもはるかに強い力で握り込まれたものらしい。下手をすれば組織が挫滅して壊死していたのではないかと思われた。さらに帽子を外して長い髪が零れると、その隙間からでも覗えるくらいに内出血が膨れていた。火傷を負ったかのように赤くなった皮膚も見える。僅かに水疱までできていた。

驚く六郎と美枝に、イペランケは今朝自宅で汁椀を投げられたことを話す。めげずに斜里川まで出向いて手伝いをしようとしたところ、ノシケオマの激しい怒りに会い、腕を掴まれて殴りつけられたということらしい。

「でも、これは私が悪いんですよ。私の料理が不味かったのがそもそもいけないんです」

「そんなことはありません」

明らかに自嘲して笑うイペランケを、美枝は厳しい口調で咎めた。イペランケの笑顔が崩れる。「あんなに美味しいお酒を造れるのに、思いを込めて作った料理が美味しくないはずありません」
「ノシケオマのヤツ、味覚から狂わされてるんじゃないかねえのか。オレを襲ったヤツは、そういう技

を使う化け物だった」

二人に言い寄られると、イペランケは思わず目元を隠してしゃがみこんでしまった。嗚咽をぎりぎりとう噛み殺しながら呟く。

「ノシケオマは、私を嫌ってしまったのでは……ないんですよね？」

「そんなわけありません。全部おぼけのせいなんですわ」

「どうにかして助けてやらないとな」

美枝に抱きしめられながら、イペランケは目を押さえて何かに耐えている。その背後から、ぬつと老僧が現れた。

「イペランケ殿でしたかな。それならば件の妖物は姿映しを維持すべく、今宵も家を訪れるでしょう。こういった性質の使い手は初手の不意打ちに弱い。入ってきたところに一太刀浴びせかけてやりなされ。首尾をお聞きしたら、拙僧らも行動いたしまする」

梯次郎は後ろからイペランケに心配そうな視線を落としている。今しがた同様の作戦を聞いてきたようだが、桂涅はそれをイペランケに回してきたらしい。にやにやと笑う僧侶に向けて、イペランケは振り返った。

「……はい」

覆っていた手を外すと、彼女の眼は怒りに燃えていた。

帰宅したノシケオマの虐待は激しかった。帰ってくるなり魚を投げつけられ、夕食は当然の如

く気に入られずしたたかに殴られた。床に押し倒されて首を絞められながらも、しかしイペランケは笑っていた。痛みを零しながら目を細めて、「きっと助けてあげるからね」と、喉の奥から一音ずつ絞り出した。

ノシケオマはその様子を気味悪がったのか、興を殺がれたように身を離し、そのまま寝てしまった。

夫が寝入ったのを確かめると、イペランケは薪割り用のマサカリを手に取る。玄関口まで歩みながら、その顔はすっと表情を消した。

筵戸の脇で、イペランケは息を潜める。外の風に近い玄関口は、夏の終わりに凍えるような寒さを感じさせた。どれくらい経ったのか解らない。空気と同じ温度の石になったかのように不動の構えを保ちながら、イペランケの神経はずっと筵戸に注がれていた。

ふと足音が聞こえた。何かを引き摺るような、湿った音だった。

それは家の前で立ち止まり、筵戸を捲り上げた。イペランケは力いっぱいマサカリを振り落ろした。筵戸を上げた何かを一瞬のもとにマサカリは斬り落とし、切断された塊りは黒い水滴を家の床に撒いて跳ね飛ばす。

「クアアアアアアア……」

戸の外の何かは、そんな呻きを上げて去っていく。イペランケはその場にとざりと崩れ落ちて、しばらく肩で息をしていた。

朝、切り落としたものを見てみると、それは白い女の右腕だった。夫の目覚めぬうちにイペラ

シケはそれを仕舞う。朝ごはんを作っていると、ノシケオマが目を覚ました。

「昨日はススハム獲ってきてくれたでしょう？ チポロのラタシケプも作ったのだけれど」

蒸かしたじゃがいもを潰して、焦げないようにゆっくりと炒った筋子と和える。串焼きにした大ぶりのシシャモまで出されて、おお、とノシケオマは歓声を上げた。

「これこの時期にしか食えないんだよなあ。いただきます」

旨そうに料理を平らげながら笑う。魚卵のkokがじゃがいもに包まれて口内に広がり、いくらでも食べられそうな味だ。

「いつもながら本当に美味しいなあ。昨日のはどうだったか思い出せないが。……おい、どうしたイペランケ」

「いえ……、おかえりなさい」

「とっくに帰ってるって、ヘンな奴だな。早く食いなよ」

眼をこすって、イペランケは顔を上げる。磊落な夫の笑顔が、ひどく懐かしく思えた。

ノシケオマが漁に出掛けた後、イペランケは切り落とした女の腕を布に包んで代官所に向かった。応接間に通された彼女は携えていた包みを畳に置き、桂涅と悌次郎の前で解く。切断面は黒ずんで、白く骨が覗いている。血の気が失せて一層白いそれは、彼らにも女の腕としか見えなかった。

「はて、アトゥイ(海)のコシユンプ(精)と聞きましたから海獣なぞが化けているものと思いましたが、人の使い手だったのですかな」

触れてみても輪郭どおりの手触りで、指先の硬直具合なども確かに分かった。悌次郎の頭にはその妖物の幻覚がここまで残っているのではないかという可能性もよぎったが、口には出さず桂涅の見立てに従っていた。餅は餅屋である。

「とにかく、これでご主人にかかっていた術も解けたでしょう。もう安心ですぞ」

「はい、助言していただき有難う御座いました」

柔らかな桂涅の笑みに返すイペランケの顔は心底晴々としていて、痛々しい痣が服のそこから覗くのも気になっていないようだった。彼女は「念のため仕舞っておくように」と桂涅に返された妖物の腕を持って帰って行く。何か気になる感覚が拭えない悌次郎に、桂涅が声をかける。

「秋月様。今晚彼女らのコタンに行きましょう」

「何故だ？ もう妖物の心配はなくなったのではないのか？」

桂涅は答えをはぐらかして、間借りしている自室の方へ消えていく。

そして夜更け、藩士たちに美枝と六郎を加えた夕食を終えて悌次郎が書類を整理していると、桂涅から声がかかった。六郎は念のためということでもまだ代官所に寝かしつけられており、美枝がその世話を申し出た。なんとなく嫉妬のようなものを感じたのは否めないが、六郎もそこまで分別がないとは思えなかったため、任せることにしていた。

斜里川の辺まで歩き、そこでアイヌたちが使っている小舟に乗って川向の集落まで行く。船上の夜は海から冷たい風を運び、冴えた月明かりを一面に広げていた。

「なあ桂涅殿。昼にも訊いたが、なぜわざわざイペランケの家に行くのだ。一時は代官所の藩士

を総動員させようとまでしておられたが、正体もわかり仕留めた以上、もうその必要はないのであろう」

仕留めてはいなかったのですよ。と、權を持つ桂涅は笑った。

「致命となっても良いとは思っていましたが、イペランケ殿は理想的な深さの傷で弱らせて下さりましたので、生け捕りができまする」

きっと今宵も現れるでしょう。桂涅の笑いは月明かりの中ですべても気味が悪かった。

「あのような使い手には二度目の策はあまり効きませぬが、そこを我らが外で待ち伏せしておけば、捕えて術の詳細を知れるでしょう」

「では、にしはイペランケを捨て駒にする気なのか!？」

驚く悧次郎に対して桂涅は、はい、と笑みを保つ。

「会津藩士多数の犠牲が、蛮人一人で済むようになったのですから、良かったではありませんか」
かちかちと、悧次郎の腰で刀の鏢が鳴る。桂涅を睥睨する視線は怒りに震えていた。

「おお怖や。その気当ては、妖物に取っておくことですか。これもお国の為ですので仕方ありません」

高らかに笑う桂涅から目を外し、悧次郎は暫く懐のなめし革に触れて気を落ち着けていた。

イペランケは突如ささむけを覚えて跳ね起きた。振り返ると夫の枕元には、右腕の無い、気味が悪いほど美しい女が立っていた。赤い唇をぞくりと微笑ませて、イペランケと対峙する。不覚だっ

た。夫とともに完全に寝入ってしまった。

「あら、お目覚めかしら。わたしはアトウイコシユンプのアップルって言うの。イペランケだったわよね、よろしく」

「ひ、人の夫を狂わせておいて、何を言っているんだ！」

心を奪われそうな笑顔を振り切って、イペランケは玄関に走る。立てかけていたマサカリを素早く手に取ると、女の顔面に向けて投げつけた。女は回転するその柄を左手で受け止め、カカカと笑う。常人では不可能であろうその見切りにイペランケは驚愕した。

「昨日は驚いたけれど、残念ながら二度目は無理よ。……悪く思わないで欲しいんだけど、わたしもノシケオマさんが好きになっちゃってね」

左手でマサカリを遊びながら、女はどこか遠くの方へ視線を上げる。

「本当は、あなたがこの人を嫌えばそれから密かに、と思ったんだけど。……やはりダメよね」

「当たり前だ。他人を好きだと思えば、お前にだってわかるだろう」

イペランケは声の調子を落とす。この女が夫にどのように仕向けさせたという怒りがありながらも、その言葉の切なげな雰囲気には圧されていた。

その頃、代官所の陣屋で、美枝と六郎は未だ起きていた。

「行かせて良かったのか？ 話は聞いたが、たぶんあの女は腕を落とされたくらいじゃ全く堪えない。危険だぜ」

六郎は布団から半身を起こしながら美枝に語る。

「負けて死んだら最悪だが、勝っても良くない。あんなヤツと戦ったら、心が溢れて戻れなくなっちゃう」

宥座の器というものがある。中が空ならば傾き、半分ほどまで水が入っていれば水平となる。しかし水がいっぱいになるとその器は倒れ、中は空となり傾いてしまう。六郎はこの例えを意識しているようだった。

「でも、思う人がいれば、またその人が水を注いでくれますわ」

「秋月さんが人道を外れても、あんたは思えるのか？」

六郎の問い掛けに、美枝は頷いた。暫く考えて、六郎は質問を継ぐ。

「じゃあもし思い人が死んじまったら、残されたヤツの心はどうなる」

「その人が、それでも水を注いでくれます」

微笑んだ美枝の答えが、六郎にはよく解らない。

「死んだ人は、より確かな石になりますの。一瞬で水を汲み上げてくれる、刎ね釣瓶の石に」
自分の二つ名を使われた六郎は、そんなもんか、と外の景色を見やる。

「じゃあそれを信じねえとな」

はい、と頷いた美枝の視線も、見えない斜里川の向こうを思っていた。

「あなたには、これから何不自由なく暮らさせてあげるわ。わたしにはそれだけの力もあるし」

「何を言っている……。これ以上何も要らない、頼むから、帰ってくれ」

イペランケと、アブルルと名乗った女は対峙を続けていた。女の眼を見てみると、めまいを起こしそうだった。女の声は切実だ。飲まれそうになる心を押さえつけてイペランケは立っている。嫌な予感に女の許へ駆け寄ろうとするも、体が動かない。

「あなた、わたしの腕を切ったでしょう？ その代わりに、ノシケオマさんを、ちょうだい」

イペランケを見つめ返して、女は言う。頭上に持っていたマサカリから手を離れた。夫の眠る布団の上だった。

アザラシを捌くときのような鈍い音がして、マサカリは床に突き立った。イペランケは声を出すこともできなかった。

「さあ、これからカムイミシタラまで行って楽しく過ごしましょうね」

愛しむような視線を落としながら、何か見えない者の手でも引くようにして女は空中へ浮き上がった。

「悪く思わないでね、イペランケ」

振り向きざまに流し見た、コシユンプの真っ黒な目。イペランケの奥底で、何かが沸騰した。

「うああああああッ！」

イペランケは突如さげびを上げて、黒のように女へ躍りかかっていた。女は驚いた顔を見せるが、その下半身は既に消え去っている。何も無い空間に、イペランケの爪が突き立った。

「クァァァオオアッ！」

イペランケは虚空の内に、確かにその女の脚を捕えていた。空中に消え去りながらイペランケを振り払おうと女はもがき、イペランケの爪はその脚をえぐりながらめくれ返る。消え去る女に蹴り飛ばされ、イペランケは家の壁に激突した。ぐらぐらとした右手の爪にからむ女の肉は、アザラシの皮と脂肪に変わっていた。

二つに分かれた首筋からどんどんと温もりを流していってしまう夫の傍らに跪き、イペランケは慟哭した。

斜里川の対岸に着いた梯次郎と桂涅が歩き出そうとした時、遠くで連なる家々の一軒で、僅かに窻戸が動いたように見えた。

「あれですぞ！ 先日の妖物じゃ！」

いち早く反応した桂涅の指す先を見ると、アイヌの女が一人、河口のこちらへ向かって片足を曳き摺りながら走ってきた。女は走りながら歯噛みする。梯次郎たちの背後で、ばしゃばしゃと川が湧き立った。

「ぬうっ」

梯次郎は振り返り、川から飛びかかってくる鮭の群れにたじろいだが、桂涅は怯むことなく女に向けて手をかざす。走りながら女は右腕を振り抜いた。その腕は肘からちぎれ飛んで、桂涅に向かつて襲いかかる。もともと女の右腕はイペランケに切り落とされ、無くなっていたはずだ。桂涅はこれが姿映しによるまやかしだと目算した。

「オン・アラハシャノウ」

文殊菩薩の真言を唱えると、目前に迫っていた女の腕は霧散した。代わりに見えたのは黒い海獣の鱭だった。

「なにっ」

重い鱭が顔面に衝突し、桂涅槃は撒き散らされた鮭の上に転倒する。その様子に振り返った悌次郎の足下へ、女が走り込んで来た。すんでのところでは悌次郎はその女を腕で差し止めたが、その腕が触れる寸前に女の姿は消え去る。はっとした顔面を上から蹴り飛ばされて、悌次郎は川の中へ転がり落ちた。

息も荒く海の方へ逃れようとする女を、後ろから倒れた桂涅槃の声が刺す。

「オン・カカカ・ピサンマイイ・ソワカ！」

桂涅槃は地藏菩薩の真言を唱えながら落ちていた貝殻を拾い、倒れたままで投げつける。届くわけがない。目だけ振り向かせた女の視界で、その貝殻は打ち上げられた鮭の水頭に当たって跳ね返り、先ほどイペランケに扶られた足の傷を再び切り裂いていた。

「クアあっ」

女が倒れこんだ隙に桂涅槃は起き上がり、勝ち誇ったような笑みを浮かべて掌を構える。

「二度目を許したのう。これで終わりじゃ」

「……どうかしらね。この前のはわたしに当たってなかったわよ」

傷をかばいながら、女はゆっくりと立ち上がる。斜里川に落ちていた悌次郎は、ようやく体勢

を立て直してその光景を見た。倅次郎の視界で、女は挑発するように腕を広げた。

「他愛もない輩ばかりよ。すぐに消し去ってくれるわ」

脳裏に、美枝やイペランケ、藩士たちの姿が思い浮かんだ。桂涅ばかりでなく、周りの者全てに危害を加えるような発言に、倅次郎は猛りを上げて走った。文官で久しく触れてもいなかった刀を抜き放つ。懐から何かが落ちた。

「にしゃアッ！」

女の驚いたような顔をめがけて、一閃に振り下した。ぱっと顔面に返り血が散る。

「……あ……秋月殿……」

刀の食い込んだ肩口から、ぶくぶくと赤い泡が漏れている。血を吐きながら、老僧は訳が解らないといった面持ちで倅次郎を見ていた。倅次郎は、顔面を赤く染めながら目を見開く。幻視を受けていたのだった。女が、息を荒げながら笑う。

「イ、イヤイライケレ、代官さん。やはり二度目はなかったようね」

陸で跳ね上がった鮭が、倅次郎の体勢を崩して桂涅を川へ突き落とした。流されていく桂涅の体をよそに、女はふらつく足取りで海へ入っていく。

「ノシケオマさん、やっど行けるわ。カムイミンタラで、楽しく暮らすんだから……」

うわ言をいうような女の背を追いつがって、倅次郎は血塗れの刀を構える。歯を噛み締めながら、海中に消えてゆく女へ投げ刺した。

手ごたえは分らなかった。海には一筋の血液が流れて、暫くするとそれも消えていった。

人心地を失ったように茫然としていた悌次郎は、昇ってくる朝日にようやく気がついた。返り血を拭くこともせずイペランケの筵戸を開けると、東の窓から射す朝日を浴びて、蹲るイペランケの背中が見えた。

近寄った悌次郎の目に、ノシケオマから流れた夥しい量の血液と、その首に突き立ったマサカリが映る。イペランケは、夫の体に寄り添いながら震えていた。

「……必ず、報いてみせるわ……」

後に秋月悌次郎は蝦夷地を去り、戊辰戦争や会津戦争にて重要な役職を務めることになる。明治には熊本大学の前身となる第五高等学校の教師となり、小泉八雲をして「まるで神の様な人であった」と言わしめるような人物となった。

イペランケもこの後多数のアイヌや和人と関わり、その一部を逸話として残している。明治期に入って彼女自身の口から語られたと見られる伝承ではこの頃の事件が取り上げられ、「しかし、イペランケはコシユンプの言ったとおり一生不自由なく暮らした」と更科源蔵著『アイヌの伝説集』に書かれている。

彼らの転機がどうなったのか、判然としたことはわからない。しかし彼らは、確実にこの国の歴史に息づいていた。

(医学部医学科三年)

うそつきの愛

虹野 アキラ

小さい頃に言い聞かされる戒めの中で私が無暗矢鱈と怖かったのが、『うそつきはどろぼうのはじまり』というものだった。何故嘘をつくと泥棒が始まってしまうのか、嘘をつくことと物を盗むことは関係ないじゃないか、と思うのだけれど、「嘘をつく」という日常よくあることが「泥棒」という非日常に容易にリンクしてしまうことが子供ながらに空恐ろしかった。それと多分、それを言い聞かせたのが四歳の時に他界した曾祖母だったということも影響しているだろう。曾祖母について唯一覚えていることが、病床に就く曾祖母からもらった蒸しパンを手に、「嘘はだめよ。『うそつきはどろぼうのはじまり』なんだからね」と言われた、この一面面だけである。それはいつも私の頭の中にひっそりと息づいていて、ふとした瞬間に訳もなく思い出されてしまうのだ。そういうわけで、生まれてこの方私は方便と思われるようなものですら使うのを躊躇っ
てしまう。

そしてこの戒めは、結局私の就職にまで影響した。社会に出て三年、私はどろぼうを始めたうそつきと闘う日々である。

役所の一角で、提出してもらった契約書に目を通す。うーん、会社名と住所、電話番号は書かれてるな。まあここに事業所が実在するかどうかは分からないけど。なにに、『解約する場合違約金として支払い済みの代金は返金いたしません』……相談しに来た人、全額払ったって言ってたなあ。いやでもカーペットに八十万ってサギでしょ。それに一括払いじゃないと利子が三割付くですって、そりゃあ一括で払おうとしちゃうじゃない。そこで『解約しても契約書通り支払われた代金は返せません』っていう魂胆か。

月野さーん、と呼ばれる。ああ、お客さんだ。

知らず知らずのうちに眉間にしわが寄っていたのを消し去り、ファイルを元の場所に戻して受付へ。

そこには五十代と思しきおばさまが不安そうに座っていた。

「お待たせして申し訳ありません。今日ほどのようなご相談でいらっしゃったのですか」

いらっしゃるお客様の様子は大体二つに大別される。不安げな人か、怒っている人か。今回は不安そうな方なので、できるだけ安心できるように笑顔を中心掛ける。

「あの、昨日こんなものが届いたんですけど……身に覚えがなくて」

おばさまが恐る恐る『請求書在中』と赤で印字された封筒を差し出す。許可を得て目を通すと、よく目にするような文言が並んでいる。ははあ、と思ったけれど、一応確認はしなければならぬ。

「身に覚えがないということは、ここに記載されている社債を購入したことはないんですね。ご家族のどなたかが購入された可能性などは？」

「主人にも尋ねてみましたけど、主人も知らない、と」

あーはい。よくある架空請求ですね。目の前のおばさまに同情して、心の中でため息をつく。世の中に悪人は絶えない。そして我ら相談員の苦勞も絶えない。

私が就職したのは、実家がある町の消費生活センターである。

学生時代、持っていたれば職に就けるような資格を取りたくて、しかも実生活に役立ちそうなものとして『消費生活専門相談員』の資格を取ってしまったのが運の尽きだった。具体的に言うと、悪徳商法に引っかかってしまった消費者から相談を受けて、相手の事業所との話し合いをあっせんとしたりして解決を試みる仕事だ。

あくどい商人というのは非を認めずのらりくらりと責任追及をかわし、言い訳をしてくる。そして厄介なことに、我ら相談員自体にはほぼ何の権限も無い。資格を持っていると消費生活センターの採用試験を受けられるが、実質資格の効力はそれだけである。採用が約束されているわけでもなく、無事に相談員として採用されたからといって警察のように強権を発動できたりするわけでもない。そこで消費生活に関する法律を集めた消費者六法とにらめっこし、法を根拠に悪徳商人に食い下がるしかないのが現状である。

さらにこの相談員の仕事は雇用条件が頗る悪い。一応準公務員ということになっているが、年収三百万を超える人はほんのわずかで、あとは年収二百万前後である。雇用契約の更新は半年ないしは一年なので安定も何もあったものではない。県レベルの消費生活センターであれば相談員が十数人働いているが、市レベルでそこまで人員を確保することは難しい。私が勤めているセンターで働いているのは三人で、しかもそのうち一人は相談員というわけではなく、電話番号のためのパートのおばちゃんである。相談員二人では勤務時間内に仕事が終わらないこともしばしばだが、残業代なんてはぼ出してもらえない。

このような、根性と辛抱と正義感ナシではやってられないような仕事が、私の性格に恐ろしくぴたりと符合してしまった。

自分で言うのもなんだけれど、責任感が強く、弱い者をとことん手助けしたいと思ってしまう性質なのだ。よく言えば面倒見がいいわけであるが、どうも自分の首を絞めてしまっている感はない。

もう少し待遇を改善してほしいという不満はある。しかしながらこの性分は変えられず、要は反射で体が動いてしまうのだからしょうがない。自分が苦しかろうが、困っている人がいるならば自分の状況はさておいてその人を助けなければならぬと思ってしまう。

そんなわけで、あの手この手で消費者の財産を掠め取ろうとする悪人を、そして被害を受けた消費者を放っておくことができない。天職もいいところである。そうして今日も割に合わない労働に勤しんでは、自分の性分をやや恨めしく思う。

しばらく私の頭を悩ませていた複雑な一件がなんとか解決し、少し息抜きができた休日のことである。

久々に、大学の時の友達から電話が掛ってきた。学生時代一番仲の良かった藤田である。就職先が県を跨いで離れてしまったため、卒業してからは二、三回会ったのみだ。

「月ちゃん久しぶりー」

藤田は、地元に戻ってきた私とは違ってそのまま大学のある県で就職した。確かどこかの法律事務所です務員の仕事をしているはずだ。

「うわ、久しぶり。どうしたの？」

「ねえ月ちゃんさあ、消費者センター？ だっけ？ なんかそーゆーとこで働いてなかった？」

ああ、消費生活センターね、と軽く訂正を入れつつ肯定。それがどうしたんだろう。

久々なのにいきなりこんな話でごめんね、と前置きしてから藤田は話し始めた。

藤田の話をもとめると、藤田の祖母が何か悪徳商法に引っかかっているかもしれないから何とかしてほしいということだった。

何故私のところに話が回ってきたのかというのは、まず不審に思った藤田の母が「あんた法律事務所勤めてるんだから、どうすればいいか弁護士さんに聞いてみてよ」と言ったところから始まり、他県に住む祖母のことで弁護士先生の煩わせるわけにはいかないと思った藤田が、私

の職業に思い至り電話をしてきたのだという。藤田の祖母はこの町に住んでいるのだそうだ。

こつこつと貯蓄をしていた藤田の祖母の通帳を偶然見た藤田の母が、残高が三分の一度になっているのに気付いた。けれど何か新調されたようなものは見当たらず、何の気なしに何に使ったのか尋ねたそうだが、はっきりと答えない。そこでお金がらみで何か困ったことになっているのではないかと踏んだらしいが、いかんせん本人が詳しく話したがないので藤田たちもどうすべきか考えあぐねているということだった。

「まだボケてたりはしないのよ。だから判断能力はあるんだけど、人がいいから同情して押し売りとか受け入れちゃってる気がするのよね。でもまあそれならまだマシだと思うの、ただ、脅されてたりするのもかとも思うと心配で」

確かに心配なのは分かるけれど、基本的にセンターの相談員はセンターに相談しに来た人にアドバイスをするということしかししない。騙されていると思しき人にこちらから出向いて行って『あなた騙されてますよ』なんて言うことはないのである。それがご法度だと正面切って言われたことはないけれど、実務上、積極的な活動までしなければならぬというのは無理な話である。持ちかけられた相談に対応するだけで精一杯なのだから、こちらからアクションを起こすという例外を作ってしまうことは実質ご法度と言えらるだろう。それだけでなく、我が国の契約自由の原則を尊重しなければならぬという理由もあるんだろうが。とにかく、安請負はできない。

「おばあさんを説得してセンターに相談に来てもらうことはできないの？」

「だって本人は騙されてるとは言わないのよ、騙されてもいないのに相談するわけじゃない」

藤田の言葉は嘆きに近い。まあ確かにそうだ。だんだんと『助けてあげなければ』という正義感が私の思考を支配し始める。それを必死で打ち消しながら自分に言い聞かせる。だめよ、もう大人なんだから感情だけで動いてはならないの。助けたいのは山々だけど頼むから藤田、煽らないで。

願いは空しく、藤田は続ける。

「お母さんがあたしにどうにかしてって言ったでしょ。それであたしが月ちゃんに相談したでしょ。結局たらい回しにしちゃってるのよね。やっぱりどうしようもないのかなあ」

物憂げな藤田の声が脳に染み透る。「たらい回し」という言葉に怯む。私はがくりと肩を落としました。

「……分かった。なんとかかしてみる」

「ありがと助かる！」と電話の向こうで藤田がはしゃぐ。ちくしょう、私が断れないような話し方しやがって。

さっきとは打って変わって明るくしゃべり始めた藤田に、てきばきとおばあさんの連絡先を教えられたり具体的な訪問の日時を決めさせられたりしながら、人を騙すのは案外簡単なものかもしれない、とため息を吐いた。

こちらから話を聞きに行くとなると、必然的に勤務時間外になる。ということ、藤田から電

話があっちゃんとうど一週間後の休みの日に話を聞くことになった。藤田の母方のおばあさんだそう、笹原さんというらしい。

「おばあちゃんには『プロの人が行くからちゃんと話聞いてもらってね』って言っといたから！」と一昨日の電話で藤田が言っていた。笹原さんは『市役所から来る法律のプロ』というのを聞いて恐縮し及び腰になったが、藤田が押し切ったそう。一度決めたら譲らない藤田らしい。

車を運転しながら、寧ろ時間外でよかったかな、と思う。要はセンターの職員としてではなく、法律の知識を貸すちょっと物知りな一般人であればいいのだ。もともとセンター職員とはいえず、権限は何一つ持っていないんだから職権乱用にもあたらない。仕事の上では強制執行力を持ってないことが腹立たしいこともあるけれど、今回はそれが幸いした。

それに、かしこい消費者であるための法知識を学ぶ手段として『消費生活専門相談員』の資格を取得する人だって世の中にはいる。その人たちは別にセンター職員になるわけではなく、趣味の一環として法知識を身につけているわけである。今日の私もその人たちと同じように、一介の知識人として話を聞けばいい。

などと考えていたら、件の笹原さん宅へ到着した。

お家へお邪魔させていただく。笹原さんは恐縮しきりだった。

「お休みの日なのに、わざわざすみませんねえ」

お茶にクッキー、チョコレート、羊羹、果ては巨峰や梨まで出てくる始末である。どうぞお構いなく、と三回言ったところでようやく向かいに笹原さんは座った。せっかくなのでお茶をいた

だく。

しばらく世間話をして、笹原さんの様子を窺う。藤田の言っていた通り、頭ははっきりとしていてうっかり訳のわからない契約にサインなどはしていなさそうだ。気が弱いという意味ではなく、品が良いという意味でおとなしい人であるという印象を受けた。この人は何にお金を使ったんだろう。よくある事例をあこれ思い浮かべてみるけれど、いまひとつしっくりこない。やっぱり本人に聞くしかなさそうだ。

「笹原さん、藤田——あ、郁美さんが心配してましたよ」

どちらともなく会話が途切れた時に、そっと切りだしてみる。笹原さんは申し訳なさそうに下を向いた。それでもなお、黙ったままである。

「笹原さんが何か困った状況に陥っているんじゃないか、って彼女は心配してるんです。本当に何か困っているのであれば私がお手伝いできることがあるかもしれないから、お話していただませんか？ 本当に何も困っていらっしやらないんですしたら、困っていないということをはっきりさせて郁美を安心させてあげられないでしょうか」

笹原さんは、そうですね、と言ったきりまたしばらく黙っていた。そうして心を決めたよう顔で顔を上げた。

「先生、先生にはここまでご足労いただいたのでお話ししない訳にはいかないと思うんです。ですが、どうか子供や孫には、なんでもないから大丈夫だと、そう言っていただけませんか」

市役所から来た法律のプロというのは、こんな若造でも笹原さんにとっては『先生』であるら

しい。藤田の前評判が仰々しくて私も身の縮む思いだが、せっかく少し話が進展したのでこの際謙遜などという手間は省かせていただく。藤田になんて報告すればいいかな、とちらりと考えながら、私は「分かりました」と答えた。

「本当に、困っているわけじゃないんです。頼りないかもしれませんが、これでも頭ははっきりしておりますし、何が良いことで悪いことかも分かっております。そのうえで選択したことですから、間違っているとは思いません」

考え考え、視線を机の辺りにさまよわせながら笹原さんが話す。

そして、ふう、と聞こえるか聞こえないかぐらい小さく息をついて、ぼつりと言った。

「私ね、騙されてもいいんです」

えっ。

一瞬頭が真っ白になる。

二の句が継げないでいる私に、笹原さんは困ったように笑う。

「ご存じかもしれませんが、もう子どもたちはとくに独立しておりますから、私は独りで暮らしております。もちろん子どもたちが『一緒に住もう』って言うてくれたことは何度もあります。その度に、住み慣れた土地がいいと私たちが我が儘を言ったんです」

その手前、しょっちゅう顔を見せに帰ってきてくれなんて言えませんか？ まだ主人が生きていたころはよかったですけど、早くに他界しましたから……。その時にも子どもたちは呼んでくれたんですが、お墓はここにあるんです。お父さんを置いていくわけにはまいりません

し、子どもたちには子どもたちの生活があります。今の私にできることは、子どもたちに『私のことは気にしなくていいから』って言ってあげることだけだと思うんです。それが年老いた私にできる一番のことだと。

そう言いながら、曲がった背中の下の方をゆっくりりさする。その手を膝の上に小さく丸めて置いて、笹原さんはしわくちャの手に視線を落としました。

「それでねえ、やっぱり寂しいんですよ。話す相手もいなくてね、テレビを観たりもしませんし。一日、お家のことをしてあとはただ時間が過ぎるのを待つだけの生活です。でもね」

顔を上げた笹原さんは、目にいっぱい涙を溜めて微笑んでいた。

「彼と知り合ってからね、その生活が変わりました。昨日も今日も明日も見分けがつかないような毎日だったのに、一日一日が大事になったんです。彼はね、よく話を聞いてくれて、おばあちゃん、って呼んでくれるんですよ」

言葉の最後が少し震えて、笹原さんはそっと目元を拭う。

彼、というのは誰だろう。その質問を挟むべきかどうかも分からず、私は依然として言うべき言葉が見つからないでいた。

笹原さんは、独り言のように言う。

「お金なんていいんです。そりゃあね、生活ができなくて他人様に迷惑をかけるのはよくありませんけれど、慎ましく暮らしていれば不足しない程のお金があればいいじゃないですか。余ったお金はね、こんなおばあさんに時間を割いてくれた若い人に、せめてものお礼として差し上げ

るのでいいと思うんです」

笹原さんに話を聞いて数日。

私の頭の中では、笹原さんの言った『騙されてもいいんです』という言葉がずっと巡っていた。

今日の午前中にやってきたお客様は七十代のおじいさんと、血圧が上がらずに心臓に負担がかかってしまうのではないかと心配になるほど憤怒してセンターにいらっしやうった。

「こんないい加減なものを送りつけて！ 一体どういうつもりだ！」

受付カウンターの前に立って、いきなり怒りをぶちまける。杖を持った手と反対の、右手には茶色い封筒が握りしめられている。いえ、当センターが送ったものではないので私たちに文句を言われましても……という言葉は心の中にしまっておく。まずは落ち着いていただくために椅子を勧める。それでもなお、こんなものは知らない、私は悪くないと立ったまま主張するので、

「分りました。ではもっと詳しいお話を聞きしたいので、そこにお掛け下さい」

とお願ひする。そうしてやっと、おじいさまはしぶしぶお掛けになった。

今日もセンターに相談しにやってくる人たち。相談しに来る人たちというのは、当然騙されていいなんて思っていないから相談に来るわけだ。おじいさまの話を聞きながら、この人たちと騙されてもいいと言った笹原さんの違いはどこにあるんだろう、と考える。

たった三年ではあるけれど、この仕事をやっていて騙された人というのはできるだけ救うことが最善だと思ってきた。もちろん、相談に来ない人は救えないけれど、その人たちだってセンターに相談するということを思いつかなかったり、あるいは契約書にサインしてしまったからもう何を言っても無駄なのだろうなどと考えてしまっているだけで、本当は救済を望んでいるんだろうと考えていた。だから、まさか騙されていても構わない、と知っている人がいるとは思わなかった。そういう人もいるということを受け入れるべきなのか。それとも、騙されてもいいと言わしめるほど人の弱みにつけこむ輩がいることに憤るべきなのか。

相談されない事案はそもそも相談員の取り扱いの範疇にないので思い悩む必要はないけれど、私は私なりの正義感を持ってこの仕事を選び、続けてきたのだから、今回の一件は私を揺らがせた。

気になることは、実はもう一つある。

核心の部分話を話してしまっただけが抜けたのか、あの後笹原さんは聞かれるがままにぼつりぼつりと何があったのかを話してくれた。そして、法外な金額で「ヒューマン・ケア」というものを行っている『彼』の名前まで判明した。もっとも、笹原さんとしては『彼』を擁護したいのだから彼を特定できるような情報を私に教えるつもりはなかったようなのだが、「ヒューマン・ケア」のパンフレットを見せてもらった時に、代表者として彼の名前と写真が載っていたのだ。

彼のことについて記載があるのをすっかり失念していた笹原さんは自分のミスに気が付き青ざめた。先生、やっぱり彼の事を処罰しますか、お金を払った側が構わないと言っているけど、それ

でもやっぱり裁判にかけられたりするんでしょか、とうろたえる笹原さんに、私には処罰する権限なんてないのだと言いついて聞かせてやっとなんか安心してもらえた。

そう、主犯を特定したからといって私にできることはない。それに笹原さんの言うとおり、たとえ請求金額が法外であってもその契約が完全な自由意思に基づいたものであるなら、私に強制執行力があつたとしてもそれを発動することはできないのだ。けれど、詐欺の主犯だということ以前に、私は。

『彼』——御崎謙人を、知っているかもしれない。

仕事が終わって、そこそこ綺麗な我がアパートに帰る。さっさと部屋着に着替えてからソファに倒れこむ。思い切って大きなソファを買ってよかったと思えるのは、こうやって疲れたときに寝転んだ瞬間。お尻のあたりに追いやられたクッションをこそごと引っぱり出して、ぎゅうっと抱え込む。ああ幸せ……。

寝転んだまま伸びをしてみたり、逆に縮んでみたりと、ひとしきりもぞもぞした後深呼吸をして、ぼんやりとクリーム色の天井を眺める。

あれはけんとかんと同一人物だろうか。

私は小学六年生の時に、家を建てたので隣の学校の校区へ引っ越すことになった。その五年生までいた小学校に、「みさきけん」がいた。確か三年生から五年生まで同じクラスだったと思う。もしかしたら二年生の時も同じクラスだったかもしれない。同じクラスにいたかどうか覚え

てはいくらいい、最初は接点がなかった。もともと目立つような人ではなかったし。

でも、五年生の時同じ飼育委員会になってからはよくしゃべるようになった。彼は頭が良く、でもそれをひけらかすようなタイプの人間ではなかった。物腰が柔らかく、余計なことは言わないけれどみんなが気付かないようなところに気を配る。今考えるとすごい小学生だった。

そして笑顔が印象的だった。くたり、という表現がぴったりな、力の抜けた優しい笑い方。今より輪をかけて気が強かった私は、間の抜けた笑い方ね、とか頼りなく見える、とか口で言いながら、いつの間にかその笑顔が好きになっていた。笑顔だけじゃなく、彼自身のことも。

告白なんて、しなかった。学校で会って休み時間にしゃべる、という毎日を繰り返すだけの未熟な恋だった。転校してからはすぐにその気持ちも忘れてしまう程度の。彼はもちろん私が好意を抱いていたなんて知らないだろう。でも私にとっての初恋だったといえるかな。

だから笹原さん宅のパンフレットで見た、あの笑い方には見覚えがあった。小学五年生の時の記憶とほぼ変わらない笑い方。十四年でどれぐらい人は変わるだろう？

顔が似ていて同姓同名なら、ほぼ本人とみて間違いないんじゃないか。やっぱりあれはけんとかんなんだろうか。どこか腑に落ちない、奇妙な浮遊感がある。

小学生の時のけんとかんしか知らないけれど、まさか詐欺なんてやるとは思えなかったな。十四年間は、やっぱり思ったよりずっと人と人を変えてしまったんだろうか。

パンフレットに載っていた写真を何度も思い浮かべる。あんなに優しく、純粋に、詐欺師が笑う、まるで善意のように。

もしも本当に詐欺師とけんとかくんが同一人物なら、今の私には、けんとかくんが人を騙しながらも十四年前と同じように笑っているということが哀しいかもしれない。

彼は今、この市にいるんだろうか。彼が笹原さんを騙した詐欺師ならこの市にいる可能性が高い。さすがに実家に住んではないだろうなあ。私の実家には小学生の時の住所録一覧みたいなものがあったような気がするから、彼の実家ぐらいは分かるかもしれない。

詐欺師なんて仕事上の宿敵であるはずだけど、笹原さんが『騙されてもいい』と言った理由が今は知りたい。あれ以来、私の単純な正義感はすっかり勢いをなくしてしまっている。そしてその代わりに、薄い灰色のもやが蔓延している。これを払拭するためには彼に接触するのが一番手っ取り早いだろう。

どうにかして彼と接触することはできないかなあ、と考えながら、私はクッションに顔をうずめた。

結局、他にどうしようもなかったので私は週末に実家に帰り、御崎謙人の情報を探すことにした。

教科書やプリント、クラスの文集などを私は昔から捨てられずにすべて取っている。それらが詰め込まれた段ボール箱をいくつも押入れから引きずり出して漁る。自分でもどこに何を入れたかなんて覚えていない。地道に一つずつ箱の中を確認しながら、出てくる懐かしい手紙や作文を見つけてはついつい手にとってしまう。

思い出を振り返っていると時間は飛ぶように過ぎていく。そんなこんなで脱線しながら、そろそろ日も沈もうかという頃に、やっと目当ての物が見つかった。

四年生の時のクラス名簿。名前と電話番号、住所が一覧になっている。今ではこんなものを作ったら個人情報かどうかで問題視されるんだろうけど、あの頃は自治会活動が活発だったからここに住んでいるのかということの方が重要で、当然のように開示されていた。それに、ほとんどの人が電話帳にそれらの情報を載せるのが普通だったから、電話帳で調べれば分かってしまうようなことを隠したって意味はないと思っていたんじゃないだろうか。

名簿を見てはっとする。彼の名前は『御崎謙斗』だった。ああ、だから何かが変わったんだ。「ヒューマン・ケア」の代表者は「御崎『謙人』」になっていた。

これは別人だという可能性を高めるだろうか？ いや、普通詐欺を働くときに実名で行うとは考えづらい。それを防止するために敢えて一文字変えたと考えるほうが自然だろう。

彼の住所は、私の実家から二つ隣の地区にあった。その辺りに行くことは滅多にないのでいまいちピンとこない。

彼はきっと、もうその家にはいないだろう。でも他ににも手がかりがないなら、とりあえず一度は様子を見に行ってみるしかないのか。

行ってどうするんだ、という気持ちと、行かなければならないという気持ちが続いて交ぜになる。本当に彼が笹原さんのいう『彼』だったとして、じゃあ彼の所業を責めるために彼と接触するかというと、けっしてそんなつもりはない。それは笹原さんも望んでいないことだ。

天井を仰いで、灰色の溜め息を吐く。

「完全な自己満足だな……」

結局私は、『彼』と私の知る御崎謙斗が同一人物でないことを祈っているんだ。そしてもし同一人物だった時は、その理由が知りたい。そしてその理由も、私が『それは仕方ない』と思えるようなものであってほしいと願っている。

もしも私の望むような結果が得られなかったら、私はどうするのかなあ。

その先のことについては、どうしても思考が進まない。私の中で、彼の笑顔と「どろぼう」がどうしても結びつかず、ぐるぐると馳こっこを繰り返すばかりだった。

結局答えは出ないまま、翌週の休日に私は彼の家の近くに來ていた。見切り発車もいいところだけれど、後回しにしても何も変わらないような気がしたから。

昼ご飯を食べてから、彼の家を探しながら歩いてきた。歩調がゆっくりなのは家の表札を見るためというものもあるけれど、彼の家に辿り着くまでに心の準備をする時間がほしいからだ。実際は大して準備ができたわけではなかったけれど、そろそろ彼の家が見えるはずだ。ゆっくり歩いてきたとはいえ、まだおやつの中にはなっていないだろう。

一つ角を曲がって、多分この辺り、と見回した右側に、『御崎』という表札が――

「ああ……」

なんだか情けない悲鳴のような、溜め息のようなものが漏れる。見つけてしまった、とうとう。なげなしの心の準備は結局吹き飛んでしまった。首だけ右側の表札に向けた間の抜けた格好でかたまってしまふ。ああどうしよう、と思いつながら、ひたすら表札を凝視する。

途端、がちやりとドアノブが回った。しまった、やばい――

咄嗟に身を翻そうとする力と、それも不審に思われるかもしれないと思って留まろうとする力が私の中でぶつかって相殺される。つまり、一步も動けないまま、

「……?」

出てきたのは、御崎謙斗その人だった。

出かかった悲鳴を呑み込んだ自分を褒めてあげたい。動揺をなんとか押し隠す。

「こ……こんにちは」

ぎくしゃくしているのは百も承知だけれど、ここは笑わないと。

「こんにちは……」

彼は、不思議そうに挨拶を返す。怪訝そうでないことが私には不思議だ。でもまあ露骨に嫌がられてはいないようなので、これ幸いと事前に考えてきたセリフを言う。

「もしかして……謙斗くん、ですか」

「ああ、はい」

相変わらずぼかんとした顔で聞かれるがままだに彼は答える。

「私、月野奏（かなで）っていうんですけど覚えてますか？ 同じクラスだったこともあるんだ

けど。それで、最近散歩するのが好きでこっちまで歩いてきたら『御崎』っていう名前見つけて、もしかして謙斗くんの家かなって」

方便すら苦手な私だけれど、さすがに今回の経緯を洗いざらい吐くわけにはいかない。だから、もし住人と出くわしてしまった時のために、予め言い訳を用意しておいたのだ。ただし、この続きは考えていない。

どう転ぶかと内心でひやひややしていたら、彼は思いがけず少し笑った。くたり、とした笑い方ではなかったけれど、充分優しい笑顔だ。

「月野さん、飼育委員会で一緒になったことがあるよね？」

「覚えてるの……？」

いや、月野さんだって僕のこと覚えてたじゃないか、と苦笑される。確かに、そうだね。今度のは作り笑いじゃなくて、自然と笑みが零れた。

「月野さん、この辺に住んでるの？」

「東田に実家があってね、そこから歩いてきたの」

結構歩いたね、と彼が感心する。さて、これからどうしよう。彼から何か話を聞き出すきかけを作るには。

私は確信的にもっともらしい質問をした。

「そう、だからね、そろそろ疲れてきたから水分補給でもしようと思ってたところなの。この辺りに自動販売機かコンビニってある？」

図々しい賭けだ。でも多分、彼の性格が相変わらずだとしたら、

「自動販売機はこの辺りにはないね。コンビニならもっと先にあるけど、麦茶でよければうちにあるよ」

よかったらどうぞ、と彼が笑う。よし、私の張った網にうまくかかってくれた。ここまできると私も腹を括ろう。たとえこれが彼の罠だとしても、私は騙されぬ。

いや、突然そんな迷惑になるようなことできないよ、と一応引いてみるけれど、当然「構わないよ」と返されるのは計算内。それじゃありがたいいただきます、と私は頭を下げた。

リビングに案内される。さっき外に出ようとしてたけど用事があったんじゃない？と訊くと、いつでもできることだったから後でいいよ、と彼は答える。

出された麦茶に口をつける。

「チーズケーキあるんだけど、食べない？」

あ、食べたいです。紅茶とコーヒーどっちがいい？ 紅茶で。

私がちょうど麦茶でのどの渴きをうるおした頃合いで、チーズケーキと紅茶が出てくる。単に水分補給のための麦茶を先に出して、嗜好品としての紅茶を後から出す気遣いには脱帽だ。

変わってないね、というのは、口に出したつもりはなかった。そう？ という彼の声で、私はついうっかり口に出していたことに気づいた。

「あ、うん……昔から謙斗くん、細かいところに気配りできる人だったから」

彼は何も言わずにはほ笑む。

「ねえ、謙斗くんは今何してるの？」

できるだけ無邪気を装って尋ねる。さあ、なんと答えるか。

「そうだね……一言で説明するのは難しいかな」

月野さんは？ と切り返されて、はぐらかされた。答えることで不利になるんじゃないかと思っただけれど、答えないのも不自然なのでありのままを答える。

「消費生活センターで働いてます。消費に関わる問題の相談員やってるの」

「ああ、マルチ商法で被害に遭った人を救済する、とかかな」

そうなの！ それにしてもよく知ってるね、と私は首を傾げた。

「いろんな分野に興味があるから、広く浅く知識を集めるようにしてるんだよ」

月野さんも変わってないね、と彼は笑う。昔から、弱いものと正しいものを守らないと気が済まなかったでしょ。

確かに仰るとおりです、と苦笑する。しばらく笑いあって、彼はふと黙り込んだ。

「僕の、仕事の話しようか」

さっきとは打って変わって、彼の顔からはおよそ感情らしいものが抜け落ちてしまっていた。彼の表情からは、何も読み取れない。

少し長くなるけど経緯から話すね、と彼は静かに話し始めた。

それは、私のいない六年生の秋のことだった。

その日、担任の先生は機嫌が悪かった。学習発表会まで時間がないというのに、みんなで暗唱するはずの『学問のすゝめ』をクラスの半数以上が覚えていないということが朝から発覚したからである。そんな中で、五時間目の授業に担任が十分ほど遅れてやってきた。想像に難くないことだが、案の定、授業開始時に担任がいなかった教室は生徒たちが好き勝手にはしゃぎ、笑い、叫び、廊下まで声が響いていた。さらにその日は悪ふざけが高じて、教室後方にあるコルク製の掲示板に向かって、コンパスをダーツのように投げるといふ遊びを数人の男子がやっていたらしい。

教室に入ってきた担任は当然激怒した。学校の備品を傷付けるとは何事だ、授業中にしゃべるな、他のクラスに迷惑だ、六年生にもなって静かに自習もできないのか、などなど。

そして、静かに待ってなかった奴は挙手するように、と担任は言った。しんと静まり返った教室で、おずおずと数人が手を挙げる。担任は、一人ずつ謝るように促した。

謝った生徒がわりとあっさり許されたことから、白状しなくても見逃してもらえるかもしれないと思っていた生徒たちが素直に挙手し始めた。

御崎謙斗はその日、どうしても読みたい本があったため、担任が来るまでの間一言もしゃべらずに黙々と本を読んでいた。だから本当に私語はしていなかった。いつの間にか、挙手していなかったのは彼だけになっていた。

「他にしゃべった奴はいないか？」

担任が声を張り上げる。クラスの大方は謝ってしまっていて、生徒たちももうこれで全部じゃないか、と思っていた矢先、

「謙斗！ どうしてお前は正直に手を挙げないんだ！」

担任の怒号が飛ぶ。彼は茫然とした。

「先生、僕、しゃべって」

「みんなが謝ったのにまだそんな嘘をつくのか！」

クラス中の視線が自分に集中する。膝が震える。めまいがする。彼は混乱した。どうして、本当にしゃべってないのに。

時間が止まったかのように、彼はびくりとも動けなかった。どうすればいいのかわからない、正しいことをしたのに嘘つき呼ばわりされて。

「お前が謝るまで休み時間はなしだ。お前のせいでみんなが迷惑するんだぞ」

担任が重々しく宣言する。その途端、さっきまではただの好奇の視線だったものが非難の視線に変わったのを、彼はひしひしと感じた。

「それでね、分かったんだよ」

淡々と、十四年後の彼が言う。

「先生は本当のことが知りたいんじゃないくて、全員に謝ってほしただけなんだって」

彼は聡明な少年だった。理不尽を受け入れ、嘘の謝罪をした。

『僕もしゃべりました。ごめんなさい』

さらに、それは一時的なものでは済まなかった。

いつもは特に目立たない、どちらかというといい人だと思われていた彼が、一人だけ糾弾されたということが思春期に差しかかった複雑な心を持った子どもたちの優越感をくすぐった。あいつは実は自分だけお咎めなしで済ませようとしたのだと、まことしやかにクラスで囁かれるようになった。

彼は何度か、分かってくれそうな人には違うのだと抗議したけれど、結局卒業までその汚名を晴らすことはできなかった。

中学に進学してからも、彼のマイナスのイメージは付き纏った。違うのだと言い張っても無駄なことに気づいた彼は、そのことについて一切訂正しなくなったそうだ。そして彼が汚名を受け入れると、彼に対する非難は急速に廃れていった。

要するに、周囲が押し付けたい虚構の彼のイメージを、彼が受け入れたことで満足したんだろう。それで降身に覚えのない悪口を正面から言われることはなくなったが、周囲の身勝手にひどく疲れた彼は、中学三年の途中から学校に行かなくなった。

そして高校にも進学しなかった。ただ勉強が苦痛だったわけではないので、独学で勉強しながら大検に合格したそうだ。

しかし彼の真っ当な人間性を裏切るのは何も外の人間だけではなかった。彼の家族も、ただ彼が学校に通っていないというそれだけの事実で世間体を気にし、彼に対して辛く当った。

それでも、彼はそれを恨んでいるわけではないという。

「人間はさ、弱いから、真正面から本当の事を受け止められなくて自分に都合のいい嘘を求めるんだよ。それを強要された時、僕は相手が望む嘘を差し出すことにしたんだ。それが結局、僕を守ることになるから」

僕も人間だから弱かったんだ。僕は本当の事を受け入れるのは大した苦痛ではないけど、嘘をつかないことで嘘を求める人たちから向けられる害意とか敵意に耐えられなかった。

そして彼が十八歳の時、彼の家族は父親の転勤をきっかけに彼だけをこの家に残して引っ越した。そして二十歳になるまでは仕送りをするがそれ以降は自分で働け、と言われたという。

「確かに、進学しないなら働くのが筋だ。僕はそれについても特に冷淡だとは思わないよ」

そんなのって冷たすぎる、と言いたげな私を見て、かれは微かに笑って付け加える。

彼は働く方法を考えた。そして彼が作り出したのが、「ヒューマン・ケア」というプロジェクトだったわけである。

「僕は自分の人生の中で嘘がどれだけ人の救いになるか、自分にとって都合のいい嘘を求める人がどれだけ沢山いるかを実感した。そしてこれだけ需要があるんだから『嘘』を売ることにしたんだ」

彼は自分を心理学者だと偽って不安や寂しさを抱える人の話を聞き、それを励ましては相談料として高額の謝礼を受け取ることにした。すべてのやり取りはメールか書類で、実際に人前に出ることはいないそうだ。

「これが今の僕だよ」

相変わらず、彼の表情からは何も読み取れない。寧ろ、彼の目を見てみると彼が私の思考を見透かそうとしているように思える。私が言葉を探して黙っていると、少しでも彼の顔に寂しそうな翳が差した。

「月野さんには、いつか恩返しがしたいと思っていたんだけど、なんだか裏切るようなことになってしまっして申し訳ないな」

月野さんにとって今の僕は敵みたいなものだろう、本当は向かい合って話していいような立場じゃないのは分かっている。

私が何か彼に恩を売ったことがあっただろうか。思い当たることはない。

彼は覚えていないかな、とまた微笑んだ。

「ほら、同じ飼育委員会だったときにさ、飼育小屋の鍵を失くしちゃったことがあったでしょ」

そう言われても、まだ私は思い出せない。

「誰が失くしちゃったのか分からなくて、誰が先生に謝りに行くか押し問答になってさ。その時月野さんはいなくて、その他のみんなで話し合ってもいっこうに埒が明かないから、もう面倒になって、僕が代表で謝りに行った」

そしたら、僕が先生に怒られてる所に飼育委員全員を引き連れた月野さんがやってきて、先生に対してすごい剣幕で『みんなが悪いんです』って主張するんだ。誰が失くしたのか分かりません、だからみんなの責任です、謙斗くんだけを叱るのはおかしいです、って。どちらかというと月野さんに先生が叱られてるみたいになってさ、先生も『謙斗だけを叱ったのは悪かった。これからはみんな気をつけるように』って最後は締めくくったぐらいだし。

「その時のことが忘れられない。月野さんってかっこいいな、ってすごく思ったんだ。同年代の誰かをあそこまで尊敬したのは月野さんだけだったよ」

だから、いつか月野さんみたいにかっこよくなって、今度は僕が月野さんの味方ができるようになりたいって思ってたんだ。

彼の瞳に、感情が戻ってきていた。生き生きとしていて、少し恥ずかしげで。それは十四年前に見たことがあるような。

「実は今日、外に出たら月野さんがいて、本当にびっくりした。もう一生会えないものだと思ってたから。僕は相変わらず月野さんみたいに強くはないけど、これは月野さんに恩返しをしないといけないっていう神様の思召しじゃないかと思った」

人に対して、僕は諦めが肝心だと思って生きてきたけど、月野さんは相変わらずだ。変わらないうでいる月野さんに、今の僕ができることをさせてくれないかな。

私は予想外の事実で戸惑う。どうしてそんなに優しいの、たくさんの人があなたを傷つけてきたのに、そんなに物分かりよく、規則正しく恩返しなんてできなくても、誰もあなたを責められ

ないのに。

頭の良い彼が、懸命になって形のないものを返す方法を探している。

「僕は月野さんみたいに、純粋な正義感で周りの人たちに無償の愛を振りまけるような人間になりたかった。でも今の僕にとっての愛は、愛とは、相手を傷付けない真心を込めた嘘を吐くことだ」

月野さんの生き方とは正反対だけど、と仄かな笑みを絶やさない彼の顔は、言いようのない苦しみを押し殺そうとして失敗している。ねえ違う、そんなに苦しんでまであなたに何か返してほしいなんて、私思っていない。

「僕は君に、君が絶対に傷付かない嘘を吐こう。僕の本職だ、一番得意なことだ。君を傷付けず、君が既に負っている傷まで癒せるような言葉を、誠心誠意選ぶよ」

詐欺師が、一点の曇りもない瞳で真正直なことを言う。こっちが申し訳なくなるほど、彼の瞳は透き通って一途だった。まるで貧乏な少年が一大決心をして、持っている全てを載せた手のひらを、震えながら、それでも精一杯笑って私に差し出しているような。

だけだ。

「それは……愛じゃないよ」

あなたが心を尽くしてくれているのは分かる。それを無駄にするようで心苦しいけど、待って、それは愛じゃない。

彼の瞳はいつそう一途になる。

「嘘を吐くっていうのが不誠実だったかな。嘘というより夢を見せるっていう方が正確かもしれない。希望を失わないような、君の絶対の味方でいるよ」

私は下唇をぎゅうっと噛む。彼の与えようとしているものが『嘘』だから拒んでいる訳じゃない。

この人は、こんなに純粹だから社会の中にいられなくなったんだということを否が応でも再確認させられる。傷付けられて追い出された世界の外側で、私が押し付けた優しさの欠片を大儀そうに抱えて、感謝のしるしを示そうとしている。だけど彼が何かを与えようとすればするほど、私は肺の裏側の方が引き攣れたように痛む。何かを与えようとすることが私の息を詰まらせる。痺れるような切なさには拍車を掛ける。

私をこんなに苦しめるものが愛であるはずがない。じゃあ愛ってなんだ。愛がもっと分かりやすいものだったらよかったのに。

陸が上がった魚のように、口を開いてはまた閉じる。もどかしい、彼に伝えたい気持ちだが、気持ちの方が身体の内側で膨れ上がって、私の小さな口からは出ていかない。

あなたの気持は嬉しい、でもあなたがそんな事をする必要はないの、だってあなたが持てるすべてを差し出してくれることは、私を幸せにはしないから。

そう、たとえ彼が『嘘』以外の何を差し出したって私は悲しくなる一方なんだ。この気持ちを、どうか分かって。

いつの間にか熱い雫が幾筋も頬を伝っていた。困惑して、多分理由もわからないまま『ごめん』

と言おうとする彼に、必死に首を振って否定する。あなたが悪いんじゃない、自分もどかしいの、という言葉でさえ嗚咽と絡まって出てこない。悪くないんだから、謝らないで。

彼を困らせる自分の不甲斐なさが許せない。悔しくて、涙の筋があとからあとから上書きされていく。たとえ世界が彼を追放しても私は、私は世界の内側にいても彼を、彼に。

「しあわせに、なってよ、それがあなたにできる最大で唯一の愛よ」

喉の奥の方が勝手に跳ね上がるのが収まった一瞬の隙に、言葉が滑り出た。

ああそうだ、これが私の言いたかったことだ。

涙を流す私に困惑していた彼は一瞬呆けて、今度こそ本当に、いっそ情けないくらい困った顔をした。

「どうして、僕は君を幸せにしたいんだよ」

困り果てる彼の言葉を、私は無視した。しゃくりあげようとする喉元を無理やり沈めて大きく息を吸う。まだ臉の辺りは火照っているけれど、不思議と涙は止まった。手の甲で目元を拭う。手の平で頬を拭う。腫れぼったい目をできるだけしっかりと開ける。

私はこの人に、愛を知らないこの人に、私にとっての愛を教えてやらなければならぬ。

「自分を犠牲にするっていう愛の形が、世の中には確かに存在すると思う」

まだ落ち着かない呼吸を抑えるために、やや声が硬くなる。それでもゆっくりと、嚙んで含めるように。

「でもね、それだけが愛じゃないの」

人間は不思議だ。それは人間が社会性の動物だからなのかもしれないけれど、人間は誰かが幸せであることが救いになったりするのだ。分け与えなくていい、あなたが満たされていれば私も満たされる、ということが、人間にはある。その人が幸せでいてくれることで自分も幸せになれるのならば、私はその恩恵を『愛』と呼びたい。

そして、そうか、と気がついた。

笹原さんもきつとそうだ。彼女も彼が幸せであるようにと願って彼に与えていたんだろう。彼女の愛が彼に金品を与えていたのではなく、彼が彼女から受け取ってくれることで彼の愛を感じていた。だから彼女は与えていたのだ、単にリップサービスの対価としてではなく、どうしようもなく彼に幸せでいてほしいという究極の我が儘として。

私たちに愛を返したいと思うなら、あなたは幸せにならなければならない。

頭のいい彼は、私の言葉を理解して、項垂れた。

「僕は、幸せになれるかな。幸せになっても、いいんだらうか」

そういえば、私は彼が泣いたところを見たことがないな、と思いながら、初めて見る彼の涙には気づかないふりをすることにした。

「謙斗くんは幸せになっていいよ。あなたが幸せになるまで、私あなたのことずっと見守ってる

から」

尚も何か言いたげな彼に、私って嘘つくのすごく苦手なのよ、と笑って見せた。

どろぼうを始めたうそつきは、幸せになる頃にはきっと、どろぼうもうそつきもやめているだろう。

(法学部法学科三年)

総評 レベルが上がって来た東光原文学賞

選考委員長 小野 友道

第四回を迎えた東光原文学賞の審査を終え充実感とほっとした気分のなかでこの総評を書いて
いる。今回も西川盛雄委員、岩岡中正委員と私とで審査させて頂いた。二十一篇の応募があり、
図書館側の一次審査で残った八篇が各審査委員に送られてきた。三人で懸命にこの八篇を読ませ
て頂いた。この中からさらに個々の委員が四篇に絞り、それぞれの作品にコメントを付して、第
二次審査会に臨んだ。八篇全体の印象としては今回の作品レベルが過去に比して高く読み応えが
あり、全作品最後まで読みたいという気持ちを起こさせてくれたことに感謝したい。それは審査
委員が楽しめたことにはかならない。しかし一方で四篇に絞る責任の重さを感じたものである。

大賞は三人全員一致して「秘密都市」を推していた。メッセーj性が強く、構成もしっかりし
た作品で、セリフ「正義なんてお前に比べれば何の価値もない」が効いた。三月十一日の東北大
震災の後の価値観の変化、絆などに思いを馳せながらこの作品を読んだ。

作者のペンネーム「伊波 南」は熊本弁「いわなん」なのだろうかと考えたほどに批判性も鮮明だ。「ビューティフル・ライフ」は二票入った。一気に読ませる迫力があつた。姉のイメージを髣髴とさせる描写力など魅力的な作品であつた。「夜空にねがう」も二票で、若者の葛藤がくるくる変わる場面のなかで巧みに表現された好作品。「幕末のユーカラ」は審査員全員が四篇中に入れたが、皆同じ印象を持った。すなわち、力作であり、資料的な観点からもしっかりしていること。しかしながら、やや冗長で主人公が秋月なのだろうが、イペランケの前に少し霞んで焦点がぼやけたということである。次回の作品に期待したい。「うそつきの愛」面白い発想の作品。人をだますことの心理的葛藤をかなりうまく捉えた作品であつた。大賞一篇、優秀賞三篇を選ぶ作業が続く中、今回優秀賞として四篇を残したいという提案がなされた。このことは前述したように全体のレベルが高く、しかも拮抗していたことにほかならない。即座に四つを優秀賞にすることで一致した。今回選ばれた作者は、西岡・岩岡両審査委員の講評を読みさらに精進して頂きたい。きっとさらにすばらしい作品を生み出すきっかけとなるであろう。

原稿には、なおそれぞれに推敲が不足している点が否めない。ワープロミスも認められた。推敲は限りがない作業であるが、ぎりぎりまで絞り込む努力で作品がさらに輝きを増すはずである。更なる飛躍を期待して止まない。

さて、東光原文学賞も来年は五回を迎える。主催者の熊本大学附属図書館側から、審査委員の一部交代が提案され、審査委員会も同じ思いを抱いていたので、次回から新審査体制で学生諸君からの応募を待つことになる。来年も多くの作品が集まることを願って総評とする。

●小野 友道（おの・ともみち）

熊本保健科学大学学長、熊本大学顧問・名誉教授、皮膚科医。

一般向け著書…『人の魂は皮膚にあるのか』（主婦の友社、2002）、熊日出版文化賞受賞、『五足の靴の旅ものがたり』（熊日出版、2007）、『オムツを穿いたネコ』（責任編集、熊本保健科学大学ブックレット1、2009）、『202本の桜―花びら遊びて』（責任編集・共著、熊本保健科学大学ブックレット2、2010）、『いれずみの文化誌』（河出書房新社、2010）

講評 「何を」「如何に」表現するか、への挑戦

選考委員 西川 盛雄

表現者は同時に伝達者でもある。「何を」「如何に」読者に伝達するかは作品全体を通した（こ
とば）の中に暗示される。作品はただ直截的な出来事の記録や記憶の断片の羅列ではない。フィ
クションならではの「物語（ストーリー）」を形成する手法の中にメッセージを秘めることがで
きるのである。その際、東光原文学賞の趣旨からみて、斬新な構想力（イマジネーション）を豊
にし、基本的な文章作成上の約束を守り、地の文と会話体あるいは引用のレイアウトを守り、全
体としての文章構成能力が問われる。

本年度はこれまでになく「激戦」であった。レベルが高い作品が揃ったということである。そ
して作品の一長一短に関して、短の方で惜しまれる作品もみられた。大賞は選考委員三人とも
「秘密都市」を推した。私はこの作品について「今次の大震災、津波、原発事故の猛威を背景に
おき、作者は土地を離れられない人々のヴァーナキュラー（土着的）な心理と、両者とも孤児で
あるミンとカジゴリの関係を軸に物語全体をよくまとめている。フィクションではあるがその中
で響く人間のリアリティのメッセージ性は高い。人が作った神々怪物の寓意はこの作品を現代性

豊かなものにしてゐる。」と解題した。

優秀賞には同じく三選考委員とも「幕末のユーカラ」を推したが、この作者は知識が豊富で力量はありながらも前半の北海道アイヌのコタン（村）を舞台にした部分と後半の夢幻的な描写の脈略が希薄になり、作品としての説得力を弱め、旧制の第五高等学校やラフカディオ・ハーン（小泉八雲）に縁の深かった秋月悌次郎の扱いが中途半端で作品の価値をやや下げてしまった感のあることが惜しまれた。

他に複数の選考委員が推した作品として「ビューティフル・ライフ」と「夜空にねがう」があった。前者はストーリー展開がテーマとよくマッチしており、話の運びも軽快であった。文学が時代や人間の心理を映す鏡であるとするならば、この作品は現代を証す美とそうでないものとの合わせ鏡のようであった。後者は母親に繋がる芸術（ここでは絵画）と父親に繋がる実生活の二つの異なる極の狭間で悩む主人公の描写に優れ、その間に象徴的な「和み川」を設定している視点は興味深い。さらに作品「うそつきの愛」は日常に潜む「へやさしさ」の危うさを扱ってチャレンジングであった。「私」と「御崎謙人」の二人の会話はやや冗漫だが作者は思考の流れの描写に優れ、柔らかな筋（プロット）の運びの中に「うそ」を仕事として行爲する人の巧みな心理描写は捨てがたく、この作品も優秀賞を得た。

総じて最終選考に残った作品は執筆者それぞれの誠実な執筆態度に好感がもてた。気になったのは作者（表現者）である「私」が読者をどう考えているかということである。伝達する手法としての推敲のことである。良い作品にはことばにのちが宿り、リズムと勢いがある。そして端

的な美しさがある。作品を満たす適度な緊張感が読者に媚びず、さりとして独善に陥らないためにも自分なりの文体を模索する必要があるだろう。小説は（詩歌もそうであるが）表現者は「何を」に加えて「如何に」の問題を課題として文体や推敲のことを今後さらに考えていってもらえれば幸いである。

●西川 盛雄（にしかわ・もりお）

熊本大学名誉教授、熊本大学・学術資料調査研究推進室客員教授、放送大学客員教授。
著書に、『ラフカディオ・ハーン再考』（共著、恒文社、1993）、『続ラフカディオ・ハーン再考』（編著、恒文社、1999）で熊日出版文化賞。『ハーン曼荼羅』（編著、北星堂、2008）、詩集『半月』（葦書房、1980）、『ことづて』（石風社、1989）、歌集『魚歌喪失』（雁書館、1983）、『風の行方』（砂小屋書房、1995）、熊本県民文芸賞・評論の部一席（1982）。

コメント

選考委員 岩岡 中正

今回で四回目を迎えるこの賞も、応募作品の量でも質でも安定してきた感がある。今回はそれぞれ個性的で粒ぞろいで、大賞一作品と、例年より一つ多く優秀賞四作品を選んだ。連続受賞者も出ていて、この賞によって、本学の文学的気運も少しづつ高まりつつあるようだ。この賞が、地域や全国の文学賞への登竜門になるように願うとともに、同時に、本学の学生教職員の「ことばの力」と文化力・人間力の向上に役立つことを期待している。

大賞の「秘密基地」は、選考委員全員一致の文句なしの受賞だった。原発を思わせるテーマで、現代文明への警告を物語化した作品。文明的な批判精神と文学性を調和させた構想力を評価したい。過剰な文明の結末とそれを生んだ現代社会の虚構性に対して、二人の作中人物を通して、けっして声高ではないトーンでヒューマニズムが語られている。文章もストーリー展開も無理がなく読みやすい。

優秀賞のうちの「ビューティフル・ライフ」は、詐欺商法という今日的なテーマの作品。ちょっとコミカルなところが魅力。ストーリー展開も軽快で、文章表現には無駄がなく、表現力もある。

テーマについての考証もよくなされており、ちょっとした社会風刺もあって楽しい。ただ、少し手慣れすぎた印象もある。

優秀賞の「夜空にねがう」は、父や教師との葛藤や生母への母恋を通して、美術によって自我に目覚めていく若者の心理の過程が丁寧を描けている。ただ、若者に共通の抑圧された意識は出ているものの、芸術と世間との対立とその克服といった設定は、やや陳腐か。場面の展開に工夫があつて良かったが、時々言葉や表現に甘いところもあった。

優秀賞の「うそつきの愛」は、心理描写が丁寧で、嘘や虚実をめぐる内面の葛藤がよく描けていて、作者の人間性もまたよく出ている。ただ、主人公と謙人との再会など、ストーリー展開に不自然なところがあることも否めない。

優秀賞の「幕末のユーカラ」は、歴史考証がしっかりした歴史小説。しかし、後半部分がやや冗長な印象で、全体として秋月伝なら秋月伝に徹するか、エンターテインメントに徹するならそうするか、全体構想をどちらかはっきりした方がいいのだが、両者が混在している点が、惜しまれる。

全体として、①ストーリーを構想しこれを展開する力と、②それを表現する文章力・表現力の

両方の力が必要なのだが、これはなかなか困難な課題である。今後とも、この両者を兼ね備えた作品へ向けてさらに精進し、来年も挑戦してほしい。

●岩岡 中正（いわおか・なかまさ）

熊本大学法学部教授、大学院社会文化科学研究科長。 (社)日本伝統俳句協会理事。著書に『詩の政治学—イギリス・ロマン主義政治思想研究』（木鐸社、1990）、『転換期の俳句と思想』（朝日新聞社、2002）『石牟礼道子の世界』（編著、弦書房、2006）、『ロマン主義から石牟礼道子へ』（木鐸社、2007）、『虚子と現代』（角川書店、2010）で第11回山本健吉文学賞・評論部門。句集『春雪』（ふらんす堂、2008）で、第50回熊日文学賞。

第四回熊本大学東光原文学賞作品集

発行日 二〇一二年三月三十一日

編集・発行 熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷